

秋田県文化財調査報告書第231集

一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

— 萱刈沢Ⅰ遺跡・萱刈沢Ⅱ遺跡 —

1993・3

秋田県教育委員会

一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

— 萱刈沢Ⅰ遺跡・萱刈沢Ⅱ遺跡 —

1993・3

秋田県教育委員会



1. 萱刈沢 I 遺跡調査風景 (1)



2. 萱刈沢 I 遺跡調査風景 (2)



1. 董刈沢 I 遺跡遺物出土狀況 (1)



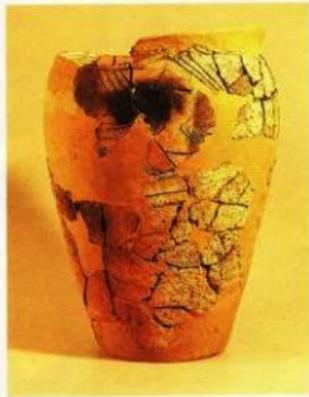
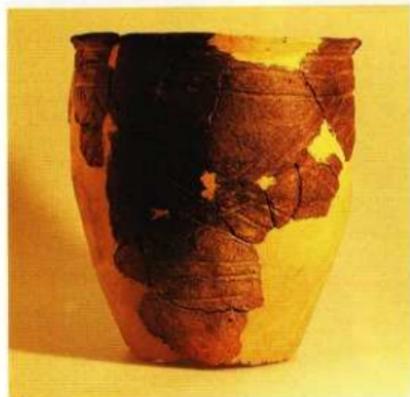
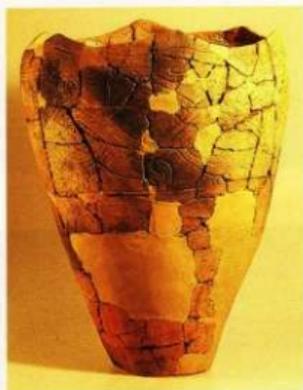
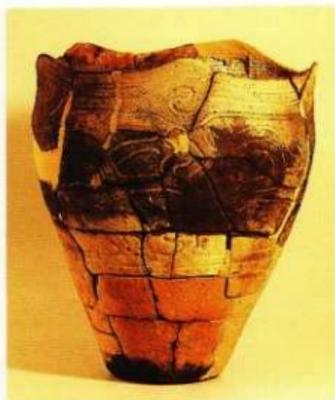
2. 董刈沢 I 遺跡遺物出土狀況 (2)



1. 壹刈沢 I 遺跡遺物出土狀況 (3)



2. 壹刈沢 I 遺跡遺物出土狀況 (4)



壹刈沢I遺跡出土遺物(1)



壹刈沢 I 遺跡出土遺物 (2) - 土偶



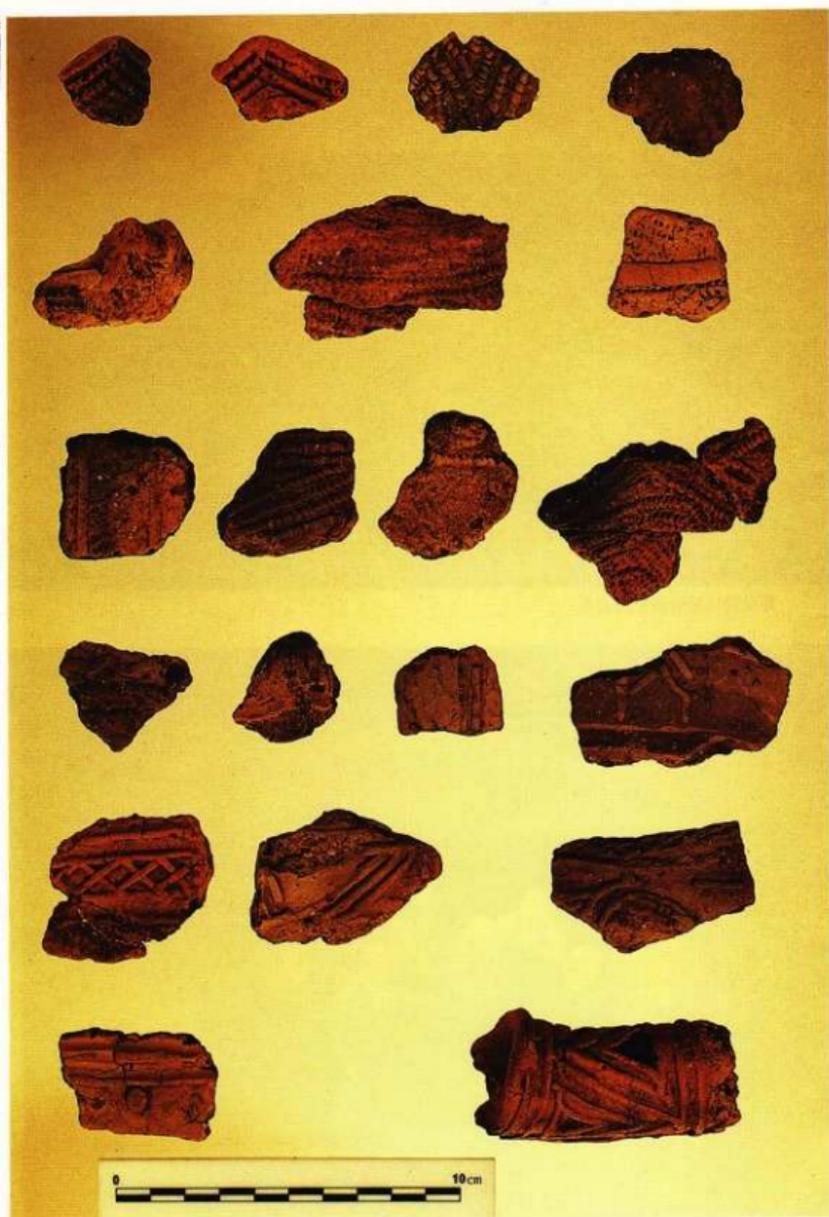
萱刈沢 1 遺跡出土遺物 (3) - 軽石製品・環状石斧



1. 葦刈沢II遺跡調査区遠景



2. 葦刈沢II遺跡SKF09



董刘沢Ⅱ遺跡出土遺物－北陸系土器

序

秋田県には、先人の残した多くの文化財があります。これらの文化遺産は、現代に生きるわたしたちの責任で保護し、未来に継承していくべきものであります。

このほど建設省東北地方建設局能代工事事務所により一般国道7号琴丘能代道路が計画されました。この工事は周知の遺跡である萱刈沢遺跡にかかることが判明し、工事に先立って発掘調査を実施いたしました。

その結果、萱刈沢Ⅰ遺跡では沢の中から縄文時代後期前葉の捨場が発見され、大量の土器・石器等の遺物が出土しました。このような沢地は、従来発掘調査の対象からはずされがちであった所であり、調査の必要性を再認識することとなりました。また、萱刈沢Ⅱ遺跡からは縄文時代前期から中期にかけての竪穴住居跡、フラスコ状土坑等が発見されるとともに北陸系の土器が出土し、彼の地との交流が5千年以前から行われていたことが明らかになりました。

本書はこの成果をまとめたものでありますが、文化財に対する御理解と歴史研究の上でいささかでも役立てば幸いと存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで御指導、御協力下さった建設省東北地方建設局能代工事事務所、八竜町教育委員会ならびに関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成5年3月10日

秋田県教育委員会

教育長 橋本 顕 信

例 言

- 1 本書は、秋田県教育委員会が主体となって調査を行った萱刈沢Ⅰ遺跡・萱刈沢Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書の編集・執筆は小畑 巖が行った。本書の作成にあたり、遺物写真の撮影及び現像・焼付は小林 克が行い、遺物の復元・実測・トレース図の作成は多くの整理作業員さんの手になるものである。
- 3 萱刈沢Ⅰ遺跡出土の遺物（土器・土製品・石器のほとんど）の実測図の作成にあたっては、シン航空写真株式会社作成の正射投影写真を利用した。
- 4 付編「萱刈沢Ⅱ遺跡の土壌に残存する脂肪の分析」は、株式会社スコージャによる分析報告書である。
- 5 土層及び遺物の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帳』を使用した。
- 6 周辺の遺跡図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地形図である。

凡 例

- 1 遺構及び遺物実測図の縮尺は、各挿図ごとにスケールの近くに付してある。何も記載のないものの縮尺については、任意である。
- 2 遺構に付した番号は、調査時のものを変えずに使用しているが、略号については報告時に変更したものがある。その場合は、遺構名の後に括弧付けて調査時の遺構名を付した。

なお、遺構略号は以下のとおりである。

SI（竪穴住居跡） SK（土坑） SKF（袋状土坑・フラスコ状土坑）
SD（溝状遺構） SKP（柱穴様ピット）

- 3 挿図中に使用したスクリーンパターンは、次のとおりである。



地 山



坑 土



炭化物



アスファルト



磨り面



凹部



被熱面



土 器



石 器

目次

序	i
例言・凡例	ii
目次	iii
はじめに	1
調査に至る経過	1
調査要項	2
周辺の地形	4
周辺の遺跡	6
《萱刈沢Ⅰ遺跡》	
第1章 調査の概要	9
第1節 遺跡の概観	9
第2節 調査の方法	9
第3節 調査の経過	11
第2章 調査の記録	13
第1節 遺跡の基本土層	13
第2節 出土遺物	13
第3章 まとめ	85
《萱刈沢Ⅱ遺跡》	
第1章 調査の概要	109
第1節 遺跡の概観	109
第2節 調査の方法	109
第3節 調査の経過	111
第2章 調査の記録	115
第1節 遺跡の基本土層	115
第2節 検出遺構と出土遺物	115
第3節 遺構外出土遺物	146
第3章 まとめ	158
付 編 萱刈沢Ⅱ遺跡の土壌に残存する脂肪の分析	181

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1	第29図 第Ⅲ群土器壺B類 (90~92)・壺C類 (93~101)	41
第2図 壹刈沢Ⅰ・壹刈沢Ⅱ遺跡周辺地形及び調査区	3	第30図 第Ⅲ群土器壺D類 (102~106)・壺E類 (107~115)	42
第3図 周辺の地形図	5	第31図 第Ⅲ群土器浅鉢A類 (116・117)・浅鉢B類 (118)・浅鉢C類 (119~121)・浅鉢D類 (122・123)・浅鉢E類 (124・125)	44
第4図 周辺の遺跡図	7	第32図 第Ⅲ群土器台付浅鉢A類 (126)・台付浅鉢B類 (127)・台付浅鉢脚部 (128~131)	45
壹刈沢Ⅰ遺跡		第33図 第Ⅲ群土器	46
第5図 壹刈沢Ⅰ遺跡グリッド配置図	10	第34図 第Ⅲ群土器	47
第6図 基本土層図	13	第35図 第Ⅲ群土器	48
第7図 調査終了時の地形測量図	14	第36図 第Ⅲ群土器	49
第8図 グリッド別州土土器個体数	15	第37図 第Ⅲ群土器	50
第9図 第Ⅰ群、第Ⅱ群土器	16	第38図 第Ⅲ群土器	51
第10図 第Ⅱ群土器 (9~11)、第Ⅲ群土器深鉢A類 (12~16)	17	第39図 第Ⅲ群土器	52
第11図 第Ⅲ群土器深鉢B類	19	第40図 第Ⅲ群土器	53
第12図 第Ⅲ群土器深鉢B類	20	第41図 第Ⅲ群土器	54
第13図 第Ⅲ群土器深鉢B類	21	第42図 ミニチュア土器	55
第14図 第Ⅲ群土器深鉢B類 (30)・深鉢C類 (31・32)	22	第43図 第Ⅳ群土器	55
第15図 第Ⅲ群土器深鉢C類	24	第44図 土製品 (1) - 土偶	57
第16図 第Ⅲ群土器深鉢C類	25	第45図 土製品 (2) - 土偶	58
第17図 第Ⅲ群土器深鉢C類 (39)・深鉢D類 (40・41)	26	第46図 土製品 (3) - 土偶	59・60
第18図 第Ⅲ群土器深鉢D類	27	第47図 土製品 (4) - 彫形土製品・土鏝・飯伏土製品	61
第19図 第Ⅲ群土器深鉢D類	28	第48図 グリッド別右器出土状況	62
第20図 第Ⅲ群土器深鉢D類	29	第49図 出土石器 (1)	63
第21図 第Ⅲ群土器深鉢D類 (52・53)・深鉢E類 (54~56)	31	第50図 出土石器 (2)	65
第22図 第Ⅲ群土器深鉢E類	32	第51図 出土石器 (3)	66
第23図 第Ⅲ群土器深鉢E類	33	第52図 出土石器 (4)	67
第24図 第Ⅲ群土器深鉢F類	34	第53図 出土石器 (5)	68
第25図 第Ⅲ群土器深鉢G類	35	第54図 出土石器 (6)	69
第26図 第Ⅲ群土器深鉢G類	36	第55図 出土石器 (7)	70
第27図 第Ⅲ群土器壺A類	39	第56図 出土石器 (8)	71
第28図 第Ⅲ群土器壺B類	40	第57図 出土石器 (9)	72

第58図	出土石器 (10)	73	第77図	S K F 68・09 フラスコ状土坑実測図	127
第59図	出土石器 (11)	74	第78図	S K F 21 フラスコ状土坑実測図	129
第60図	出土石器 (12)	75	第79図	S K 11・15・24土坑実測図	130
第61図	出土石器 (13)	77	第80図	S K 13・16土坑実測図	131
第62図	出土石器 (14)	78	第81図	S D 01・02溝状遺構実測図	133・134
第63図	出土石器 (15)	79	第82図	斜面部遺構内出土遺物	135
第64図	出土石器 (16)	80	第83図	S I 05竪穴住居跡実測図	137・138
第65図	出土石器 (17)	81	第84図	S I 17竪穴住居跡・S K 28土坑実測図	140
第66図	出土石器 (18)	82	第85図	S I 17竪穴住居跡遺物出土状況図	141
第67図	出土石器 (19)	83	第86図	S K 10土坑実測図	143
第68図	出土石器 (20)	84	第87図	柱穴実測図	144
萱刈沢Ⅱ遺跡			第88図	下位面遺構内出土遺物 (1)	145
第69図	萱刈沢Ⅱ遺跡グリッド配設図	110	第89図	下位面遺構内出土遺物 (2)	146
第70図	萱刈沢Ⅱ遺跡遺構配置図	113・114	第90図	遺構内出土石器	147
第71図	萱刈沢Ⅱ遺跡基本土層図	115	第91図	遺構外出土遺物 (1)	149
第72図	S I 25竪穴住居跡実測図	117・118	第92図	遺構外出土遺物 (2)	150
第73図	上位面遺構内出土遺物	120	第93図	遺構外出土遺物 (3)	152
第74図	S I 03・04・19竪穴住居跡・S K 18 土坑実測図	121・122	第94図	遺構外出土遺物 (4)	153
第75図	S K F 06 フラスコ状土坑実測図	123・124	第95図	遺構外出土遺物 (5)	154
第76図	S K F 07 フラスコ状土坑実測図	125	第96図	遺構外出土遺物 (6)	155
			第97図	遺構外出土遺物 (7)	156

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	8	第2表	萱刈沢Ⅱ遺跡出土石器計開表	157
-----	----------	---	-----	---------------	-----

図 版 目 次

巻頭図版 1	1. 萱刈沢Ⅰ遺跡調査風景 (1)	巻頭図版 5	萱刈沢Ⅰ遺跡出土遺物 (2) - 土偶
	2. 萱刈沢Ⅰ遺跡調査風景 (2)	巻頭図版 6	萱刈沢Ⅰ遺跡出土遺物 (3) - 軽石製品・ 竪状石斧
巻頭図版 2	1. 萱刈沢Ⅰ遺跡遺物出土状況 (1)	巻頭図版 7	1. 萱刈沢Ⅱ遺跡調査区透景 2. 萱刈沢Ⅱ遺跡SKF09
	2. 萱刈沢Ⅰ遺跡遺物出土状況 (2)	巻頭図版 8	萱刈沢Ⅱ遺跡出土遺物 - 北陸系土器
巻頭図版 3	1. 萱刈沢Ⅰ遺跡遺物出土状況 (3)		萱刈沢Ⅰ遺跡
	2. 萱刈沢Ⅰ遺跡遺物出土状況 (4)		
巻頭図版 4	萱刈沢Ⅰ遺跡出土遺物 (1)		

- 図版 1 1. 壹刈沢 I 遺跡調査前の状況 (西から)
2. 壹刈沢 I 遺跡調査状況① (北東から)
- 図版 2 1. 壹刈沢 I 遺跡調査状況② (北東から)
2. 壹刈沢 I 遺跡調査終了後の状況 (南から)
- 図版 3 1. 遺物出土状況① (LTS3グリッド)
2. 遺物出土状況② (LS52グリッド)
3. 遺物出土状況③ (LS51グリッド)
- 図版 4 1. 遺物出土状況④ (MC51グリッド)
2. 遺物出土状況⑤—土偶 (LS52グリッド)
3. 遺物出土状況⑥—龍石製品 (LS52グリッド)
- 図版 5 出土遺物 (1)
- 図版 6 出土遺物 (2)
- 図版 7 出土遺物 (3)
- 図版 8 出土遺物 (4)
- 図版 9 出土遺物 (5)
- 図版10 出土遺物 (6)
- 図版11 出土遺物 (7)
- 図版12 出土遺物 (8)
- 図版13 出土遺物 (9)
- 図版14 出土遺物 (10)
- 図版15 出土遺物 (11)
- 図版16 出土遺物 (12)
- 図版17 出土遺物 (13)
- 図版18 出土遺物 (14)
- 図版19 出土遺物 (15)
- 図版20 出土遺物 (16)
- 壹刈沢 II 遺跡
- 図版21 1. 壹刈沢 II 遺跡調査前近景 (南西から)
2. 上位面調査終了後近景 (南から)
- 図版22 1. 斜面部調査状況 (北東から)
2. 下位面調査終了後近景 (東から)
- 図版23 1. SI25土層断面 (北西から)
2. SI25完掘状況 (南から)
- 図版24 1. SI25完掘状況 (西から)
2. SI03・04・19検出状況 (西から)
- 図版25 1. SI03・04・19土層断面 (北から)
2. SI03・04・19完掘状況 (西から)
- 図版26 1. SI03・04・19内土坑土層断面 (北西から)
2. SI03・04・19内土坑土層断面 (西から)
3. SI03・04・19内土坑完掘状況 (西から)
- 図版27 1. SKF06検出状況 (東から)
2. SKF06土層断面 (西から)
3. SKF06調査状況 (南から)
- 図版28 1. SKF06完掘状況 (西から)
2. SKF07遺物出土状況 (西から)
3. SKF09土層断面 (西から)
- 図版29 1. SKF07 (左)・SKF09 (右) 完掘状況 (西から)
2. SKF08遺物出土状況 (北西から)
3. SKF08土層断面 (北西から)
- 図版30 1. SKF08完掘状況 (南から)
2. SKF21検出状況 (南から)
3. SKF21土層断面 (南から)
- 図版31 1. SK11完掘状況 (南から)
2. SK13完掘状況 (南西から)
3. SK15完掘状況 (南から)
- 図版32 1. SK16土層断面 (東から)
2. SK16完掘状況 (東から)
3. SK24完掘状況 (西から)
- 図版33 1. SD01・02全景及び土坑群 (東から)
2. SD01土層断面 (西から)
- 図版34 1. SI05完掘状況 (西から)
2. SI05地床铲除検出状況 (西から)
- 図版35 1. SI17・SK28検出状況 (東から)
2. SI17土層断面 (東から)
- 図版36 1. SI17遺物出土状況 (東から)
2. SI17・SK28完掘状況 (東から)
- 図版37 1. SK10土層断面 (南から)
2. SK10完掘状況 (北から)
3. 調査風景
- 図版38 1. 壹刈沢 II 遺跡第 I 群土器 (裏面)
2. 壹刈沢 II 遺跡第 I 群土器 (裏面)
- 図版39 壹刈沢 II 遺跡第 II 群土器 (北陸系)
- 図版40 壹刈沢 II 遺跡第 III 群土器 (上)・出土石器 (F)

はじめに

調査に至る経過

一般国道7号琴丘能代道路は、現在の国道7号線に代わって、輸送幹線道路としての機能を拡大・強化することを目的として、建設省東北建設局能代工事事務所から計画が提出されたものである。昭和57年度に一般国道7号八竜能代道路として計画説明がなされたが、平成元年度に事業計画が変更された。その結果、山本郡琴丘町鹿渡地内から能代市浅内地内に至る延長17kmが計画路線となった。

計画路線が示された段階で、秋田県教育委員会と建設省東北建設局能代工事事務所は協議を経て、路線上での分布調査を行い、現状保存が不可能な遺跡については発掘調査による記録保存の措置を講ずることとした。

秋田県教育委員会では、昭和60年から分布調査と範囲確認調査を継続的にを行い、昭和60年に8遺跡（北から寒川Ⅱ、寒川Ⅰ、十二林、石丁、福田、萱刈沢Ⅱ、萱刈沢Ⅰ、館の上）を確認した。昭和61年には、十二林遺跡と石丁遺跡の間に蟹子沢遺跡を新たに発見している。事業計画の変更に伴い、平成元年には萱刈沢Ⅱ遺跡の北側に鴨子台、八幡台の2遺跡を確認している。発掘調査は、用地買収の完了した能代市側から実施され、昭和61年に寒川Ⅰ、寒川Ⅱ、昭和62年に十二林、蟹子沢、石丁、福田の各遺跡について行われ、発掘調査報告書もすでに刊行されている。

本報告書にとりあげる萱刈沢Ⅱ遺跡は平成元年に、萱刈沢Ⅰ遺跡は1年置いた平成3年に発掘調査が実施されたものである。両遺跡とも盛土工法が採用されることから、掘削を受ける工事用道路と橋脚部分のみ調査を行うことが協議



第1図 遺跡位置図

により決定され、調査対象面積は当初より大幅に減少している。

註) 館の上遺跡は、その中に中世城館を含んでおり、1990(平成2)年発行の秋田県遺跡地図(中央版)では館跡の範囲を新たに線引きし、館の上遺跡と館の上館を区別している。

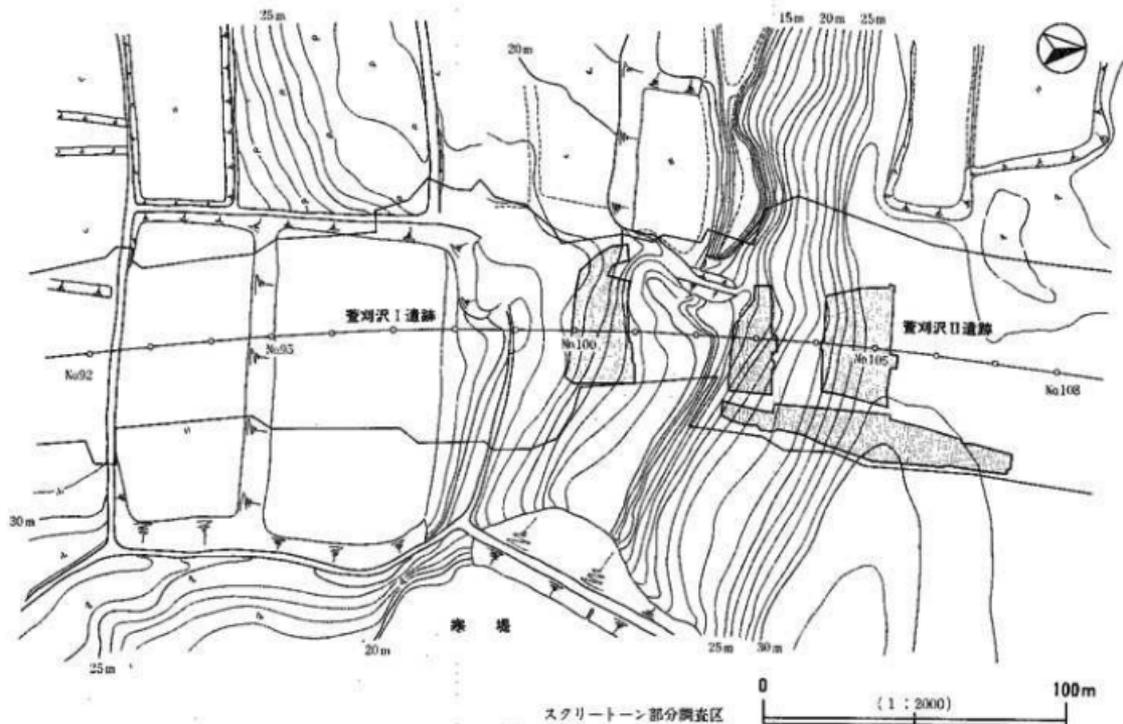
調査要項

1. 萱刈沢Ⅰ遺跡

遺跡名称	萱刈沢Ⅰ遺跡 ※遺跡略号 3KKZ-I
所在地	秋田県山本郡八竜町鶴川字萱刈沢7-2外
遺跡状況	山林
調査対象面積	800m ²
調査面積	800m ²
遺跡性格	縄文時代遺物散布地
遺跡時期	縄文時代
調査目的	一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る事前調査
調査期間	平成3年10月14日～11月15日
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	庄内昭男(秋田県埋蔵文化財センター文化財主査) 小畑 巖(秋田県埋蔵文化財センター学芸主事)
総務担当者	佐田 茂(秋田県埋蔵文化財センター主査 平成4年3月転出) 皆川 清(秋田県埋蔵文化財センター主査 平成4年4月転入) 佐々木 真(秋田県埋蔵文化財センター主任)
調査協力機関	建設省東北地方建設局能代工事事務所 八竜町教育委員会

2. 萱刈沢Ⅱ遺跡

遺跡名称	萱刈沢Ⅱ遺跡 ※遺跡略号 3KKZ-II
所在地	秋田県山本郡八竜町鶴川字萱刈沢5-1外
遺跡状況	山林、原野
調査対象面積	2,000m ²
調査面積	2,000m ²
遺跡性格	縄文時代集落、平安時代集落



第2図 菅刈沢 I・菅刈沢 II 遺跡周辺地形及び調査区

遺 跡 時 期	縄文時代、平安時代
調 査 目 的	一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る事前調査
調 査 期 間	平成元年10月2日～11月30日
調 査 主 体 者	秋田県教育委員会
調 査 担 当 者	高橋忠彦、小林 克、栗沢光男 (以上 秋田県埋蔵文化財センター文化財主事) 利部 修、柴 一郎、小畑 巖、高橋 学、谷地 薫、武藤祐浩 (以上 秋田県埋蔵文化財センター学芸主事) 和泉昭一、小山内 透、鎌田 茂、藤原 司、三浦光男、吉田 真 (以上 秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員)
総 務 担 当 者	佐田 茂 (秋田県埋蔵文化財センター主査 平成4年3月転出) 皆川 清 (秋田県埋蔵文化財センター主査 平成4年4月転入) 佐々木 真 (秋田県埋蔵文化財センター主任 平成3年4月転入) 高橋忠太郎 (秋田県埋蔵文化財センター主事 平成3年3月転出)
調 査 協 力 機 関	建設省東北地方建設局能代工事事務所 八竜町教育委員会

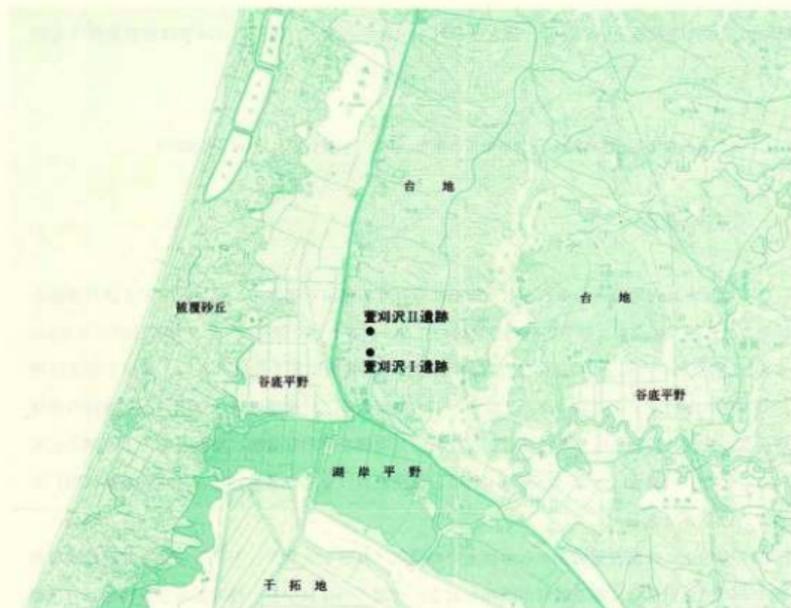
周辺の地形

東から西へ地形を概観すると、山地、丘陵地、台地、低地の4つに分けることができ、低地の西には日本海が広がっている。

山地は、奥羽脊梁山地から分岐する太平山山地の北の延長に位置するものであり、日本海海岸線の方向に平行するように南北に長く発達している。北から七座山山地、房中山山地、房住山山地など標高300～400mの山地がみられる。

丘陵地は、いわゆる出羽丘陵と呼称される丘陵の一部であり、東部の山地と西部の台地に挟まれた地域である。東西の幅は約10kmに達し、標高により大きく2段に分けることができる。東部の山地に接する側には標高200m前後の丘陵地がみられ、北から羽立、谷地の沢、西の又の各丘陵地がある。西部の台地に接する側には標高100～150mの丘陵地がみられ、北から檜山・山本、石倉山、鹿渡の各丘陵地がある。

台地は、山地から西流して八郎潟に注ぐ三種川を境に北側ではよく発達し、志戸横野、金光寺野、成合などの台地がある。三種川の南側では、丘陵地と大湯人工干拓低地に挟まれて南北に細長く認められ、横長根、鹿渡などの台地がみられる。これらの台地には大きく4つの段丘



第3図 周辺の地形図

面が認められ、さらに第一段丘および第三段丘については上位と下位2面が認められる。各段丘面の標高は、第一段丘45~100m、第二段丘および第三段丘20~60m、第四段丘10~20mである。

低地は、鶴川川および三種川により形成された谷底平野（鶴川川低地、三種川低地）、浅内海岸低地、八郎潟湖岸低地と大潟人工干拓低地、日本海岸砂丘地などがみられる。浅内海岸低地は、東の成合台地と西の日本海岸砂丘に挟まれた低平な海岸低地である。東西の幅が1.1~1.5kmあり、標高8m前後である。日本海岸砂丘地は、日本海海岸線に沿って発達した砂丘地であり、東西の最大幅が1.7kmに達する。標高は、10数mから65mと起伏に富んでいる。この砂丘地の内側には大小の湖沼が認められ、北から小沼、浅内沼、蓮沼、赤沼などがある。これらは、砂丘地伏流水の溢出による湖沼である。

以上のように周辺の地形を概観してきたが、遺跡は、南北に長い成合台地の南よりに位置している。段丘面でいうと、第三段丘の上位面に相当する。この成合台地は、東の鶴川川低地と西の浅内海岸低地に挟まれた東西約2.3km、南北約8kmの台地である。台地の東縁は、鶴川川の支流の浸食により大小の谷が入り組んでいる。これに対して、台地西縁は直線的であり、浸食が広範囲に及んでいない。本台地の基盤層は潟西層と呼ばれ、温暖な気候下における高海

面期の沿岸性堆積物とされ、礫・砂および粘土・泥から成り、場所によっては泥炭を伴うものである。

(参考文献)

秋田県農政部長地整備課 『土地分類基本調査 森岳・羽後浜田』 1984 (昭和59年)

周辺の遺跡

ここでは成合台地南半を中心とした地域に所在する遺跡を概観し、萱刈沢ⅠおよびⅡ遺跡と関連のある縄文時代および平安時代の遺跡のうち、調査された遺跡について取り上げてみたい。なお、「調査に至る経過」の中で述べた琴丘能代道路建設に係る遺跡のうち、寒川Ⅰおよび寒川Ⅱ遺跡は寒川家上A遺跡(2)に含まれるものである。計画路線は、寒川家上A遺跡のほぼ中央部を南北に縦断するように通り、沢を挟んだ北側を寒川Ⅱ遺跡、南側を寒川Ⅰ遺跡としている。また、八幡台(8)、萱刈沢Ⅰ(10)、萱刈沢Ⅱ(9)の各遺跡は、萱刈沢遺跡(32)に含まれるものである。

成合台地上には旧石器時代から中世までの遺跡が分布しており、それらの分布状況は成合台地上の西側と南側に片寄る傾向が認められる。台地の西には小沼、浅内沼などの湖沼と日本海があり、南には八郎潟があることから、水上交通や魚介類などの食料の確保などの面からこのような分布傾向を示しているものと推測される。

縄文時代の遺跡では、寒川Ⅰ、寒川Ⅱ、萱刈沢貝塚(31)などがある。

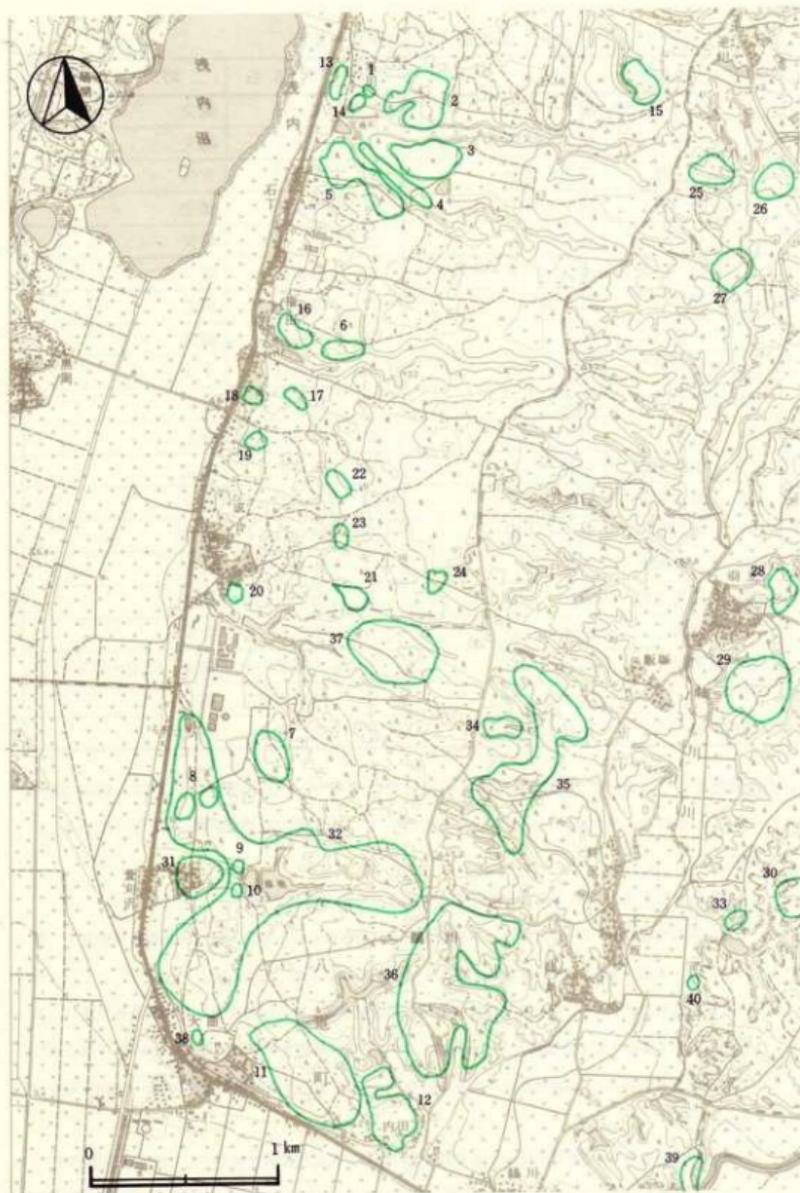
寒川Ⅰ遺跡では、早期末葉から前期初頭、中期から後期にかけての竪穴住居跡が検出され、集落が営まれていたことが明らかになっている。早期から前期初頭の竪穴住居跡周辺からは、石錘がまとまって出土していることから、この時期に漁撈活動が行われていたことが窺われる。

寒川Ⅱ遺跡は、特に続縄文文化期の土壌基の発見により注目された遺跡である。縄文時代では、前期末から中期初頭のフラスコ状土坑、中期末から後期初頭の竪穴住居跡などが発見されている。

萱刈沢貝塚は、これまで6回にわたって調査が行われ、前期末葉から中期中葉にかけて営まれた遺跡であることが明らかにされている。貝層は、竪穴住居跡やフラスコ状土坑の埋土上層に認められ、80%以上が汽水性のヤマトシジミにより占められている。貝層中には魚類の他に獣の骨も認められており、その食生活の基盤が多岐にわたっていたことが知られる。

平安時代の遺跡では、十二林(3)、福田(6)、前述の寒川Ⅱ遺跡などがある。

十二林遺跡は、10世紀初頭から11世紀代に営まれた集落であるが、須恵器窯、土器焼成遺構、製鉄炉が検出されており、生産遺跡としての性格が濃厚である。また、柱列や有溝柱列などの



第4図 周辺の遺跡図

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	寒川家上B	縄文・平安	21	成合B	縄文
2	寒川家上C	縄文・統縄文・平安	22	成合C	縄文
3	十二林	縄文・平安	23	成合D	古代
4	蟹子沢	縄文・平安・中近世	24	成合E	縄文
5	石丁	縄文	25	逆川	縄文
6	福田	縄文・平安・中世	26	五本松	縄文
7	鴨子台	旧石器	27	渡道	縄文
8	八幡台	縄文	28	館城	縄文
9	萱刈沢II	縄文・平安	29	保竜II	平安
10	萱刈沢I	縄文	30	和田I	縄文
11	館の上	縄文・平安	31	萱刈沢貝塚	縄文
12	館の上館	中世	32	萱刈沢	縄文
13	寒川家下	縄文	33	上大沢	弥生
14	寒川家上C	縄文・平安	34	舞台沢I	縄文
15	大館南沢	古代	35	舞台沢II	縄文
16	福田上野	古代	36	苗代沢台	縄文
17	頭無上I	古代	37	離沢	縄文
18	頭無上II	古代	38	大曲家の上	縄文・弥生・平安
19	向山	弥生	39	扇田谷地	縄文
20	成合A	縄文	40	放籠	統縄文

区画施設を伴うと推測される竪穴住居跡も発見されている。同様の竪穴住居跡は、福田遺跡でも発見されており、9世紀から10世紀前半にかけての集落の変遷が明らかになっている。

(参考文献)

- 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(中央版)』 1990(平成2年)
- 秋田県教育委員会 『一般国道7号八電能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡』 秋田県文化財調査報告書第167集 1988(昭和63年)
- 秋田県教育委員会 『一般国道7号八電能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡』 秋田県文化財調査報告書第178集 1989(平成元年)
- 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第103集 1983(昭和58年)
- 八電町教育委員会 『萱刈沢貝塚 山本郷八電町萱刈沢貝塚発掘調査報告書』 1979(昭和54年)
- 秋田県埋蔵文化財センター 『秋田県埋蔵文化財センター年報 3 昭和59年度』 1985(昭和60年)

萱刈沢 I 遺跡
(3KKZ-I)

第1章 調査の概要

第1節 遺跡の概観

萱刈沢Ⅰ遺跡は、北緯 $40^{\circ} 6' 38''$ 、東経 $140^{\circ} 0' 46''$ に位置する。能代市から国道7号線を秋田市方向に南下し、八竜町に入って間もなく萱刈沢の集落に至る。集落の北側にはやや大きな沢が形成されており、遺跡はその沢を東に500mほど逆上った右手の台地上に立地している。

台地は、沢に向かって若干張り出しており、その南北長は70~100m、東西長は約100mである。台地上は、耕作地の造成のため改変を受けており、原地形をとどめていない状況であった。地形図から原地形を推測すると、標高25~30mで北側の沢へ緩く傾斜する台地縁辺部と考えられる。

計画道路は、沢（北）に向かって張り出した台地の西側を南北に貫くように通り、その幅は50~70mである。平成元年5月に遺跡範囲確認調査が行われ、その結果沢寄りの $1,600\text{m}^2$ に遺構・遺物が広がっていることが明らかになった。その後、盛土工法がとられることから掘削を受ける橋脚部分のみが調査の対象とされた。調査区は、平成元年の範囲確認調査対象地の中やや北寄りにあり、沢に落ち込む北側斜面部にあたる。その範囲は、南北約20m、東西約40mである。標高は、台地縁辺部で約21m、沢の底面部で約14mであり、7mほどの比高差がある。

なお、本遺跡と沢を挟んだ北側の台地には萱刈沢Ⅱ遺跡が立地している。また、調査区の東約60mには寒堤と呼ばれる溜池が沢を利用して造られている。

第2節 調査の方法

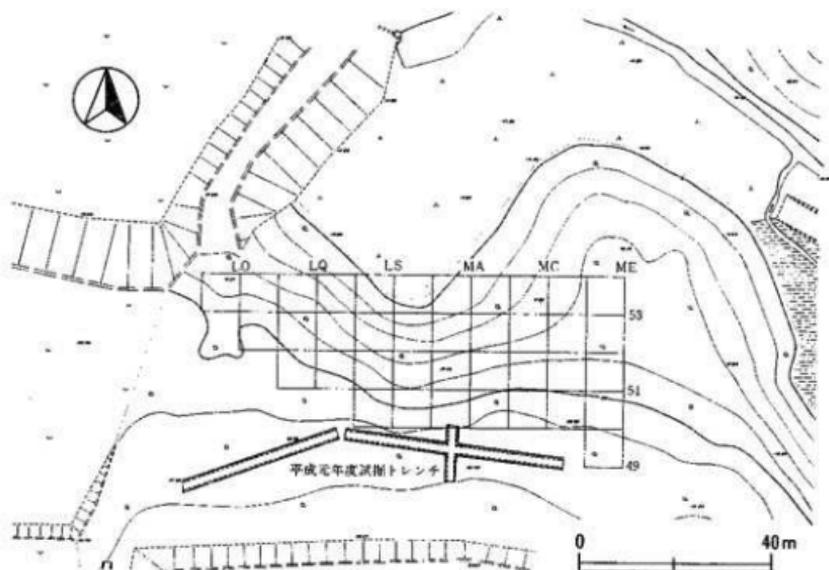
1. 調査区の設定

調査を計画的に進めるために、調査対象区に $4\text{m} \times 4\text{m}$ のグリッド（方眼）を設定した。

遺跡内に所在する道路計画センター杭No.100を原点として国家座標第X系座標北を求め、この座標北のラインを南北基線Y軸とし、これに直交するラインを東西基線X軸とした。基準交点No.100をMA50とし、Y軸に2桁の算用数字、X軸に2文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の杭で両者を組み合わせてグリッド名とした。

2. 発掘方法および記録の作成

調査区の大部分が斜面であることから、遺構検出の可能性が高い比較的平坦な面が認められる東側から着手し、順次西へ調査を進めていくこととした。



第5図 壹刈沢 I 遺跡グリッド配置図

遺跡の地形測量は、平板を用いて一部測量を行ったが、急斜面であることと悪天候のためやむを得ず変更し、グリッド杭ごとに地山面の標高を記録し、グリッド杭間の距離からコンターラインを割り出している。

遺物の取り上げは、主なものについて出土位置とレベルを記録し、小破片についてはグリッド名と層位のみ記録している。

写真による記録は、35mm判と6×4.5判のカメラを用いて行い、モノクローム、カラーリバーサル の2種類のフィルムを使用した。このほかに、ボラロイドカメラも適宜使用した。

3. 遺物整理の方法

出土した遺物は、コンテナ（内寸55×34×15cm）80箱分である。これらの遺物を洗浄し、出土位置、出土年月日等を注記後接合を行った。整理期間が限られていたことから、文様の複雑な土器・土製品と剥片石器については、シン航空写真株式会社作成の正射投影写真を直接トレースしている。

第3節 調査の経過

- 10月14日 調査区内の立木の伐採と下草刈りの作業と並行して、発掘機材の荷下ろし、プレハブハウスの設置を行った。
- 10月16日 粗掘りを開始。国立歴史民俗博物館 阿部義平教授来跡。
- 10月17日 ベルトコンベアーを稼働させて東側から粗掘りを続行中。地表面から地山までの深さは、49～51ラインまでは約30cm、51ライン以降徐々に深くなり60～70cmとなっている。遺物は、ME51・52グリッドの地山近くで出土している。
- 10月18日 MD～MFラインについて粗掘りの範囲を北側に拡張した。地表面からの深さは、90cmに達する。
- 10月19日 発掘機材収納用のプレハブが雨の中設置される。
- 10月22日 MD50～54、MC51～54グリッドについて粗掘りと遺物取り上げを行った。
- 10月24日 MC51・52、MD51・52グリッドで遺物がやや集中して出土し始める。MC52、MD52グリッドでは、黒褐色土→褐色土→黒色土の順に土層堆積がみられ、褐色土を挟んで上の黒褐色土から縄文後期の土器、下の黒色土から縄文中期の土器が出土している。このため、MDラインに土層観察用のベルトを設定し、それに沿ってトレンチ掘りを行ったところ、焼土と壁と思われる立ち上がりを検出した。しかし、床面が平坦でなく、しっかりしていないことから、遺構と断定できないでいる。
- 国立歴史民俗博物館 西本豊弘助教授来跡。
- 10月25日 雨のため、遺構検出作業を断念し、MBライン以西の粗掘りのみ行う。MB～MAライン間の遺物の密度はやや希薄になっている。
- L T～L Rライン間は斜面の傾斜が急になっており、小さな沢が入っていることが予想された。この部分の土量を考えると、排土場所を確保することが問題として浮上してきた。そこで、寒堤からの流水を考慮して斜面上方に排土していたものを、斜面下方に行くこととし、その排土は調査終了後に建設省側で調査区内に戻してもらうこととした。
- 10月28日 MA～L Sラインの粗掘りを行った。L T52グリッド杭を中心とする4グリッドからの遺物出土量が著しく多い。遺物は、縄文後期の土器が多く、それに石器も伴っている。
- 10月30日 沢部分の遺物包含層の厚さは1 m50cmを越えており、作業の進捗状況はかなり遅れている。
- 11月2日 L S51・52グリッドⅢ層中で焼土を検出した。平面図を作成し断面を観察したと

ころ、その場所で火を使用した痕跡が見られず、土器等の遺物とともに捨てられたものであることが推定された。また、9日までの調査期間を15日まで延長することになった。

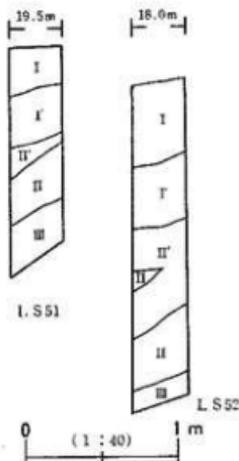
- 11月5日 LP53・54、LQ53・54グリッドについては、寒堤の遊水池の堤にあたることから、トレンチを入れて様子を見ることとした。北西から南東方向に幅1mのトレンチを入れて遺構・遺物の検出にあたったが皆無であった。このため、この範囲についてはトレンチを入れるにとどめた。
- 11月6日 LR54グリッドⅢ層中で石を円盤状に加工し、中央部に穴をあけた石製品が出土した。弥生時代の環状石斧に形態が似ている。
- 11月7日 沢部分の上層の記録をグリッド杭で残った土の柱を参考に行った。その結果、Ⅰ層：黒色土、Ⅱ層：褐色土、Ⅲ層：黒色土、Ⅳ層が黄褐色地山となっており、Ⅰ層とⅡ層の間に部分的に黒褐色土が、そしてⅢ層中に崩落した地山土が部分的にみられる。また、これまでⅡ層として遺物を取り上げてきたものが、実はⅢ層であることが判明した。そこで、明日からの取り上げ層位の記載は、本日明らかになった基本層位に沿ったものに改めることとした。
- 11月8日 MC51グリッド杭を中心とする4グリッドについては、10月24日の調査以来住居跡等遺構の存在が予想されていたが、これまでの調査の結果やや急に落ち込む斜面に倒木根が重なっていたことが明らかになった。倒木根は、褐色土（マウンド）の周囲に焼土及び黒色土が観察され、その中から縄文後期の遺物が出土している。褐色土の中からは遺物はほとんど出土していない。
- 11月12日 MDラインに設定した土層観察用ベルト断面の写真撮影と実測を行った。また、沢から出土している遺物の取り上げを終日行った。
- 11月14日 調査区全景の写真撮影のため午前中に全体の精査を行い、午後写真を撮影した。撮影後、基本土層図の作成、地形測量、遺物の取り上げを行った。
- 11月15日 地形測量と遺物の取り上げを行い、ベルトコンベアー等を斜面上方に運び上げて調査を終了した。

第2章 調査の記録

第1節 遺跡の基本土層

調査区は、北に面した斜面部にあたり、の中で地形に若干の違いがみられる。東側は傾斜面の下方に平坦な面が認められ、一方の西側では沢の切れ込みは小さいが比高差のある沢地形となっている。土の堆積状況は、この地形により影響を受けていると推測される。すなわち、東側では土の堆積状況にそれほど複雑さは認められないが、西側では崩落と思われる部分的な土の堆積が多く認められた。また、東側では地山漸移層が認められたが、西側の沢の中では認められなかった。

第6図には沢の中のLS51,LS52グリッドの土層図を示した。I～III層に大別され、I・I'層は黒色(10YR2/1)ないし黒褐色(10YR2/2)の表土であり、I層中には木の根が多く入り込んでいる。II・II'層は暗褐色土(10YR3/3～3/4)を呈し、地山粒を含むことから崩落土と推測される。III層は、黒褐色(10YR3/2)の土層であるが、その中に地山の崩落土が部分的に認められる。



第6図 基本土層図

第2節 出土遺物

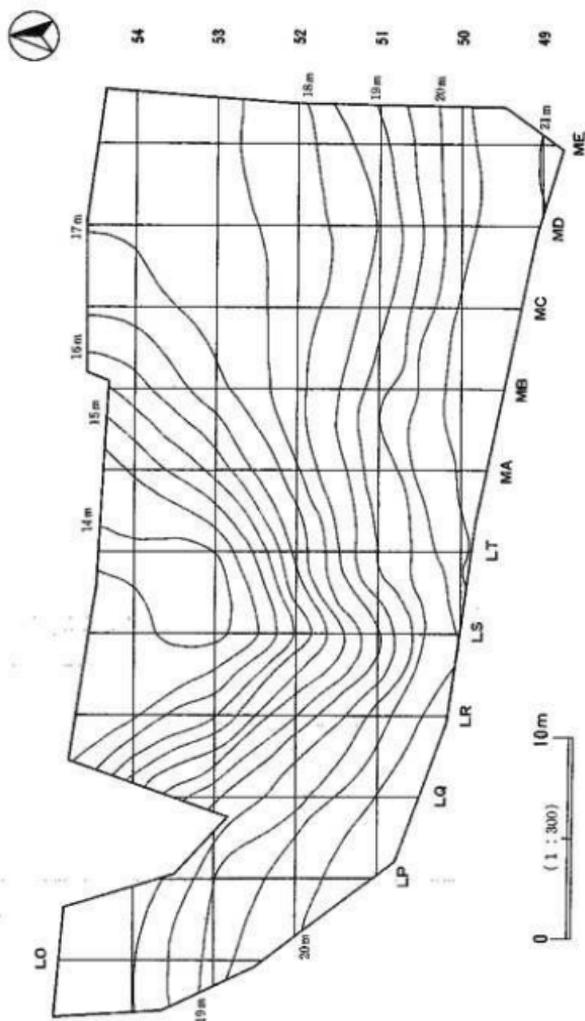
調査の結果、沢地を利用した捨場であることが判明し、縄文時代前期から後期の土器・石器等が多数出土した。このうち主体をなすのは、後期前葉の遺物であり、全遺物の9割以上を占めている。

沢に堆積した土は、I～III層に大別された。IIないしIII層が遺物包含層であり、III層にはほとんどの遺物が包含されていた。また、III層中には地山に含まれる砂質土の部分的な堆積が認められ、III層が形成される段階で数度にわたって地山が崩落していることが窺われる。

出土量は、縦34cm×横54cm×深さ18cmのコンテナで80箱にのぼった。以下大きく1. 土器、土製品、2. 石器に分け分類を行っている。

1. 土器、土製品

(1)土器



第7図 調査終了時の地形測量図

土器底部数から推定される個体数は、1,843個体である。グリッドごとにみた場合の個体数は、LSライン945個体（51%）、LTライン424個体（23%）、LRライン146個体（8%）となっており、沢の最も深い部分に多い。最も多いLSラインの中でグリッド毎にみると、LS52・466個体、LS51・231個体、LS53・228個体となっている。

土器は以下のように時期により分類した。そして、特に第Ⅲ群土器については完形土器又は

完形に近い土器については、器種ごとに器形と文様帯により分類し、破片資料については、文様により細分した。また、実測図を第9図から第41図までに示し、1～212までの通し番号を付けている。

第I群 縄文時代前期

第II群 縄文時代中期

第III群 縄文時代後期

第IV群 平安時代以降

第I群土器（第9図）

1類 結節状浮線文を施すものである（1）。

2類 隆帯で区画した幅の狭い口縁部に縄文原体の側面圧痕を施すものである（2・3）。

第II群土器（第9・10図）

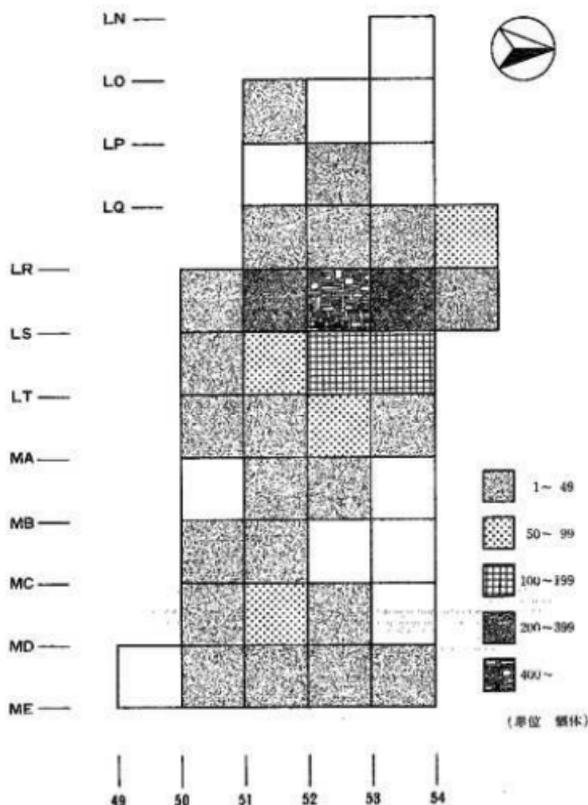
1類 口縁部の文様が縄文原体の側面圧痕と隆帯により構成されるものである（4・5）。

2類 隆帯により文様が施されるものである（6・7・9・10）。

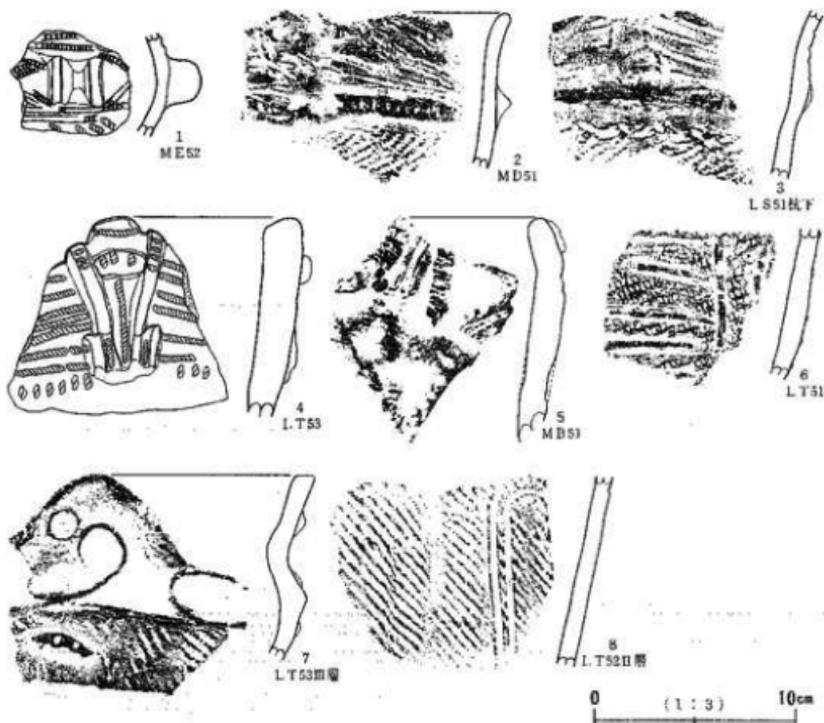
9は弧状又は三角形状に貼り付けられた細い隆帯とそれに沿って施された爪形文が認められる。隆帯上にはやや細かい刻みが施されている。10は8単位ほどの波状口縁となるキャリパー状の深鉢で、複節斜縄文を施した後口縁部に細い粘土紐を貼り付けている。口縁部内面に煤状炭化物が付着している。また、口縁部の張り出した部分に穿孔されている。

3類 縄文の地文上に沈線で文様が施されるものである（8・11）。

11は胴部に最大径を有する深鉢で、3単位の突起をもち口唇部に縄文原体(LR)の圧痕を施している。口縁部には、3条一組の沈線が口縁に沿って突起間を弧状に結ぶように巡っている。



第8図 グリッド別出土土器個体数



第9図 第I群、第II群土器

第III群土器 (第10~41図)

本群土器は、完形又は図上復元が可能なものが比較的多かったことから、破片資料と別にして記述する。また、文様よりは器形と文様帯により分類したことから、破片資料と異なる類別とした。

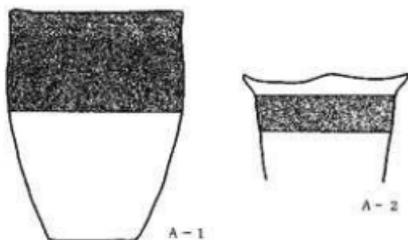
完形又は図上復元が可能な土器は、深鉢、壺、浅鉢、台付浅鉢の4つの器種に分類された。以下器種ごとに記述する。

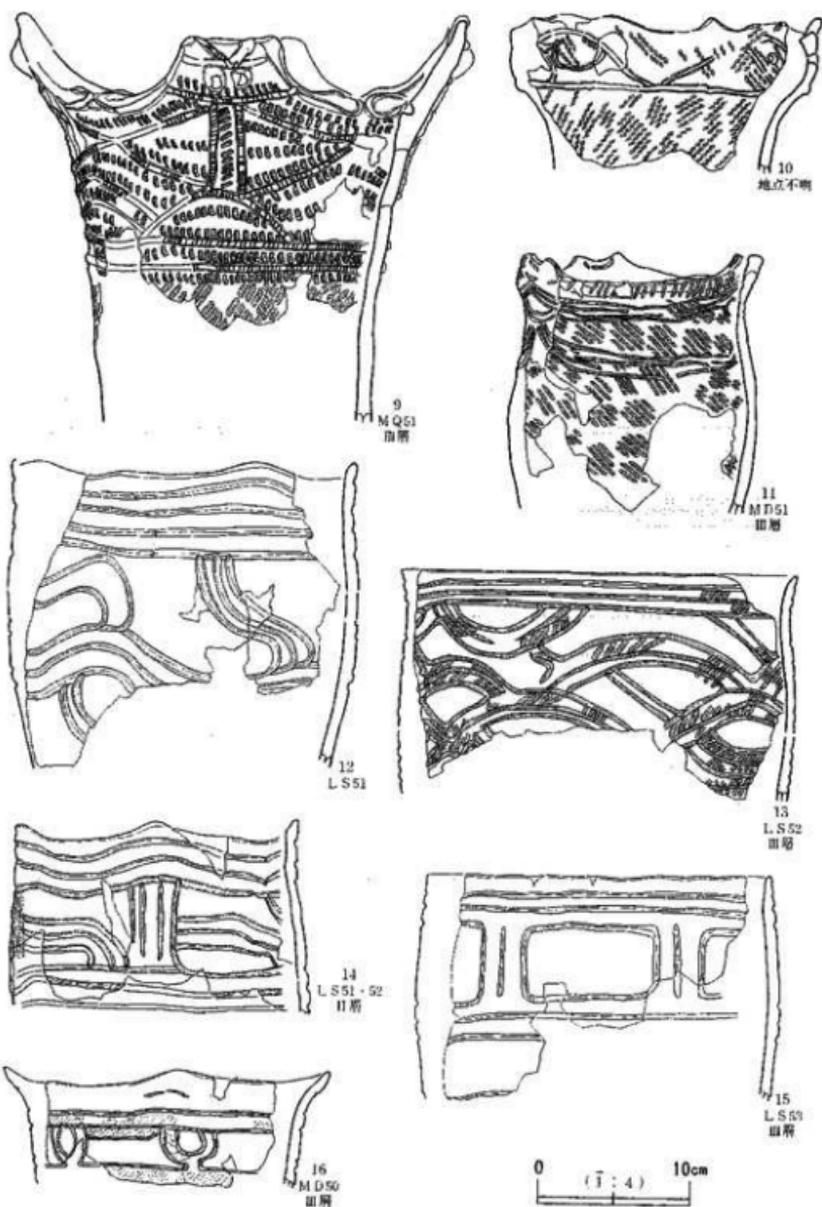
〔深鉢〕

A類 直線的な器形のもの (第10図)。

A-1 底部から直線的に立ち上がるが、
胸部に若干のふくらみのあるもの
(12~15)。

《文様帯》口縁部から胸部中ごろに





第10図 第II群土器(9~11)、第III群土器深鉢A類(12~16)

かけて。

〈施文手法〉①沈線のみにより文様が施されるもの(12・14・15)と②磨消縄文手法のもの(13)に分けられる。

〈文様要素〉①では波状、「h」状、長方形等、②では弧状の文様が描かれる。

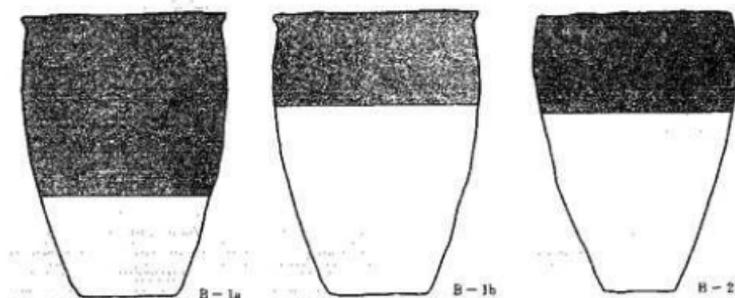
A-2 口縁部が直線的にひらくもの(16)。

《文様帯》口縁直下に無文帯をもつが、概ね口縁部に限られると推測されるもの。

〈施文手法〉磨消縄文手法。

〈文様要素〉「U」状の文様が描かれる。

B類 胴部がややふくらむ器形のもの(第11~14図)。



B-1 胴部がややふくらみ、口縁部が小さく外反するもの。文様帯により、2つに分けられる。

《文様帯 a》口縁部から胴部下半にかけて文様帯が認められるもの(17~24)。

〈施文手法〉①沈線のみのもものと、②磨消縄文のものがある。

〈文様要素〉①ではひし形状+渦巻状、弧線を組み合わせるもの、「X」状、②では長槽門+長方形、不規則なアメーバー状、入組状の文様が描かれる。

《文様帯 b》口縁部から胴部上半にかけて文様帯が認められるもの(25・26)。

〈施文手法〉①沈線のみのもものと、②磨消縄文手法のものがある。

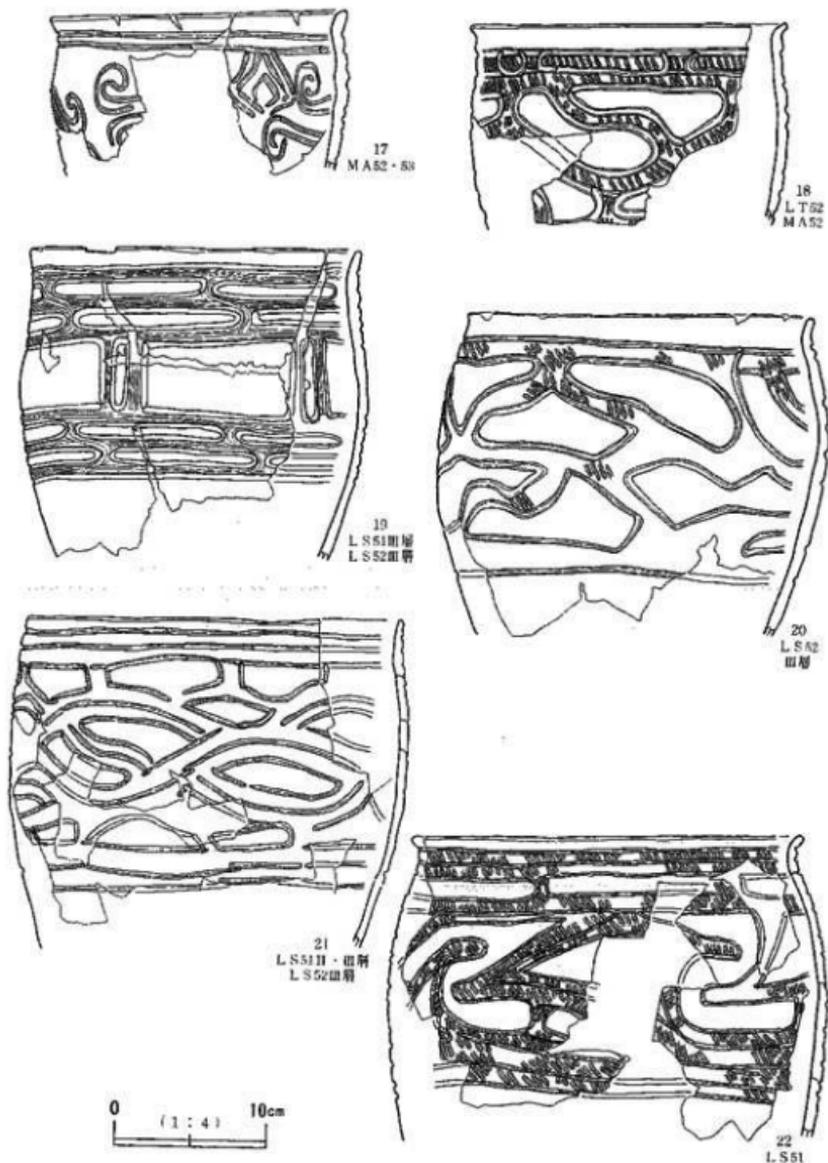
〈文様要素〉①では波状、②では稲妻状の文様が描かれる。

B-2 胴部がややふくらみ、口縁部が内傾するもの(27~30)。

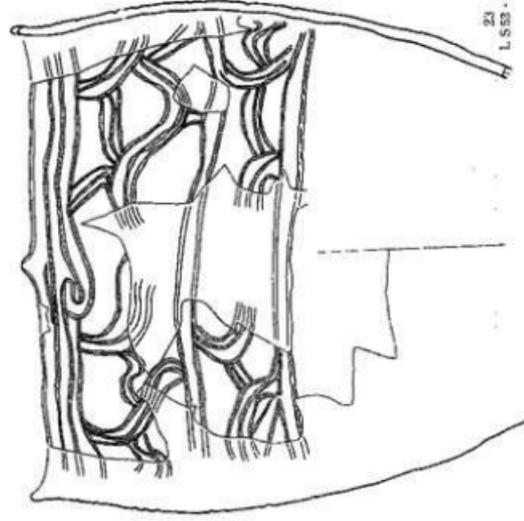
《文様帯》口縁部から胴部上半にかけて。

〈施文手法〉①沈線のみのももの、②磨消縄文手法のもの、③地文+沈線のものがある。

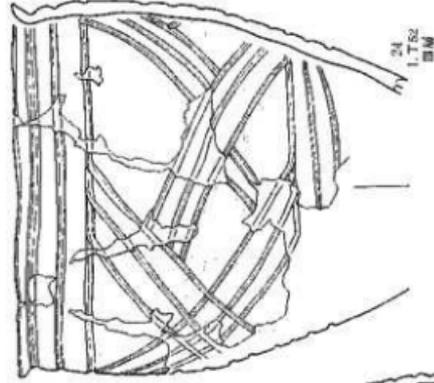
〈文様要素〉①では入組状、長方形、②では波状、③では入組状の文様が描かれる。



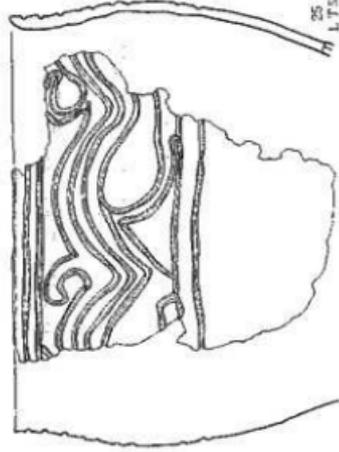
第11図 第三群土器深鉢B類



24
L.S.53・54



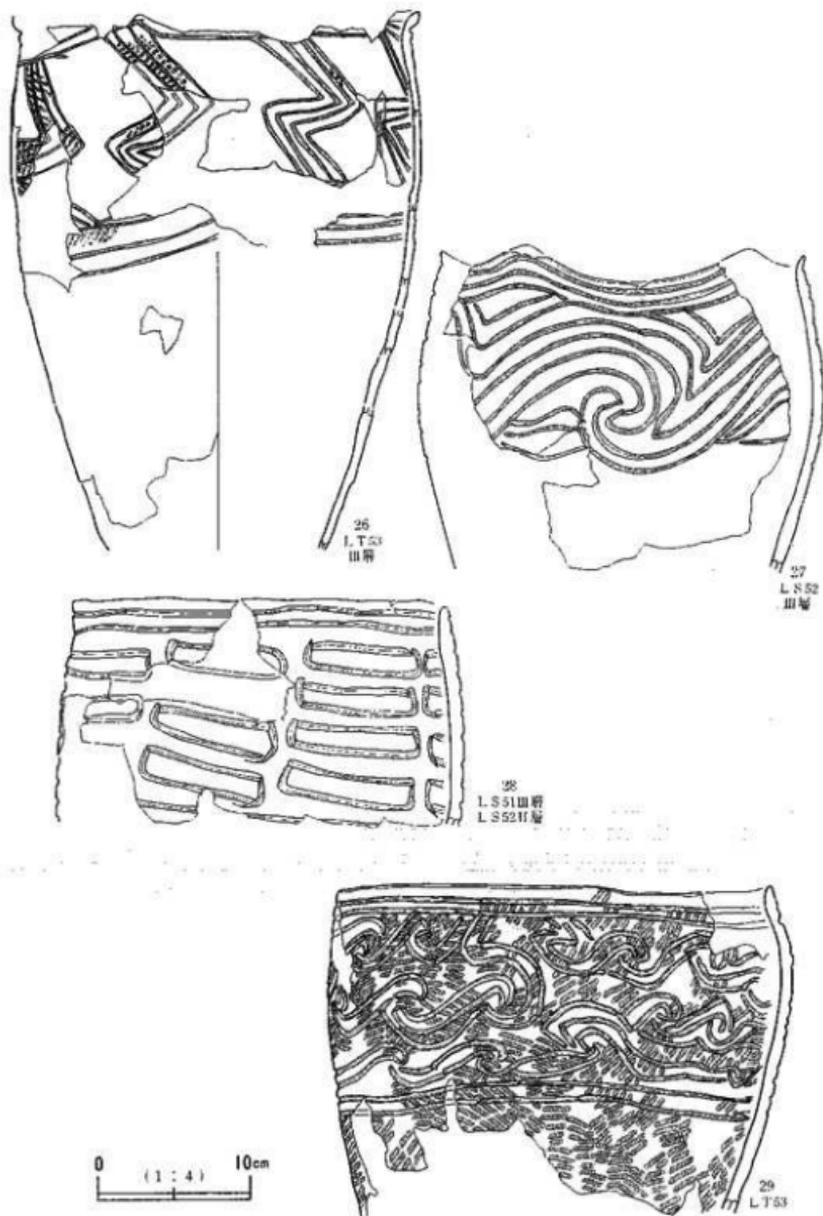
24
L.T.52
53



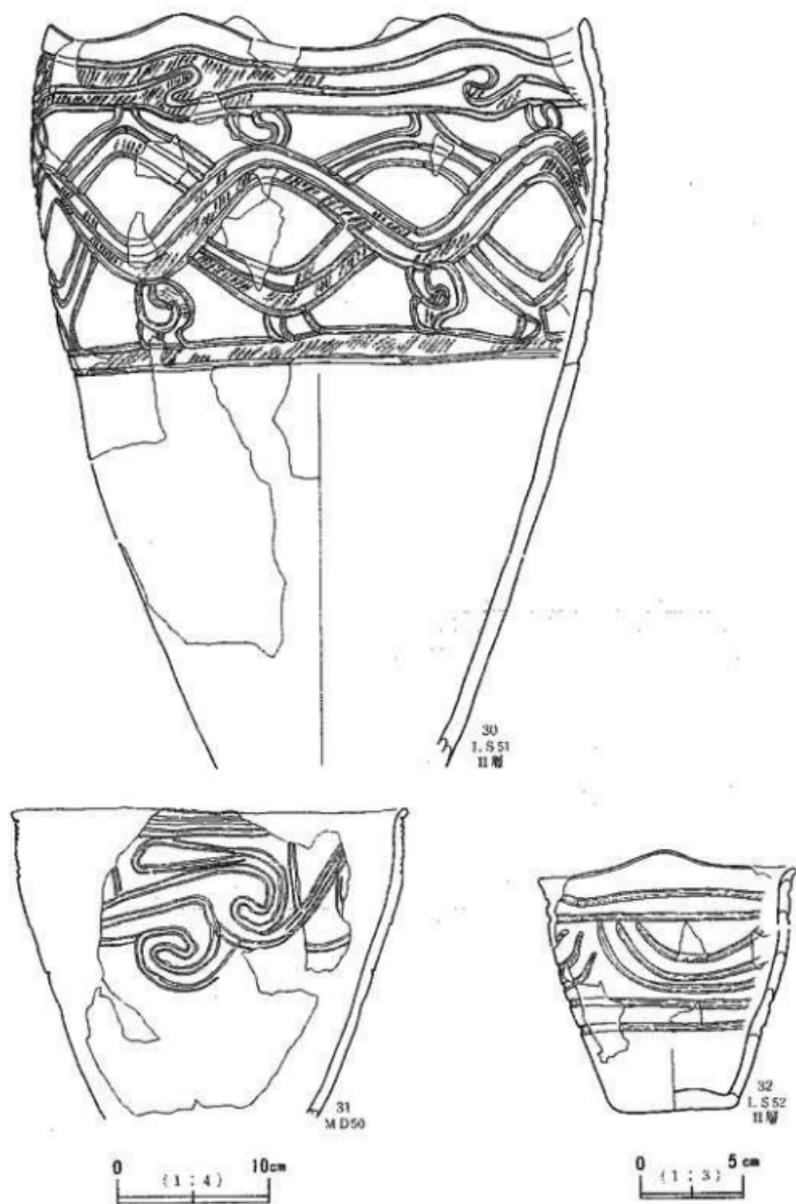
25
L.T.53



第12図 第Ⅲ群土器深鉢B類



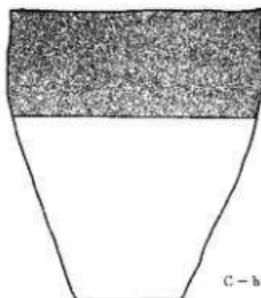
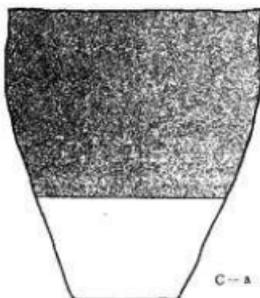
第13図 第III群土器深鉢B類



第14圖 第Ⅲ群土器深鉢B類 (30)・深鉢C類 (31・32)

C類 口縁部付近に最大径をもつもので、断面形がバケツ形を呈する(第14~17図)。文様帯の位置により、2つに分けられる。

《文様帯a》口縁部から胴部下半にかけて認められるもの(31~38)。文様帯下端を区画しないものが1例ある(31)。



〈施文手法〉①沈線のみにより文様が施されるものと、②磨消縄文手法によるものがある。

〈文様要素〉①では渦巻状、弧状、波状、入組状、ひし形状、②では入組状+不規則な曲線が描かれる。

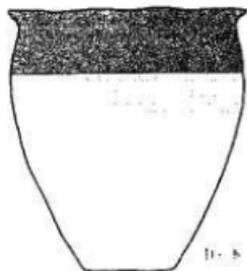
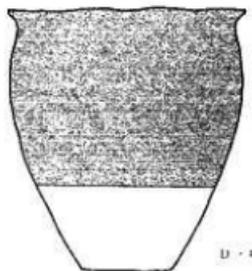
《文様帯b》口縁部から胴部上半にかけて認められるもの(39)。

〈施文手法〉沈線のみにより文様が施される。

〈文様要素〉カギ状の文様が描かれる。

D類 胴部上半の張りが強く、口縁部が小さく外反するもの(第17~21図)。文様帯の位置により、2つに分けられる。

《文様帯a》口縁部から胴部下半にかけて認められるもの(40~47)。大型のものが多い。

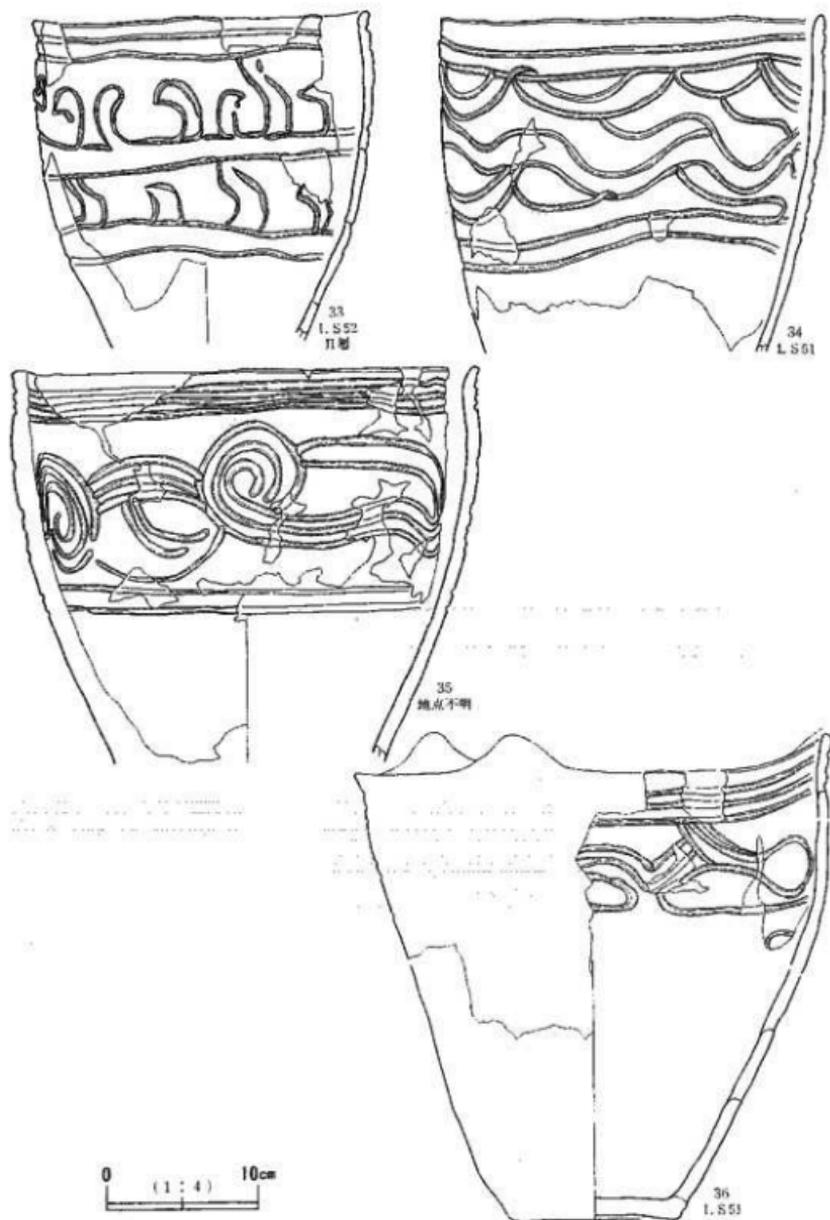


〈施文手法〉①沈線のみで文様が施されるものと、

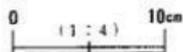
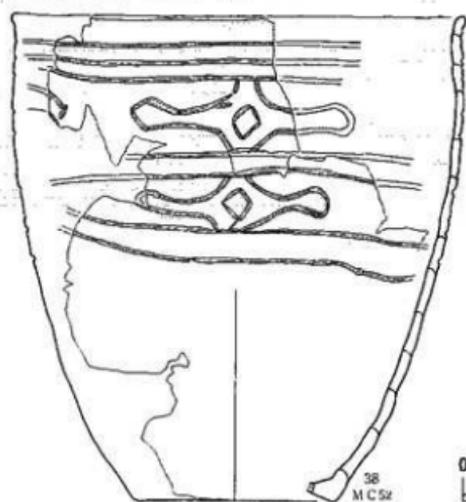
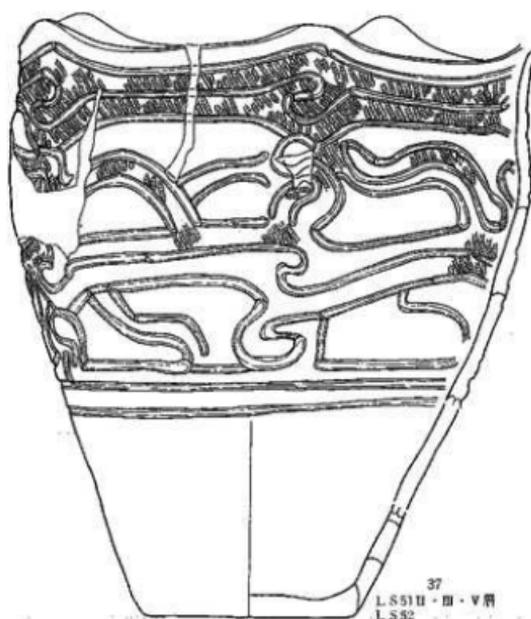
②磨消縄文手法によるものがある。

〈文様要素〉①ではひし形状、アルファベットのSとIを重ねたような文様、渦巻状+入組状、②ではカギ状、渦巻+「カニのハサミ」+逆「く」の字状、長楕円状の文様が描かれる。

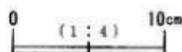
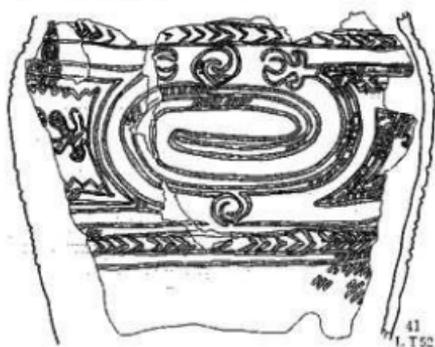
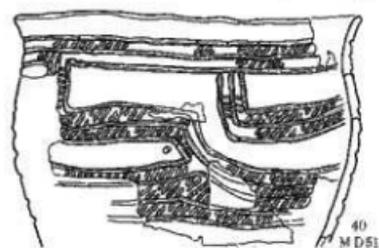
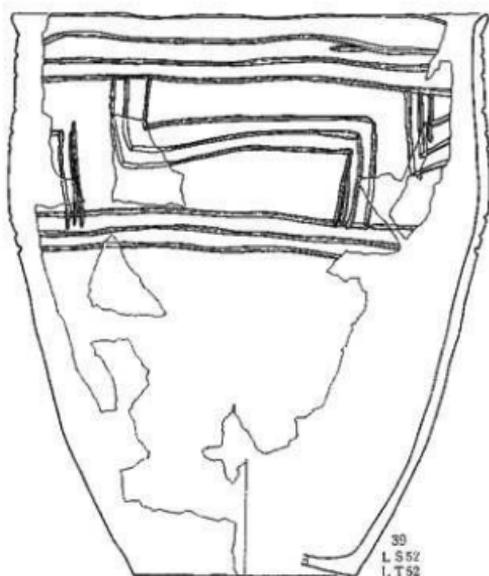
《文様帯b》口縁部から胴部上半にかけて認められるもの(48~53)。小型のもの



第15圖 第Ⅲ群土器深鉢C類



第16図 第III群土器深鉢C類

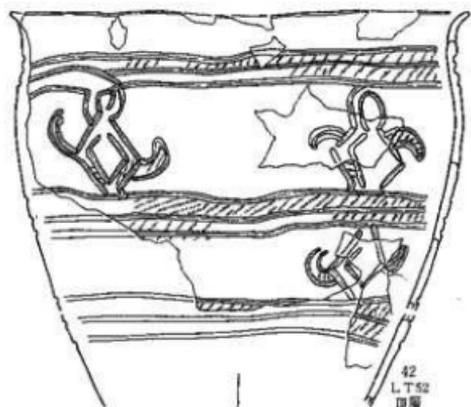


第17図 第Ⅲ群土器深鉢C類 (39)・深鉢D類 (40・41)

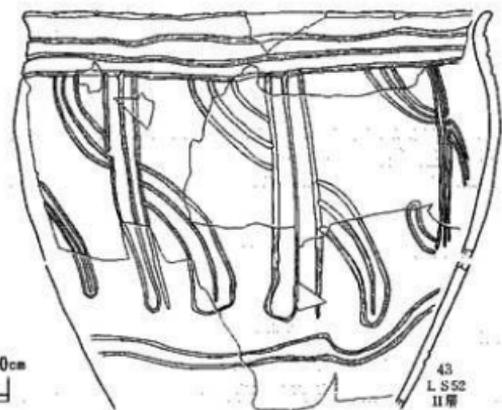
多い。

〈施文手法〉①沈線のみで文様が施されるものと、②磨消線文手法によるものがある。

〈文様要素〉①では長楕円形、波状、縦位の直線、②では縦位と横位の直線を交互に組み合わせたもの、ひし形状の文様が描かれる。



42
L T 52
田島

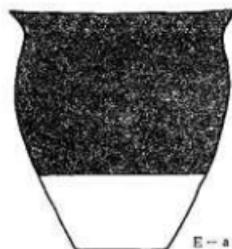


43
L S 52
II層

0 (1:4) 10cm

第18図 第III群土器深鉢D類

E類 口縁部に屈曲を有するもの。文様帯により3つに分けられる(第21~23図)。



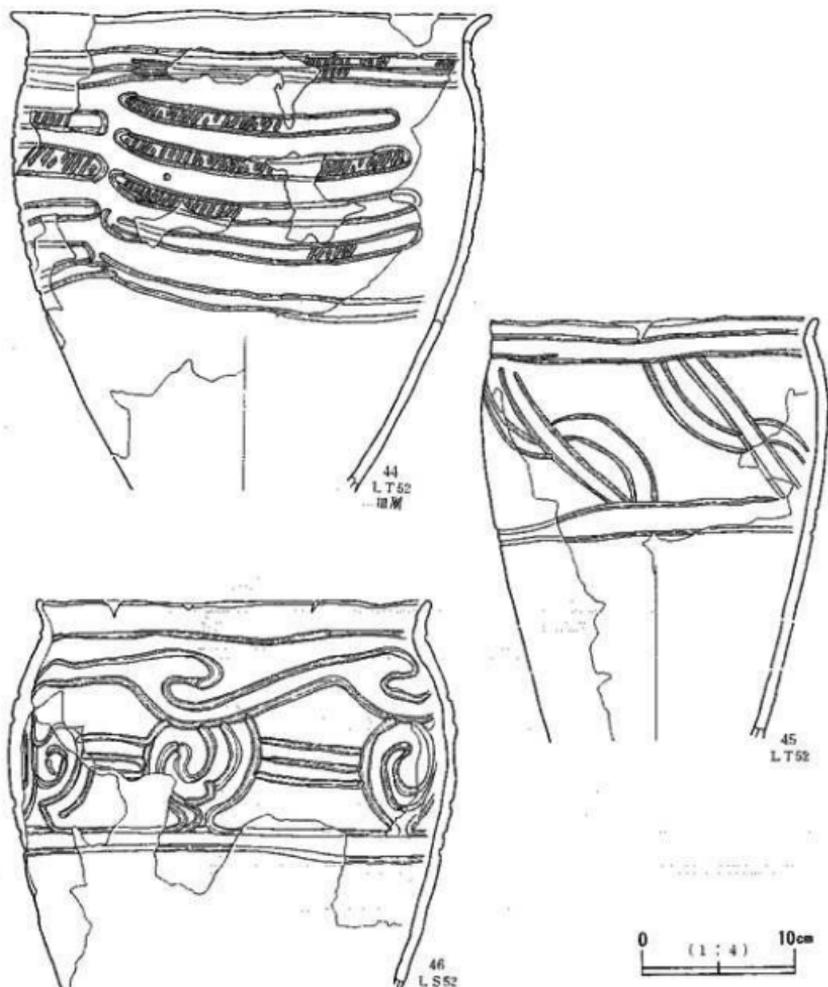
E-a



E-b



E-c



第19図 第三群土器深鉢D類

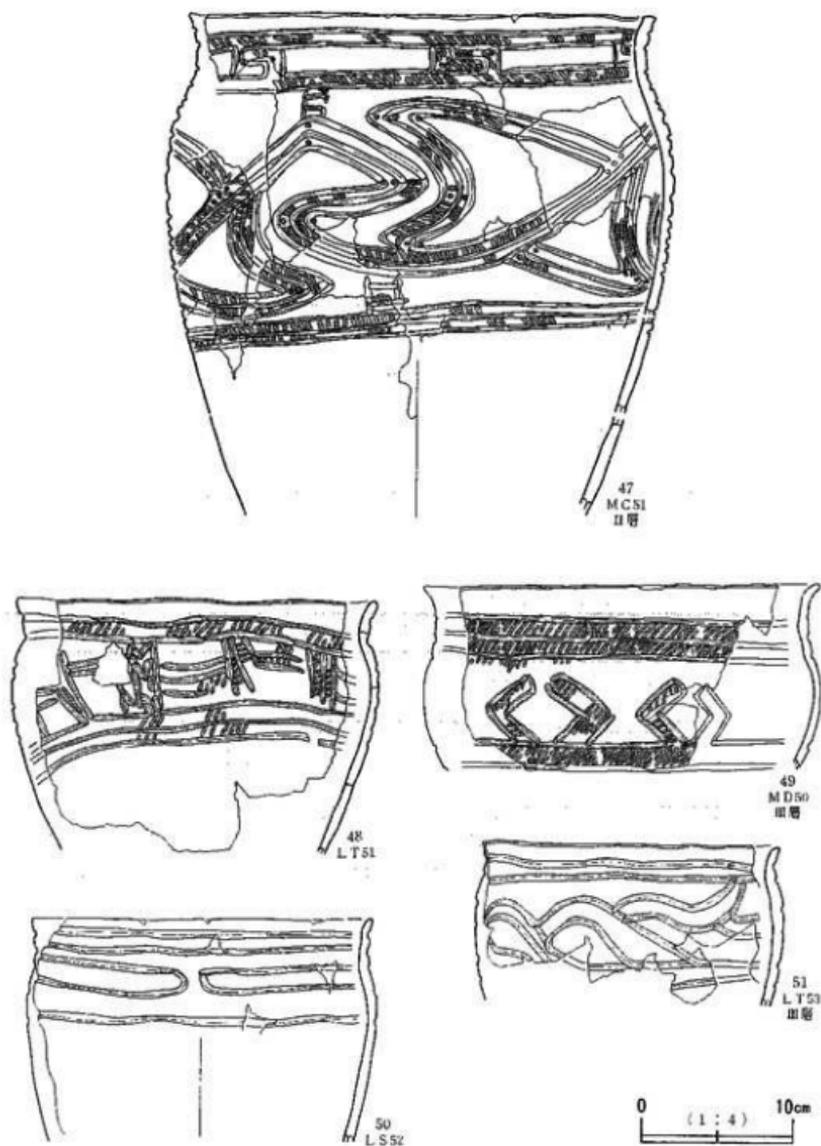
《文様帯a》口縁部から胴部下半にかけて認められるもの（54～59）。

〈施文手法〉磨消縄文手法による。

〈文様要素〉渦巻＋不規則文、逆「S」字状の入組文、渦巻＋「カニのハサミ」状、波状の文様が描かれる。

《文様帯b》口縁部から胴部中ごろにかけて認められるもの（60～63）。

〈施文手法〉沈線のみで文様が施される。



第20図 第III群土器深鉢D類

〈文様要素〉渦状+逆「く」の字状、弧状、入組状、「H」状の文様が描かれる。

〈文様帯c〉口縁部に文様帯が限られるもの(64)。

〈施文手法〉磨消縄文手法による。

〈文様要素〉長楕円形の文様が描かれる。

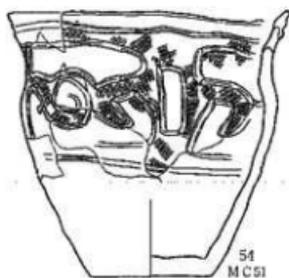
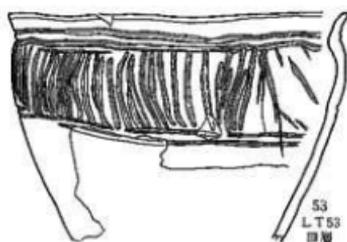
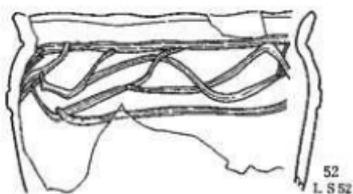
F類 器形が不明なものを本類とした(第24図)。

65は、渦文とひし形文が磨消縄文手法で交互に描かれている。66は、不規則に描かれた沈線間に朱が塗布された胴部下半の資料である。文様は、底部付近まで施されているものと推測される。67~69は、それぞれ横位に展開する入組状文、ひし形状文、雷文が施され、沈線間に縄文が充填されている。69の雷文の上に施されている文様は不明である。

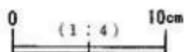
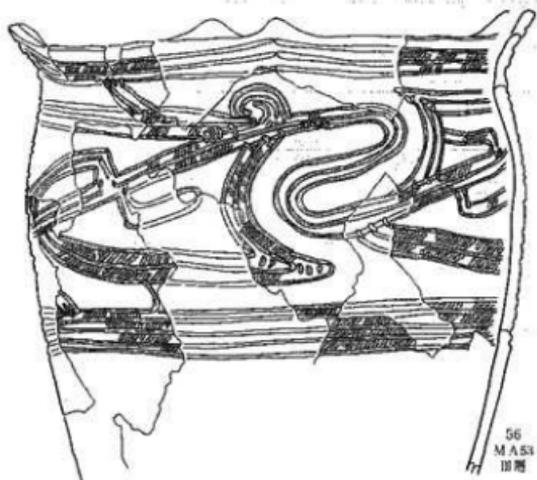
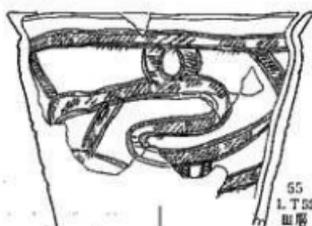
G類 地文以外の文様帯をもたないもの(第25・26図)。

70~72は、小型の深鉢であり、70はやや上げ底のつくりである。その中央部に木葉痕が消されずに残っている。71はB1類に近い器形であり、口縁部は波状を呈し2単位の波頂部を有する。胎土は1~2mmの砂粒を含み、焼成は良好である。内面は丁寧に調整されている。また、内外面に煤状炭化物の付着が認められる。72は、内面に漆とおもわれる黒褐色の物質が付着している。

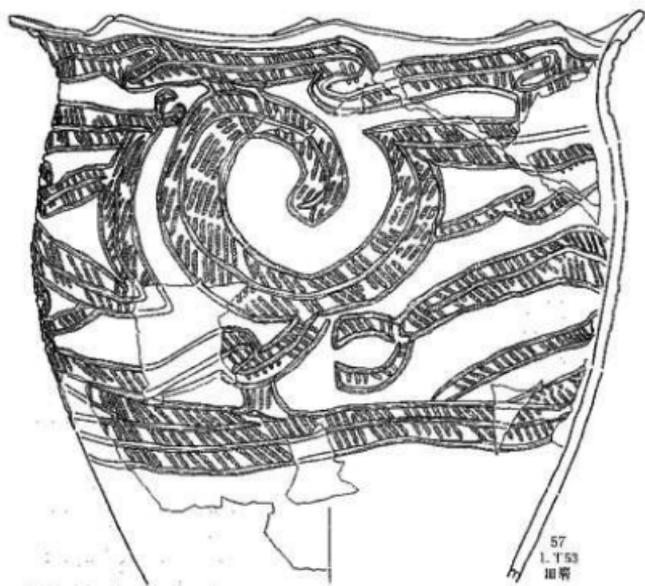
73は無節縄文(L)が施され、76は口径に比して底径が小さい。77は器形の上ではB1類に含まれ、口縁部に縄文原体(RL)の側面圧痕が施されている。78はB2類に含まれ、5単位の波状口縁に並行して1条の沈線が巡る。79はE類に含まれ、口縁は5単位の波状である。78・79とも火熱を受けた痕跡が認められる。



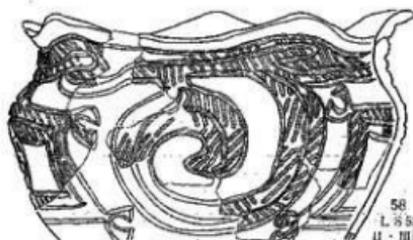
52~54は 1/2



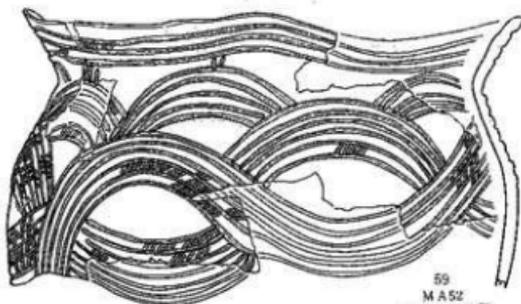
第21図 第III群土器深鉢D類 (52・53) ・深鉢E類 (54~56)



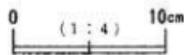
57
L.T 53
Ⅱ期



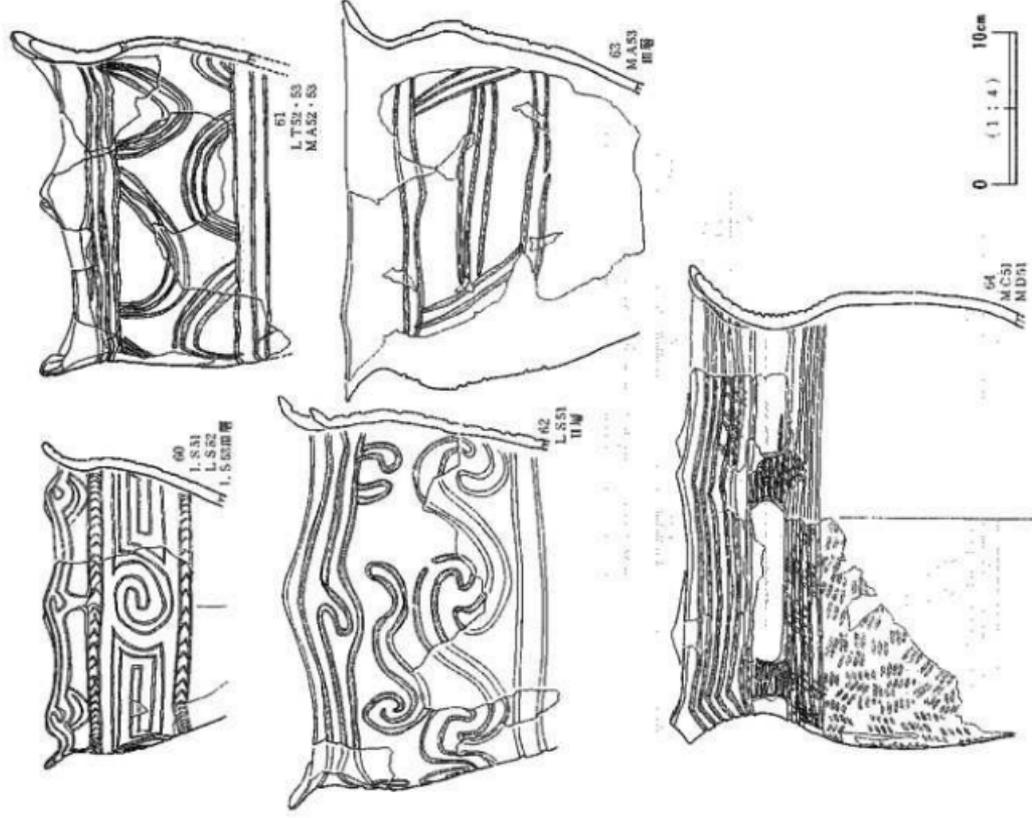
58
L. 52
Ⅱ・Ⅲ期



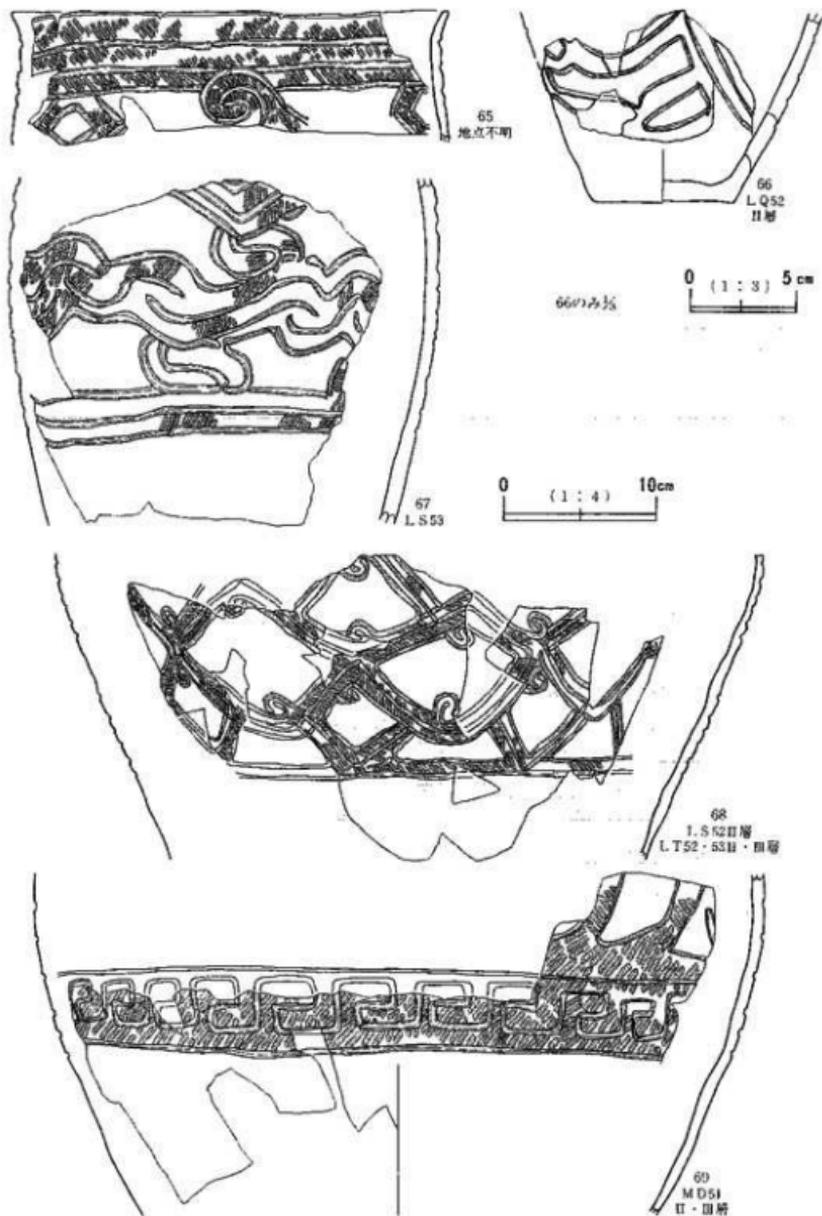
59
MA 52
L.T 52・53期



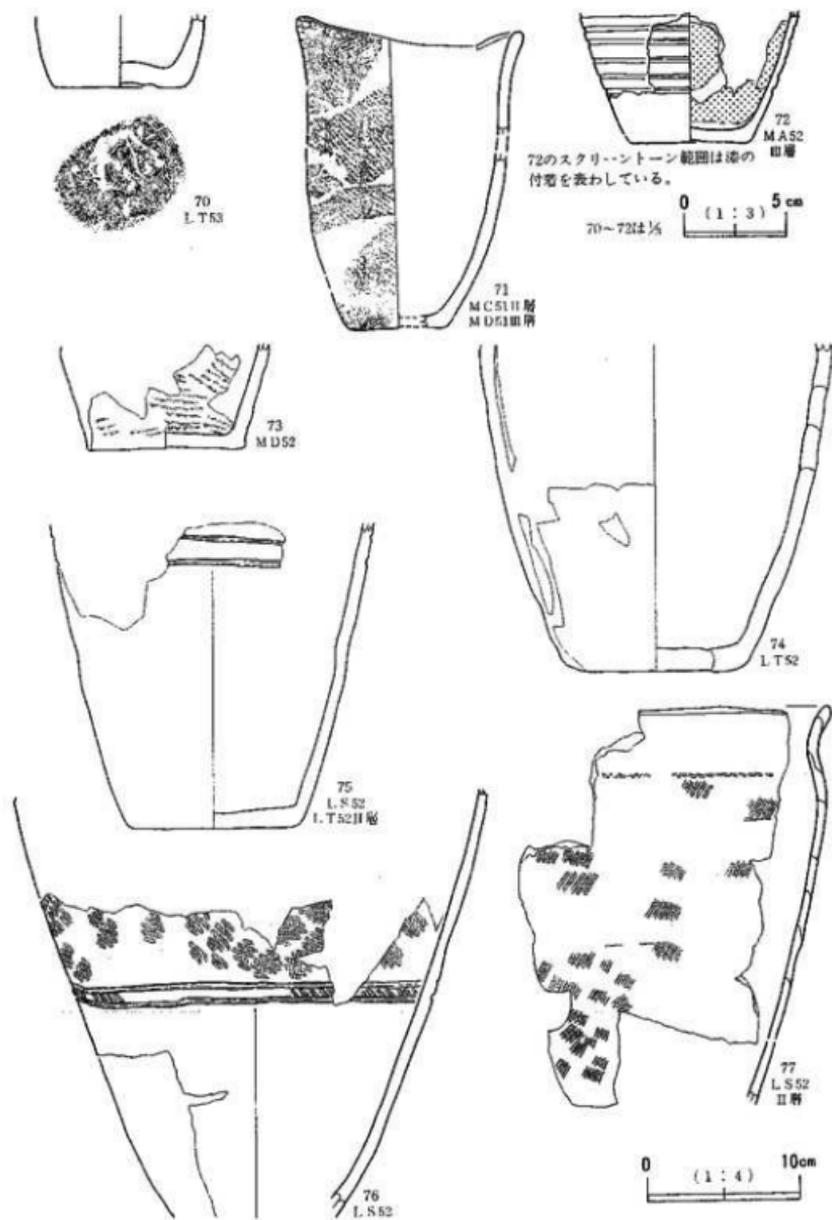
第22圖 第Ⅲ群土器深鉢E類



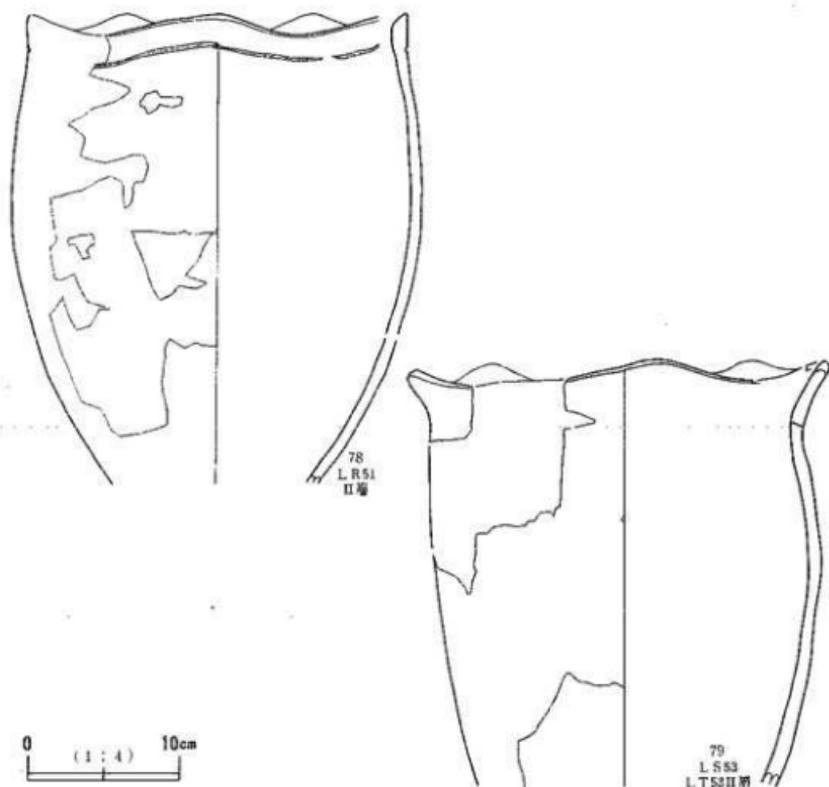
第23図 第三群土器深鉢E類



第24図 第III群土器深鉢F類



第25図 第III群土器深鉢G類



第26図 第三群土器深鉢G類

[壺]

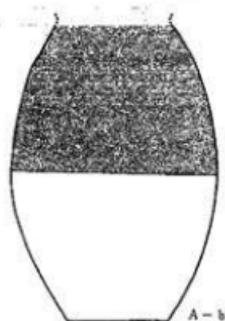
A類 胴部がタマゴ形を呈するもの。文様帯により、2つに分けられる(第27図)。

《文様帯a》口縁部から文様が施されているものと推測されるが、文様帯の下端が不明なもの。

《施文手法》①粘土紐を貼り付けた隆起線より文様を施すもの(80)と、②貼り付けた粘土紐に沿って沈線を施す彫刻的なもので、隆線上に縄文が施される(81)

《文様要素》①では入組状の不規則な文様、②では「U」字+方形の文様が描かれる。

《文様帯b》口縁部から胴部中ごろにかけて認められる



もの(82)。

〈施文手法〉磨消縄文手法による。

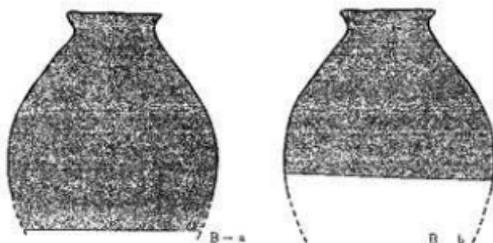
〈文様要素〉「U」字状+長方形の文様。

B類 胴部がふくらむが、肩は張らずになめらかなもの。文様帯又は文様から3つに分けられる(第28・29図)。

《文様帯a》口縁部から胴部下半にかけて文様帯が認められるもの(83~85)。

〈施文手法〉磨消縄文手法による。

〈文様要素〉波状、長方形の文様が描かれる。



《文様帯b》口縁部から胴部中ごろにかけて文様帯が認められるもの(86~89)。

〈施文手法〉①沈線のみによるものと、②磨消縄文によるものがある。

〈文様要素〉①では玉ネギ又は球根状、②では入組状の文様が描かれる。

《文様帯c》文様帯の下端が不明なもの又は文様帯を有しないもの(90~92)。

90・91は小型のものであり、90は4単位の把手をもち、やや丁寧なつくりである。

92は、磨消縄文手法により入組状文や曲線文を施している。胎土は2~3mmで焼成は良好である。

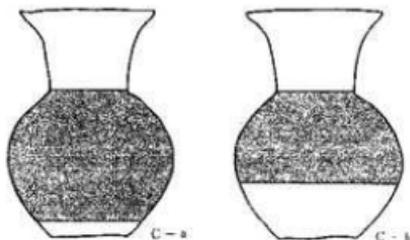
C類 胴部が球形を呈するもの。小型のものが多い。文様帯等により3つに分けられる(第29図)。

《文様帯a》底部付近まで文様帯が認められるもの(93)。

〈施文手法〉磨消縄文手法による。

〈文様要素〉方形状の文様が描かれているようであるが、はっきりしない。

《文様帯b》口縁部から胴部中ごろ



にかけて文様帯が認められるもの(94~99)。

〈施文手法〉①沈線のみによるものと、②磨消縄文手法によるものがある。

〈文様要素〉①では方形、波状+不規則な文様、②では入組状、「U」字状の文様が描かれる。

《文様帯c》文様帯の下端が不明なものまたは無文のもの(100・101)。

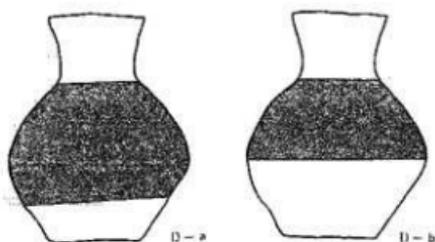
100は頸部の屈曲部に3条の沈線が横走り、その下に方形の文様が磨消縄文手法により施される。内面に指頭によるヨコナデの痕跡が認められる。

D類 胴部中央又は下半に強い張りをもつもの。文様帯により2つに分けられる(第30図)

《文様帯a》口縁部から胴部下半にかけて文様帯が認められるもの(102・105・106)

《施文手法》磨消縄文手法による。

《文様要素》入組状の文様が描かれる。



《文様帯b》口縁部から胴部中ごろにかけて文様帯が認められるもの(103)。

《施文手法》沈線のみによるもの。

《文様要素》カギ状の文様が描かれる。

E類 無文のもの又は文様帯が不明なもの(第30図)。

小型のものはほとんどであり、胎土に1~2mmの砂粒を含む。焼成は良好、色調は灰白色10YR8/1から浅黄橙色10YR8/3、にぶい橙色7.5YR7/4である。

111・113は、2単位の波状口縁を呈するものであり、111は波頂部に粘土紐を貼り付けており、113は波頂部に対応して穿孔されている。112の口縁部は、真上からみると楕円形を呈しており、その短軸方向の両端に力を加えて内側に折り曲げ、口縁部に変化を与えている。115は、頸部の無文帯を挟み口縁部と胴部に横走る沈線が密に施され、その下に三角形又は方形の文様が描かれた後その屈折部に円形の刺突文が施されている。胎土に3~4mmの砂粒を多く含み、その脱落が認められる。

[浅鉢]

A類 底部から口縁部に直線的に立ち上がるもの。小型のものである(第31図116・117)。

《文様帯》口縁部から胴部下半にかけて。

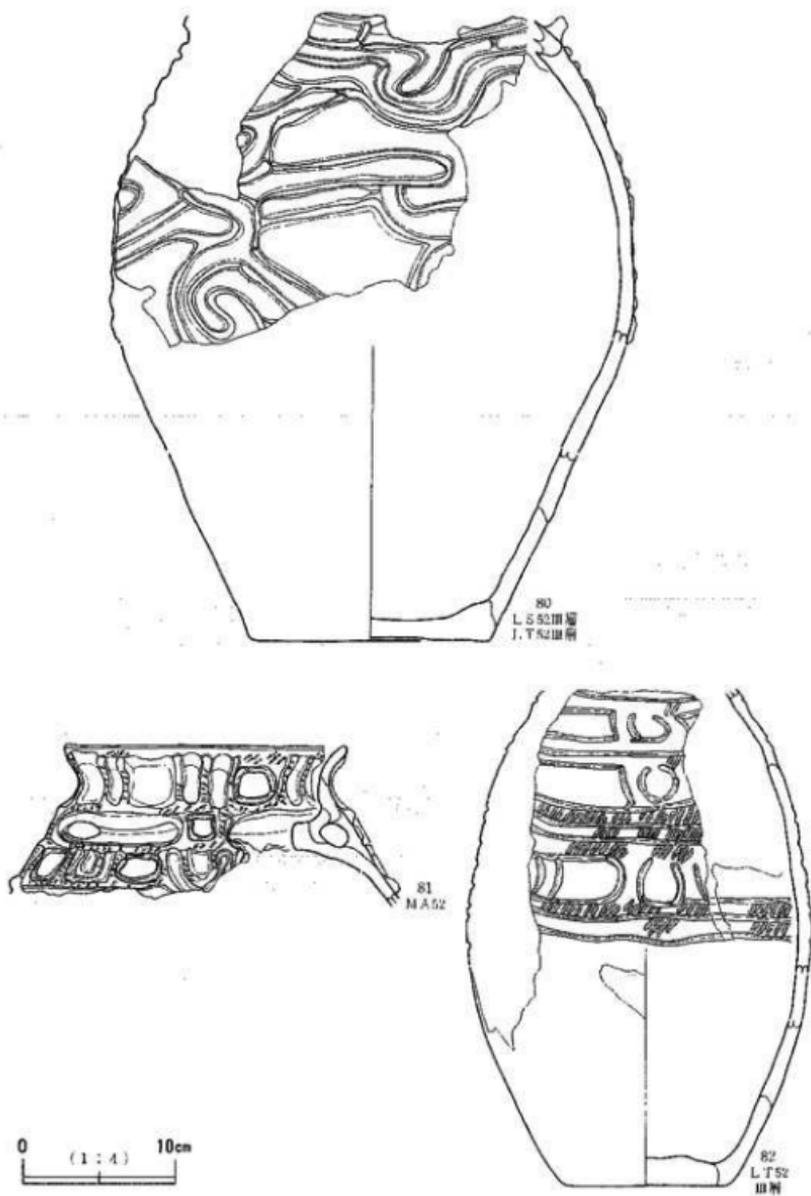
《施文手法》沈線のみにより文様が施される。

《文様要素》放射状又は並行する直線の文様が描かれる。

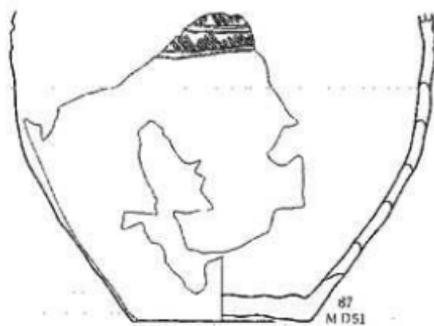
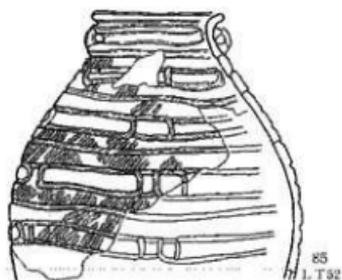
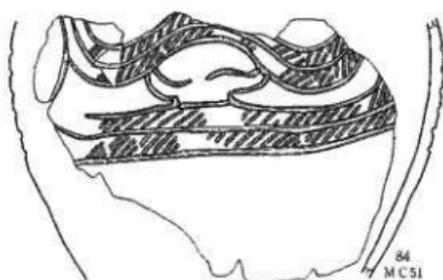
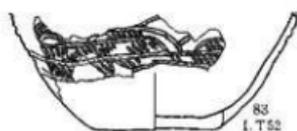


B類 底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がるもの(第31図118)。

《文様帯》口縁部。



第27図 第Ⅲ群土器壺A類



0 (1:3) 5 cm

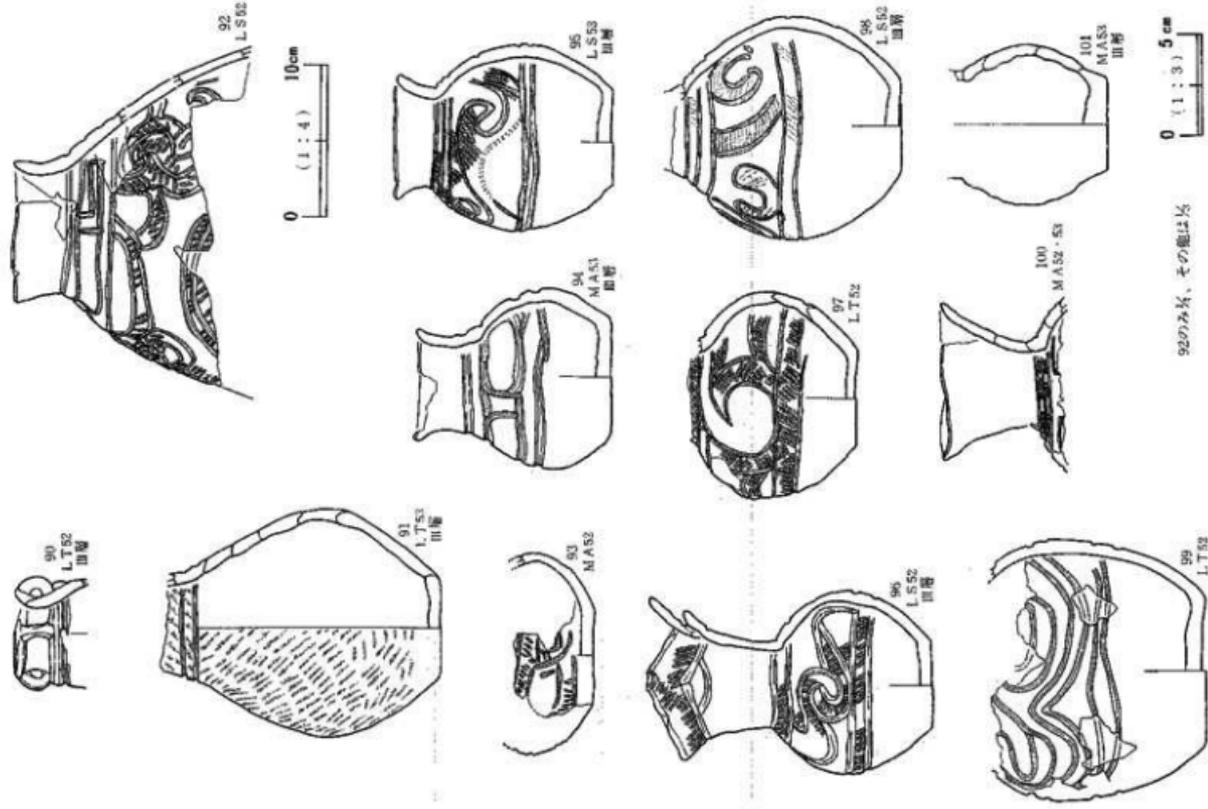
86のみ



0 (1:4) 10cm

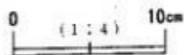
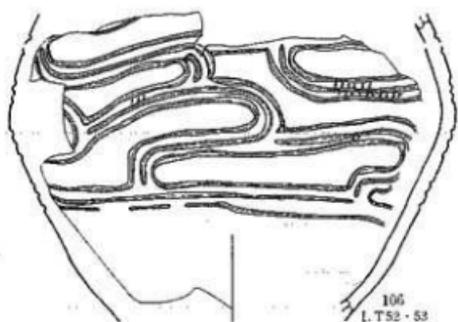
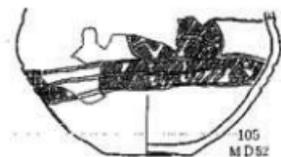
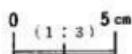
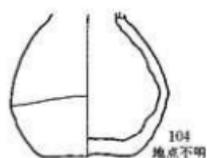
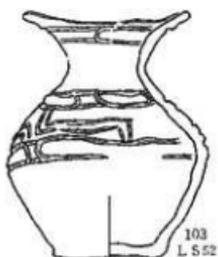


第28図 第Ⅲ群土器壺B類

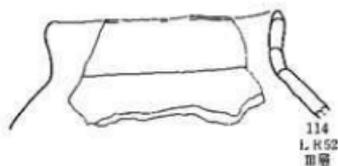
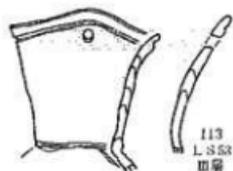
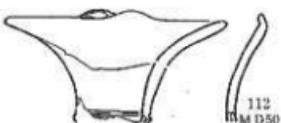
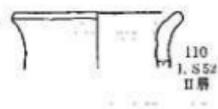


第29図 第Ⅲ群土器壺B類 (90~92) ・壺C類 (93~101)

壹刈沢 I 遺跡



105・106・115は片。
その他は片。



第30図 第III群土器壺D類 (102~106) ・壺E類 (107~115)

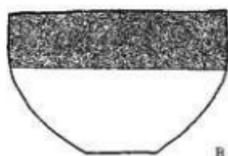
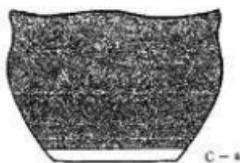
〈施文手法〉磨消縄文手法。

〈文様要素〉「U」字又は「O」字状の文様が描かれる。

C類 胴部がふくらみ、口縁部が緩く外反するもの（第31図119～121）。文様帯により、2つに分けられる。

《文様帯a》口縁部から底部付近にかけて文様帯が認められるもの（119）。

〈施文手法〉沈線による施文を主体とするが、粘土紐貼り付けによる隆帯もみられる。



〈文様要素〉入組状の文様が描かれる。

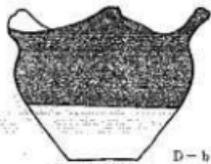
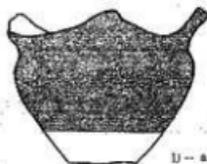
《文様帯b》口縁部から胴部中ごろにかけて文様帯が認められるもの（120・121）。

〈施文手法〉①沈線のみによるものと、②磨消縄文手法によるものに分けられる。

〈文様要素〉①ではメガネ状、②では不整形の文様が施される。

D類 胴部が張り、口縁部がくびれるもの（第31図122・123）。文様帯により2つに分けられる。

《文様帯a》口縁部から胴部下半にかけて文様帯が認められるもの（122）。



〈施文手法〉磨消縄文手法によるもの。

〈文様要素〉不規則な曲線が施される。

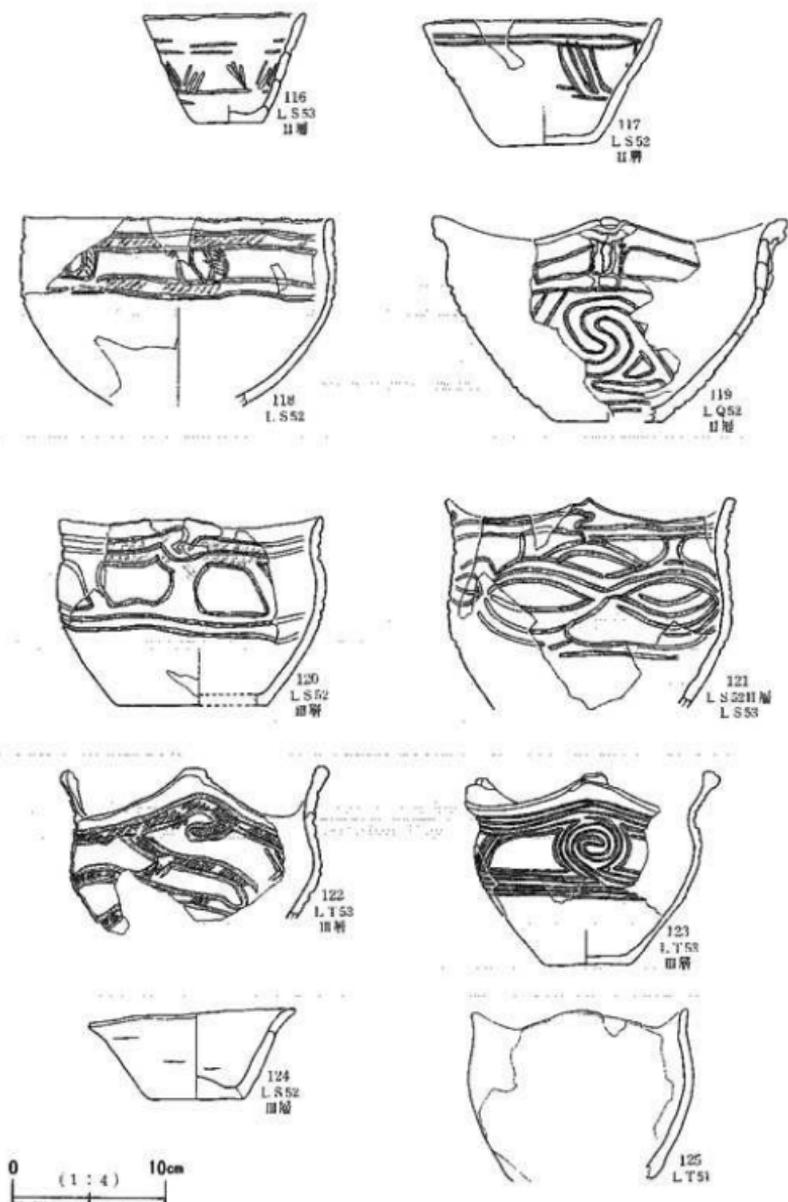
《文様帯b》口縁部から胴部上半にかけて文様帯が認められるもの（123）。

〈施文手法〉沈線のみによるもの。

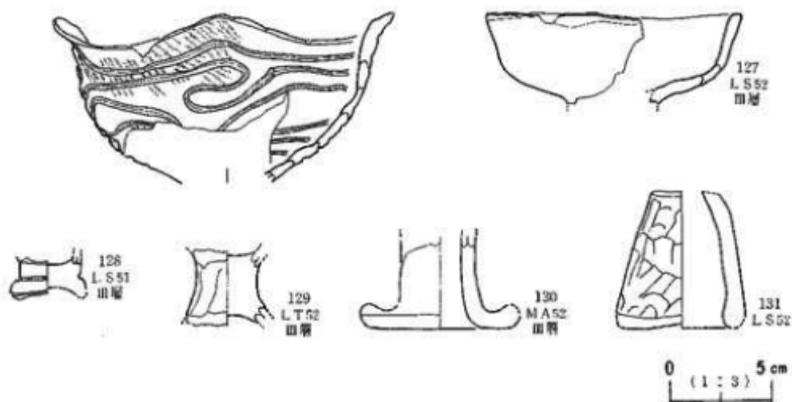
〈文様要素〉渦巻文。

E類 無文のもの（第31図124・125）。

器形上は124がA類、125がB類に含まれる。



第31図 第三群土器浅鉢A類 (116・117)・浅鉢B類 (118)・浅鉢C類 (119~121)・浅鉢D類 (122・123)・浅鉢E類 (124・125)



第32図 第Ⅲ群土器台付浅鉢A類(126)・台付浅鉢B類(127)・台付浅鉢脚部(128~131)

〔台付浅鉢〕

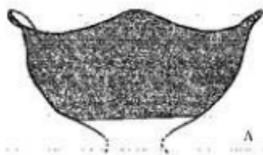
A類 胴部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁部がひろくもの(第32図126)。

〈文様帯〉口縁部から胴部下半にかけて。

〈施文手法〉磨消縄文手法による。

〈文様要素〉不規則なアメーバー状の文様が施される。

B類 胴部が「く」字状に屈曲し、口縁部にいたる無文のもの(第32図127)。



その他の資料

第32図128~131は、台部の資料である。131は、身の部分と台部とを接合した部分で壊れている。

第Ⅲ群土器破片資料

1類 粘土紐貼り付けによる隆帯と沈線による文様が施されるもの(第33図)。

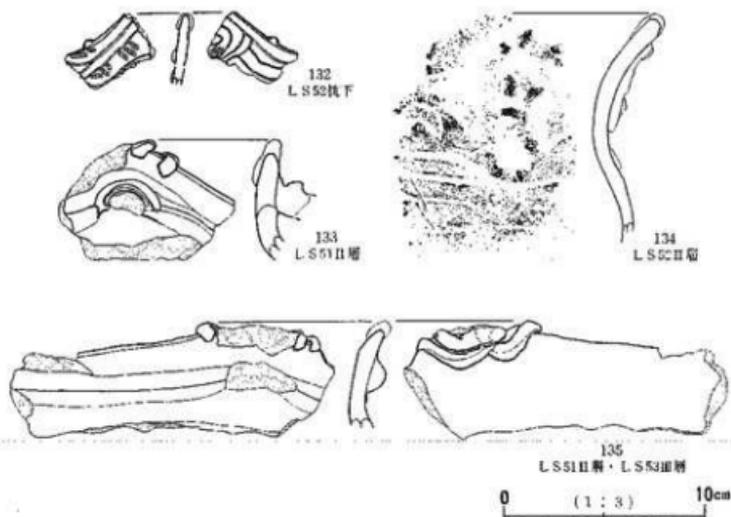
- a. 口縁部に粘土紐の貼付けを行うもの(132・133・135)。
- b. 口縁部文様帯に粘土紐の貼付けを行い半肉刻的な感じを与えるもの(134)。

2類 地文上に沈線を施すもの(第34図136~138)。

- a. 地文が縄文原体の回転によるもの(136・137)。
- b. 地文が横方向の条線状のもの(138)。

3類 磨消縄文手法によるもの(第34図139~第38図172)。

- a. 弧線又は入組状の不規則文を描くもの(139~154)。

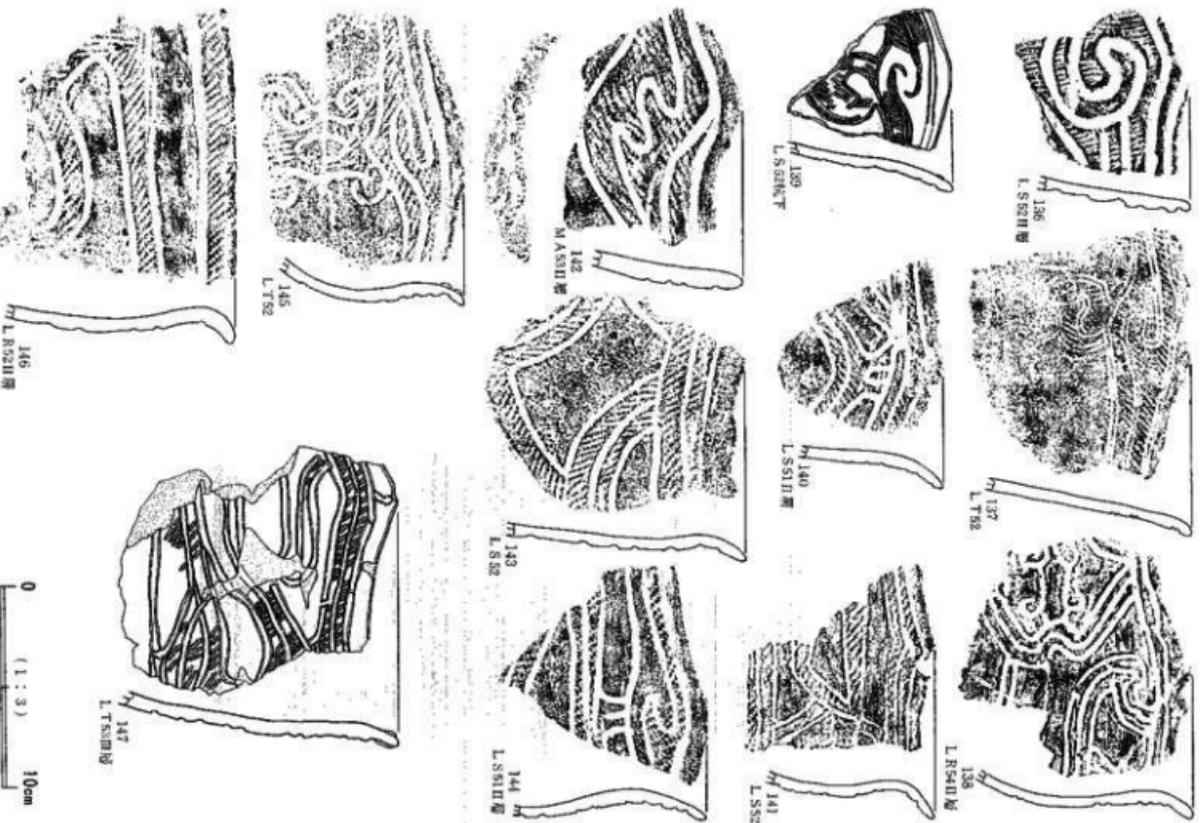


第33図 第Ⅲ群土器

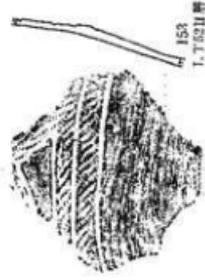
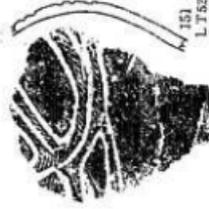
- b. 「カニのハサミ」状の文様を描くもの (155)。
 - c. 文様帯の上下を斜方向の線によりつなぐもの (156~158)。
 - d. 渦巻状の文様を描くもの (159)。
 - e. 長楕円状の文様を描くもの (160・161)。
 - f. 方形基調の文様を描くもの (162~168)。
 - g. 櫛目状の文様を描くもの (169~172)。いずれも無文地に櫛目状の文様を施しており、170は櫛目状の条線が全体の文様の流れに対して直交する方向に施されている。
- 4 類 沈線により文様が施されるもの (第38図173~第41図204)。
- a. 弧線又は直線により不規則な文様を描くもの (173~191)。
 - b. 方形基調の文様を描くもの (192~195)。
 - c. カギ状文を描くもの (196~199)。
 - d. 三角形状の文様を描くもの (200)。
 - e. 渦巻状の文様を描くもの (201・202)。
 - f. 錨状の文様を描くもの (203)。
 - g. 横位の平行沈線をやや密に描くもの (204)。

第Ⅲ群土器のうち、これまでの分類に入らないものについて、以下に述べる。

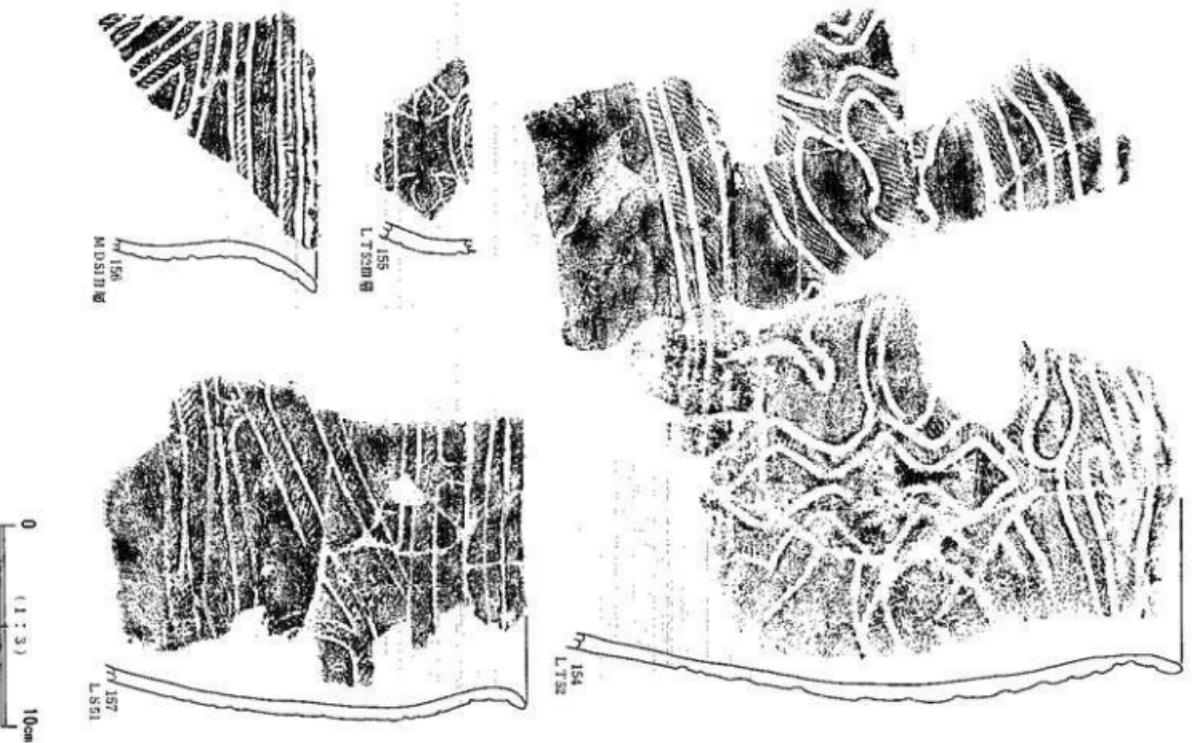
- ①無文又は地文のみのもの (第41図205~208)。



第34図 築川群土器

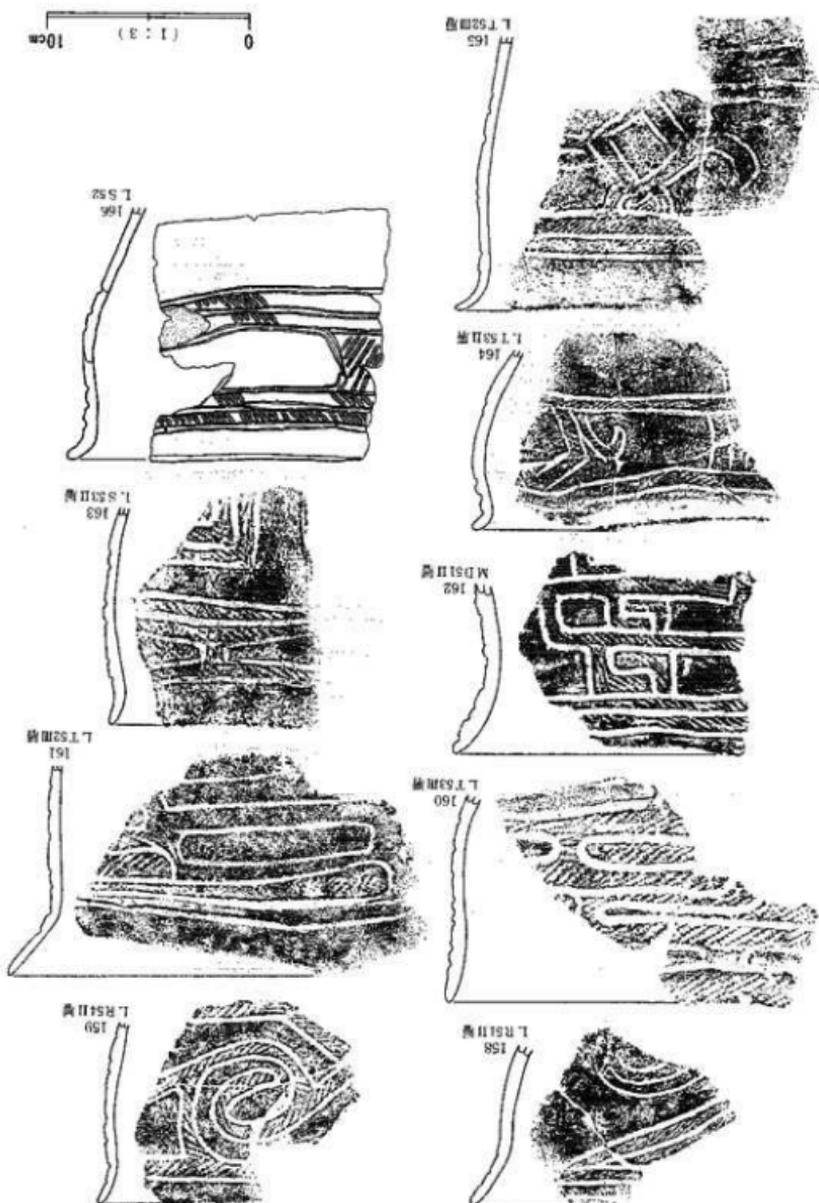


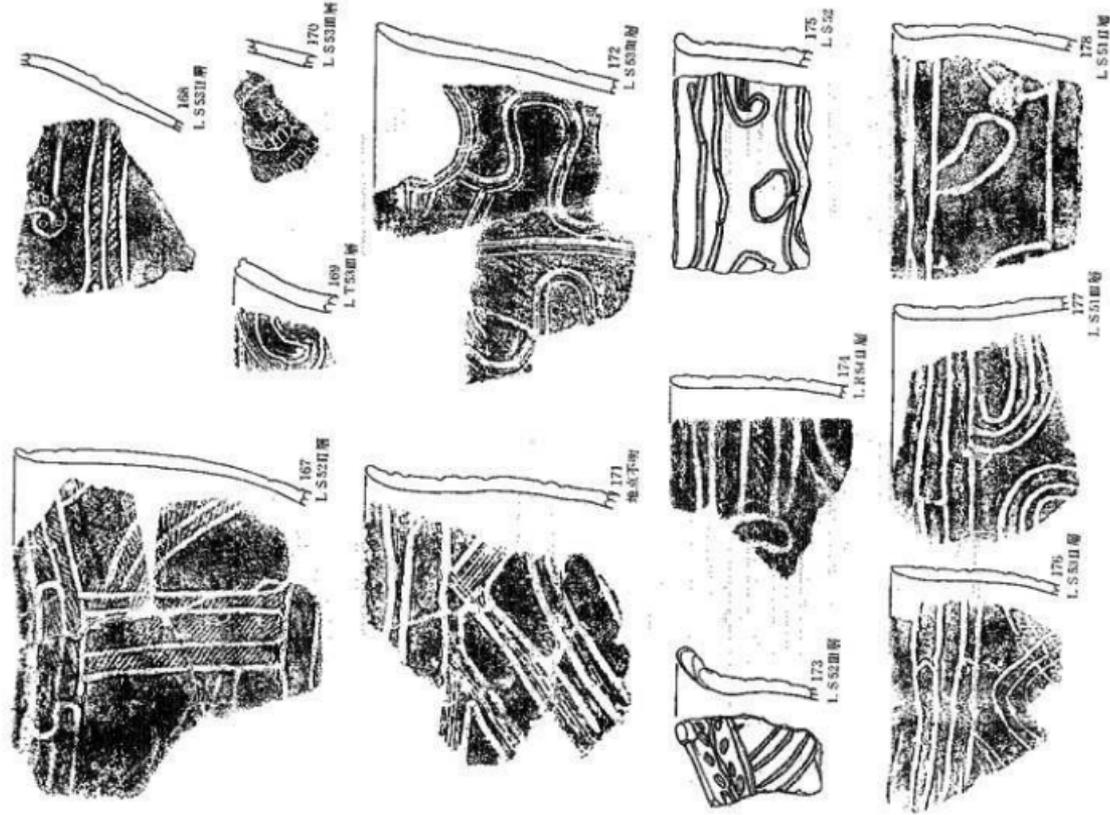
第35図 第III群土器



第36図 第三群土器

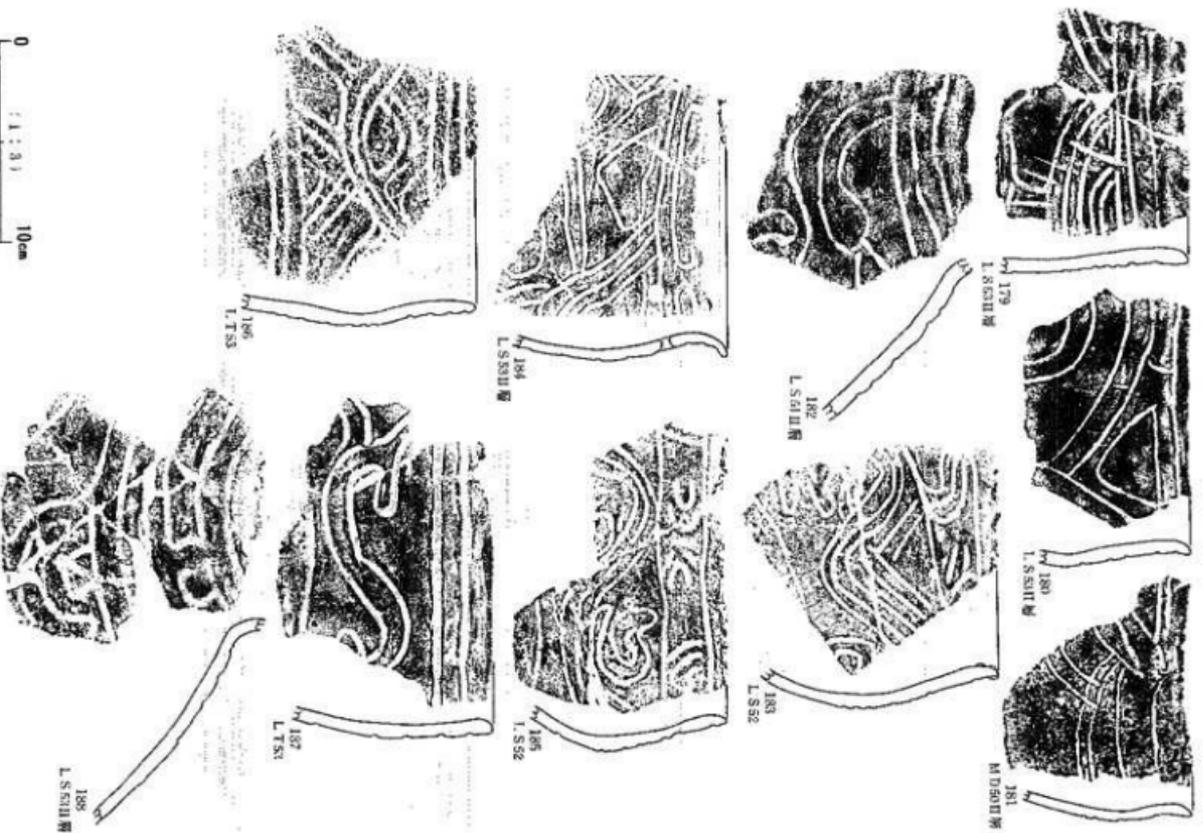
第37圖 峯山群土器



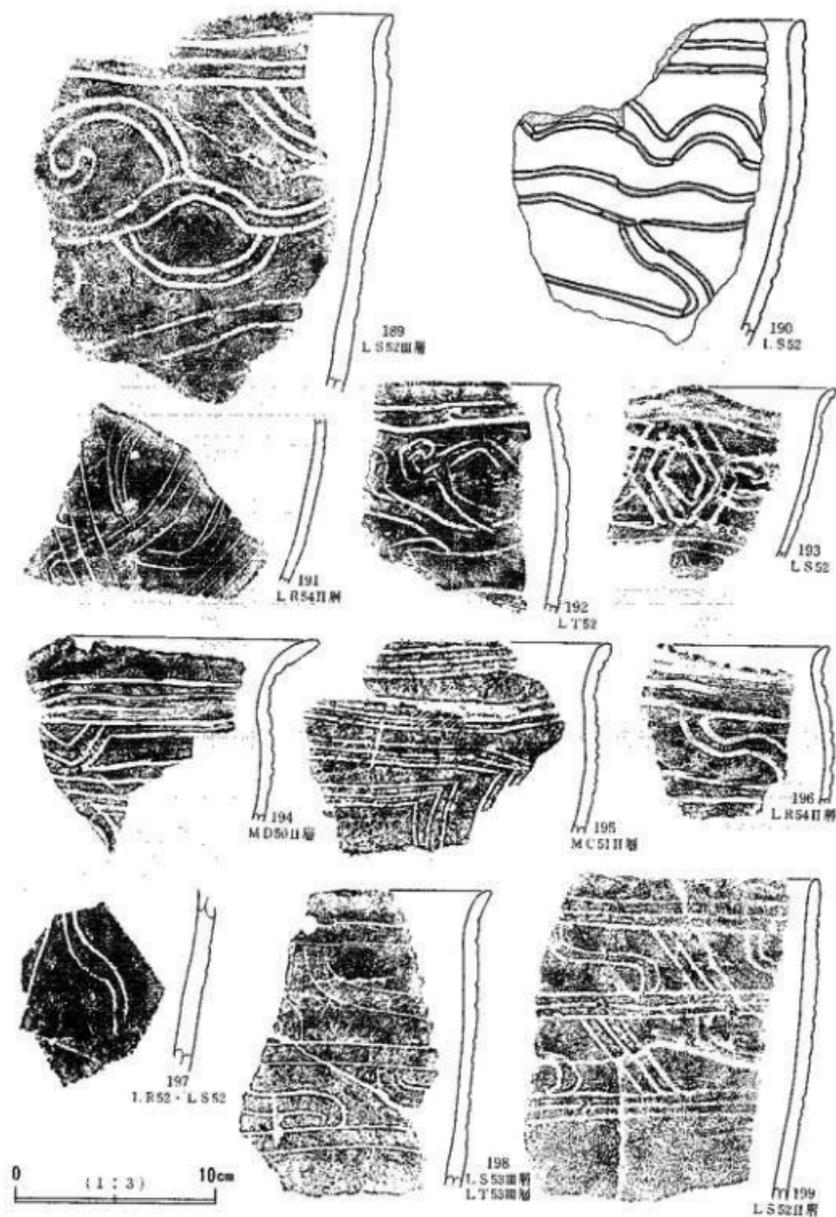


0 (1:3) 10cm

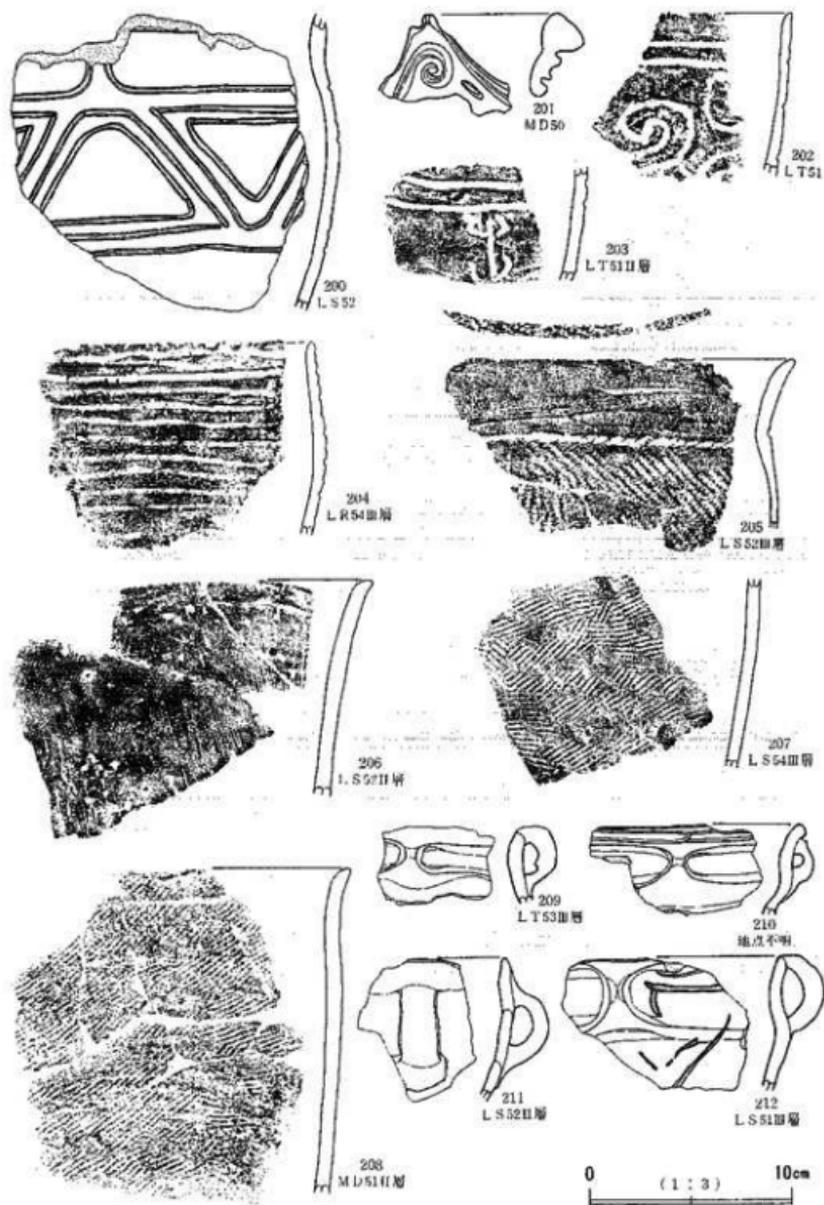
第38図 茶臼群土器



第39図 第三群土器



第40図 第Ⅲ群土器



第41图 第三群土器

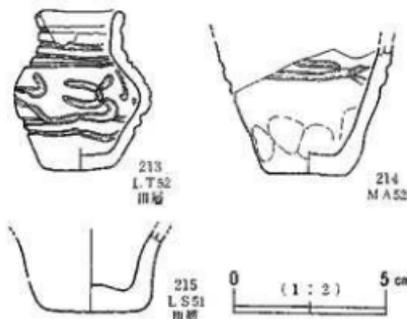
- a. 口縁部に撚紐の側面瓦痕文が施されるもの (205)。
 b. 条線又は櫛目状の文様が施されるもの (206)。
 c. 地文のみのもの (207・208)。

②把手部の資料である (第41図209~212)。

口唇部から把手が取り付くもの (209・212) とそうでないもの (210・211) がある。

③ミニチュア土器である (第42図)。

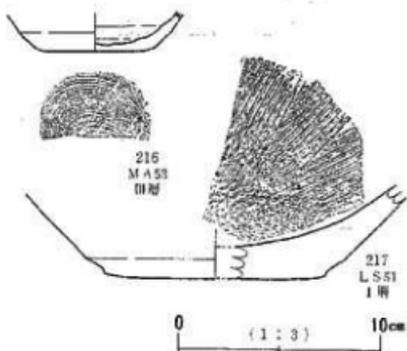
213は器高5.2cm、横走する沈線間に弧状文が施されている。胎土に2~5mmの砂粒を少量含み、焼成はやや不良である。色調は、にぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。



第42図 ミニチュア土器

第IV群土器 (第43図)

216は土師器杯の底部破片である。胎土に細砂を含み、焼成は良好である。色調は、外面がにぶい赤褐色(5YR5/4)、内面が浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。217は櫛鉢の底部破片である。15条1単位の知し目を施している。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は、暗赤褐色(2.5YR3/3)を呈する。



第43図 第IV群土器

(2)土製品

土製品として掲載したものは、土偶、鐔形土製品、土錘、盤状土製品である。出土地点は、いずれもLT,LS,LRラインの遺物が最も集中して出土している部分であり、土器・石器と一緒に出土している。

①土偶 (第44図~第46図)

218は目と鼻が抽象的に表現された頭部の資料である。首のつき方から顔を前方に突き出した姿を推測させる。

219~223は腕の部分の資料である。219は背面が平になるように面取りされており、右腕

と推測される。220～222は、上部は欠損しておらず、その横の部分に欠損が認められることから、腕の部分と推測された。いずれも橙色に塗彩されている。222は、断面が円形、空洞の細い工具により一定の間隔に刺突が行われている。223も橙色に塗彩された痕跡が認められ、やや粗いケズリ調整が加えられている。

224は腰の部分の資料と推測され、屈折像土偶の可能性が考えられるものである。

225は脚部の資料であり、立ててみるとO脚である。縦方向のケズリ調整を行い、欠損部付近の正面から内側にかけて2条の沈線が施されている。欠損部にはアスファルトが付着している。

226～232は、胴部を中心とする資料である。226の胎土には石英、雲母の混入が認められる。227は腕が短く完結しており、肩のあたりに紐を通したと思われる貫通孔が認められる。頭部は胴部と一体としてはつくりず、その代わりにくぼみだけを設けている。そのくぼみの部分にアスファルトが付着していることから、別につくった頭部をくぼみに接着したものと推測される。また、胴部の欠損面をみると、焼成前についたと推測される溝状のくぼみが観察された。228は、首の部分が前面に伸びていることから、218と同じように顔が前に突き出た土偶が想像される。また、228は219と同一個体と推測される。231は細い沈線により文様が描かれており、背面は三角形状にくぼみが認められる。欠損面をみると、227と同様に焼成前についたと考えられる円形ないし楕円形のくぼみが観察される。232は223と同一個体であり、橙色に塗彩された痕跡が認められる。腹面と背面に2ないし3本一組の沈線により「X」字状の文様が描かれ、沈線間に縄文(RL)が充填されている。肩の部分に227と同じような貫通孔が認められる。

② 鐔形土製品 (第47図)

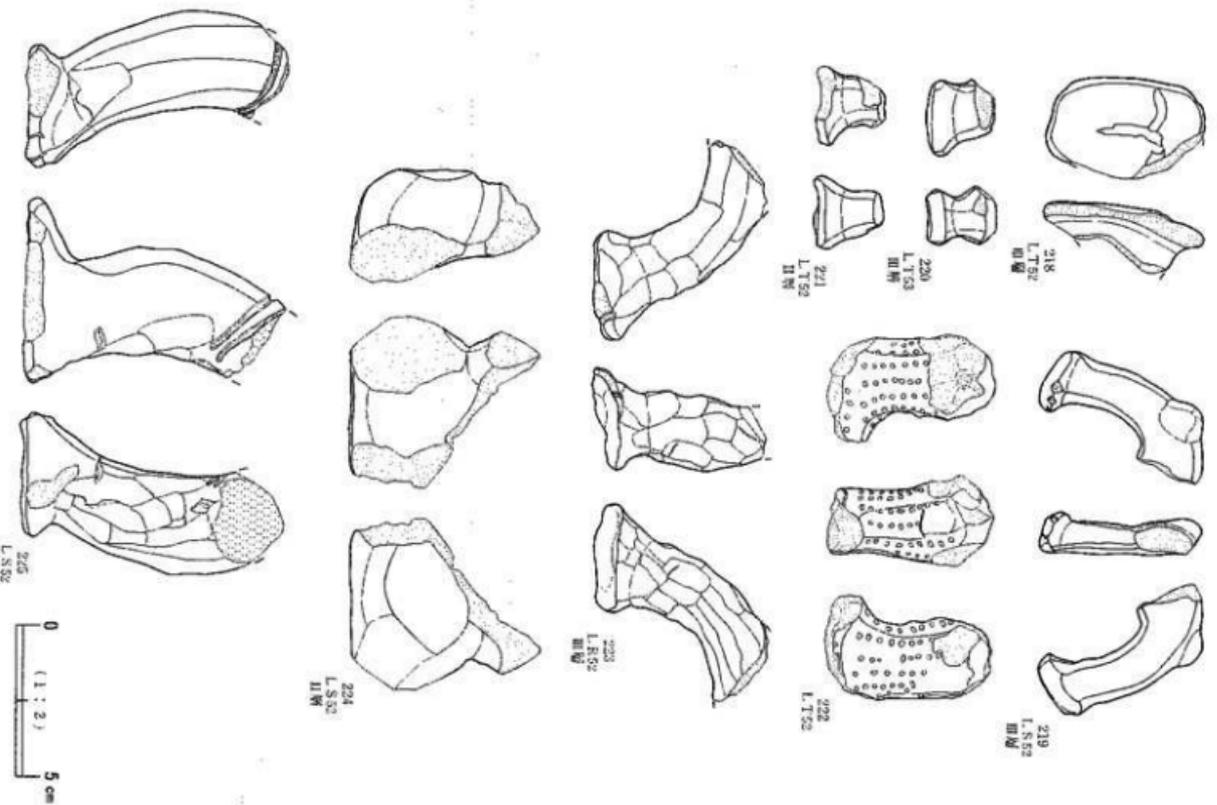
234・235いずれも鐔状の突帯を有し、234には穿孔しようとした痕跡が両側に認められる。235にはローマ数字の「X」状の文様が施され、下底に近い両側に貫通孔が穿たれている。236は235同様下底に近い両側に貫通孔が認められる。内面には煤状炭化物が付着している。

③ 土錘 (第47図237)

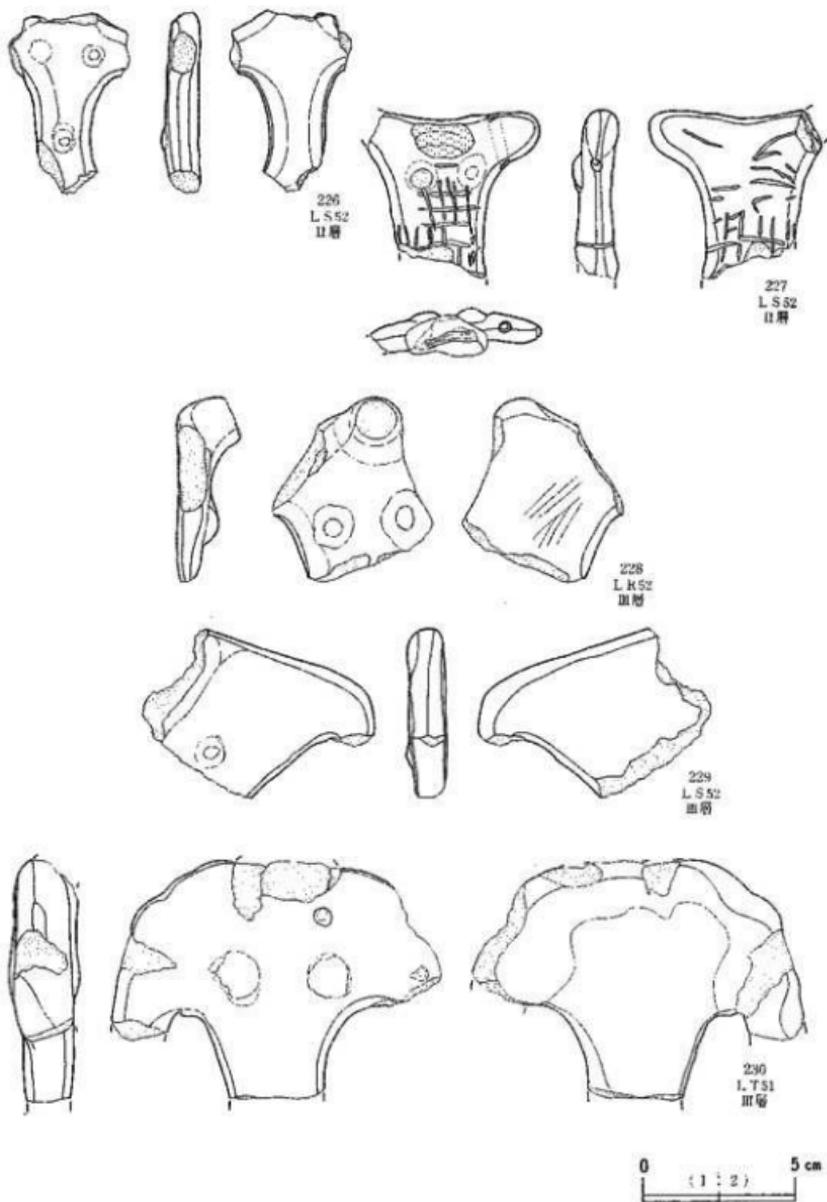
1点のみの出土である。胎土に5mmぐらゐの砂粒を少量含む。焼成は普通である。

④ 盤状土製品 (第47図238～243)

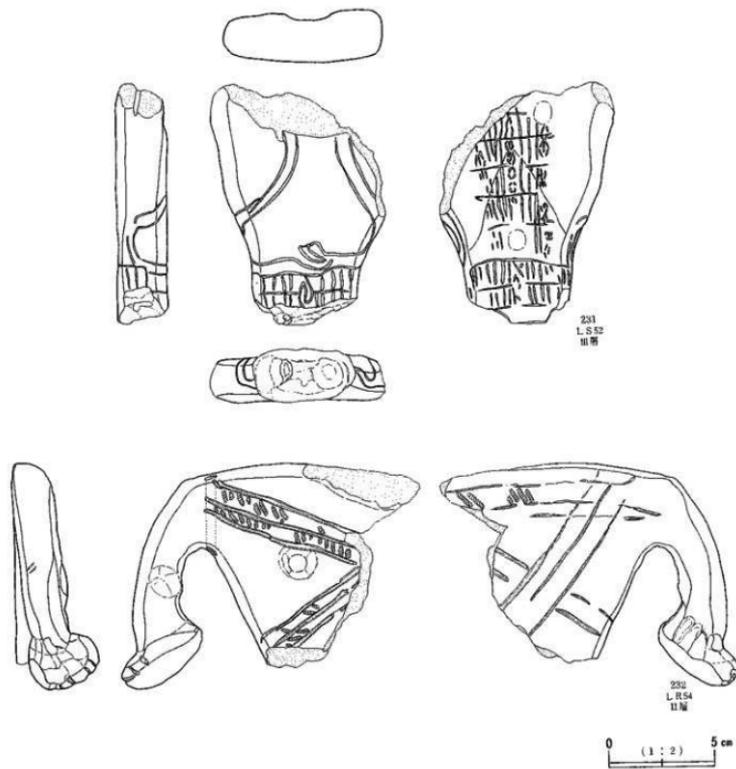
239は朱が塗彩された土器破片、240は土器底部破片を転用したものである。



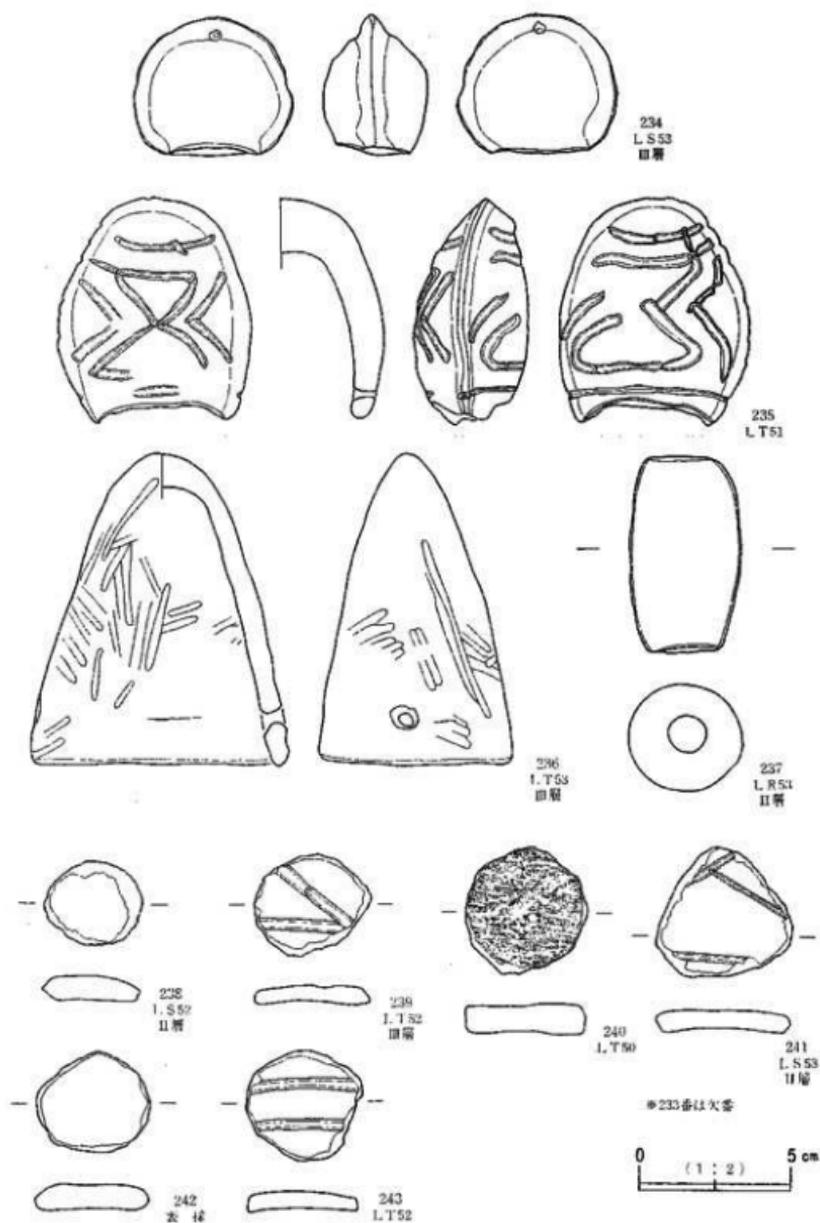
第44図 土製品 (1) - 土師



第45図 土製品(2) - 土偶



第46図 土製品(3) - 土偶



第47図 土製品(4) - 鐙形土製品・土鍾・盤状土製品

2. 石器

出土した石器は、
 剥片石器96点、礫石
 器48点、その他剥片
 がコンテナ1箱であ
 る。出土地点は、L
 S52グリッドを中心
 とする沢の中からほ
 とんどものが出上
 している。以下に剥
 片石器と礫石器とに
 分けて記述する。

(1) 剥片石器

①石鎌 (第49図244
 ~248) 無茎のもの
 (244) と有茎もの
 (245~248) があ
 る。無茎のものは、
 基部に挿入がある。
 有茎のものは、基部
 に挿入があるもの
 (245)、基部が直線

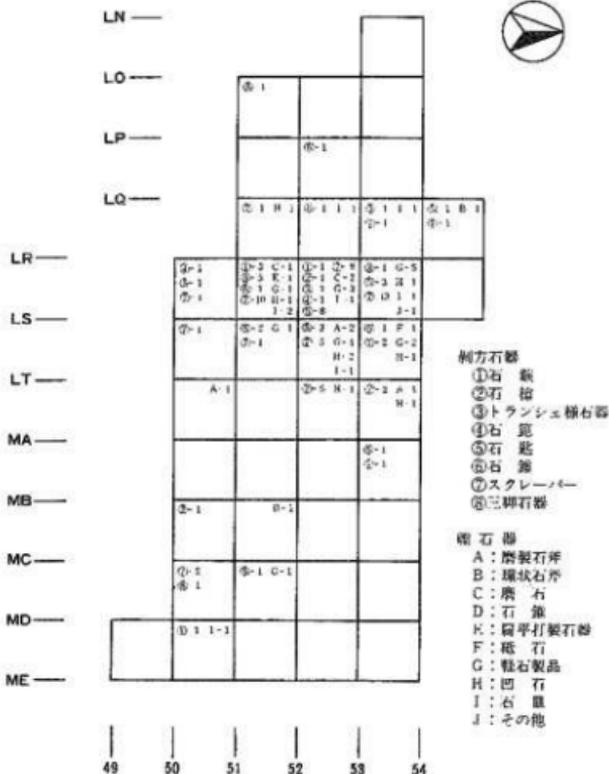
的なもの(247・248)、基部が突出ぎみのもの(246)がある。244を除き、いずれも基部または先端部付近に欠失部分が認められる。

②石槍 (第49図249・250) いずれも柳葉形を呈し、全面に調整が加えられている。

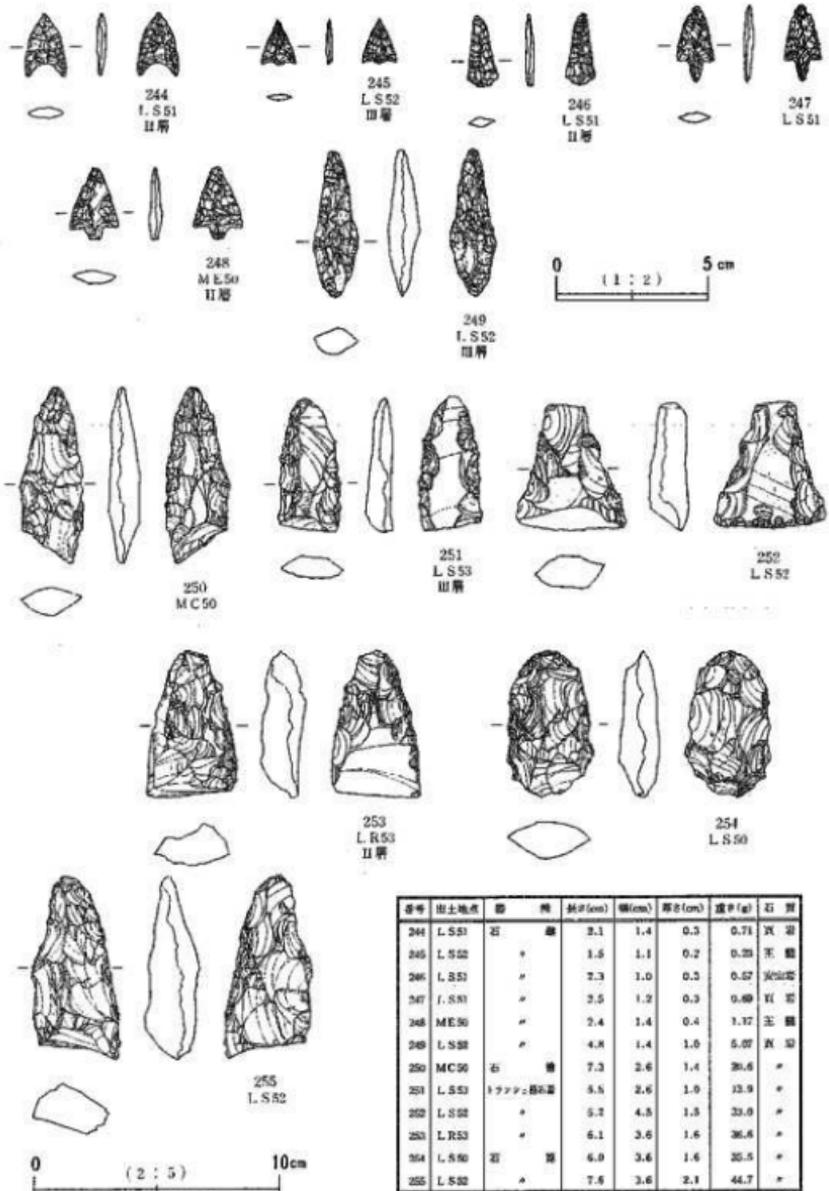
③トランシュ様石器 (第49図251~253) 腹面及び背面に第一次加工面を残し、かつ刃部に第二次加工が施されないものである。ここに掲載したものは、縦長剥片を用いている。形態の上では、二等辺三角形形状を呈し側縁にふくらみをもつもの(251・253)、撥形を呈し側縁がくびれるもの(252)に分けられる。

④石篋 (第49図254・255) 楕円形に近い形態のもの(254)と頭部から刃部にかけて開く形態のもの(255)がある。

⑤石匙 (第50図256~第52図283) 縦形のもの(256~274)と横形のもの(275~283)に分



第48図 グリッド別石器出土状況



第49図 出土石器(1)

けられる。調整を施す部位は端部又は側縁であるが、259は背面のほぼ全面に調整が施されている。265のつまみ部は、石錐としても使用された可能性がある。つまみと腹面のバルブの位置は一致する場合が多いが、そうでないものもある。260・271はバルブが端部にあり、262・273はつまみの横に認められる。その場合には、つまみ部の厚みがなく貧弱になる。取り出した剝片の形状をうまく利用し、つまみをつくり出し易い部位を選んでいるものと推測される。279・283のつまみの部分にはアスファルトが付着している。

⑥石錐（第52図284） 逆三角形の剝片の端部の両面に調整を施し、断面が三角形の錐部をつくり出している。

⑦スクレーパー（第53図285～第58図338） 刃部の形成される部位により分類される。

A類 腹面の縁辺に調整を行い刃部を形成するもの（285～292）。

B類 B1類 背面の縁辺に調整を行い刃部を形成するもの（293～319）。

B2類 背面全体に調整を行うもの（320）。

AB類 腹面と背面にそれぞれ調整を行い刃部を形成するもの（321～324）。

C類 両面から調整を行い刃部を形成するもの（325～338）。

B1類の中の294・298～301については、長方形の剝片の端部から側縁にかけて刃部が形成されている。

⑧三脚椀石器（第58図339） 三脚状の形態の石器であり、1点のみ出土した。表面と裏面に自然面を残す。

〔礫石器〕

①磨製石斧（第59図340～343） 340～342の断面は隅丸方形を呈するものであり、両側縁が良く研磨されている。340の頭部については、ほとんど研磨されていない。

②環状石斧（第59図344） 表面は円盤状の礫の自然面をそのまま留め、裏面は偏平になるように打ち欠き鈍い刃部をつくり出している。中心に貫通孔をもつ。

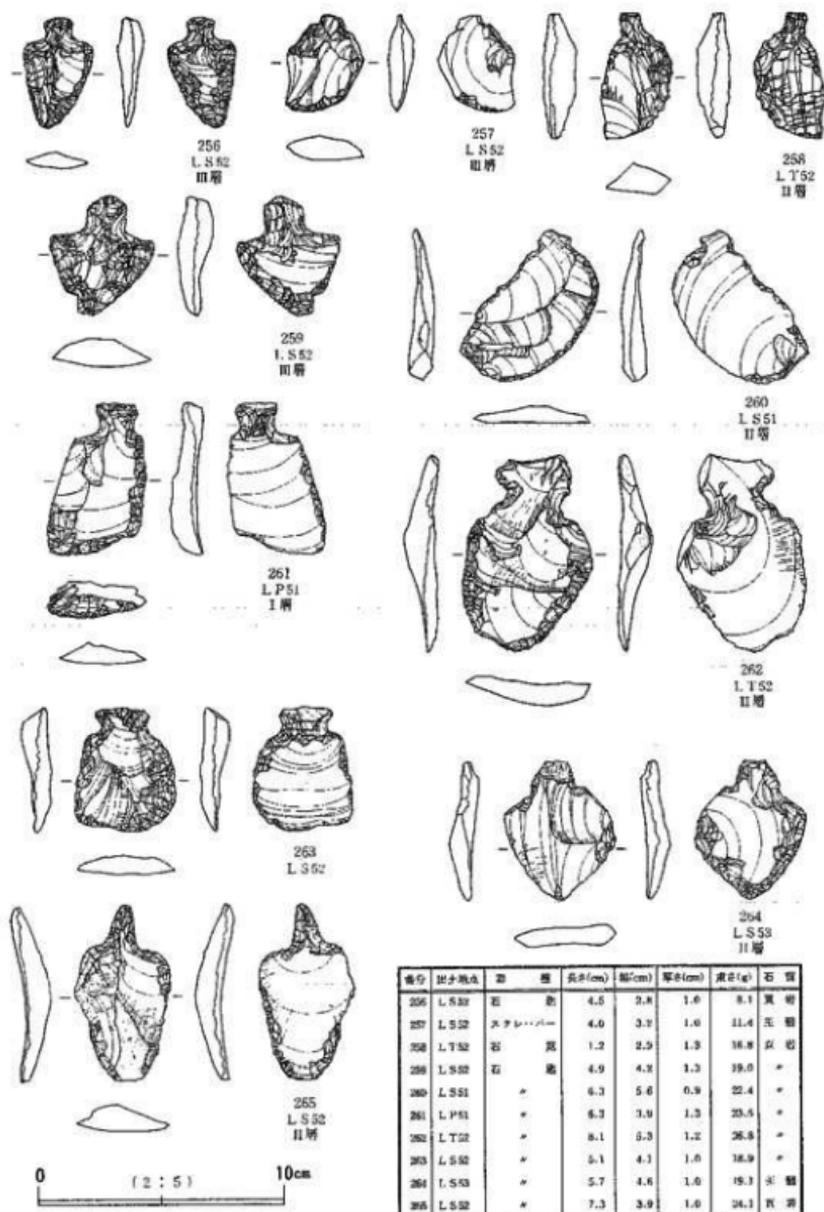
③磨石（第60図345～347） 346は最終的にそのような形状にすることを意図したものかもしれない。亀裂が入り、脆くなっている。

④石錘（第60図348） 扁平な円礫の両端を打ち欠いたもので、1点のみの出土である。

⑤砥石（第60図349） 平らな面に置くと安定しないが、掌に入れた場合しっくりくるような形状である。

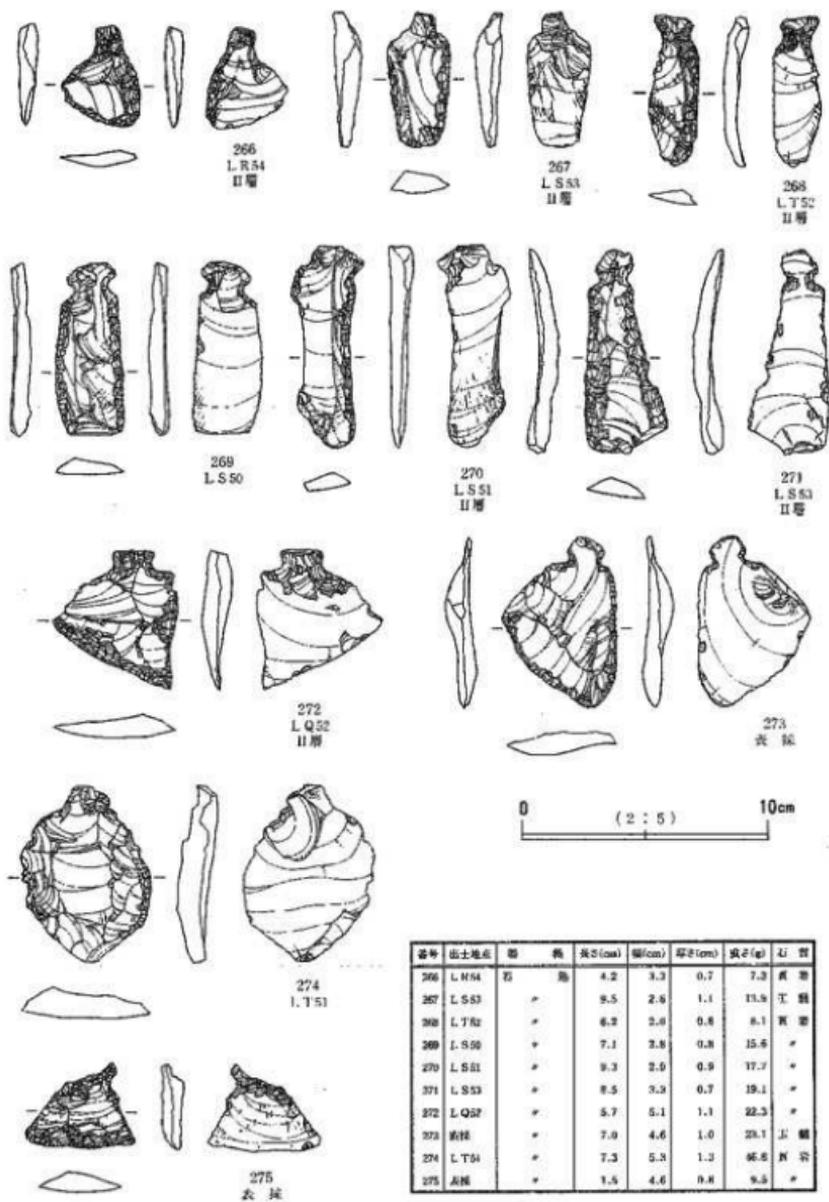
⑥扁平打製石器（第60図350） 扁平な礫の両面に調整を施したもので、1点のみの出土である。

⑦軽石製品等（第61図～第64図369） 軽石に加工を加えたものであるが、石器か石製品か区別ができなかったものである。このため便宜上、軽石製品等としてここに掲載した。その分



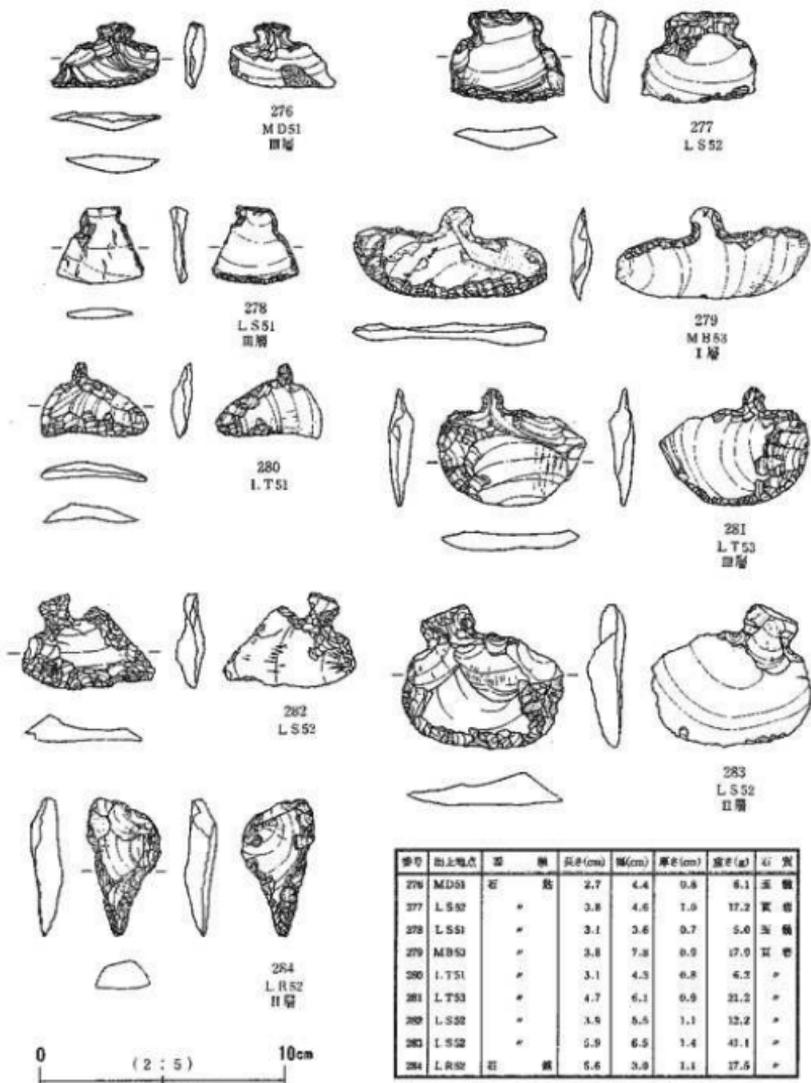
第50図 出土石器(2)

登川沢 I 遺跡



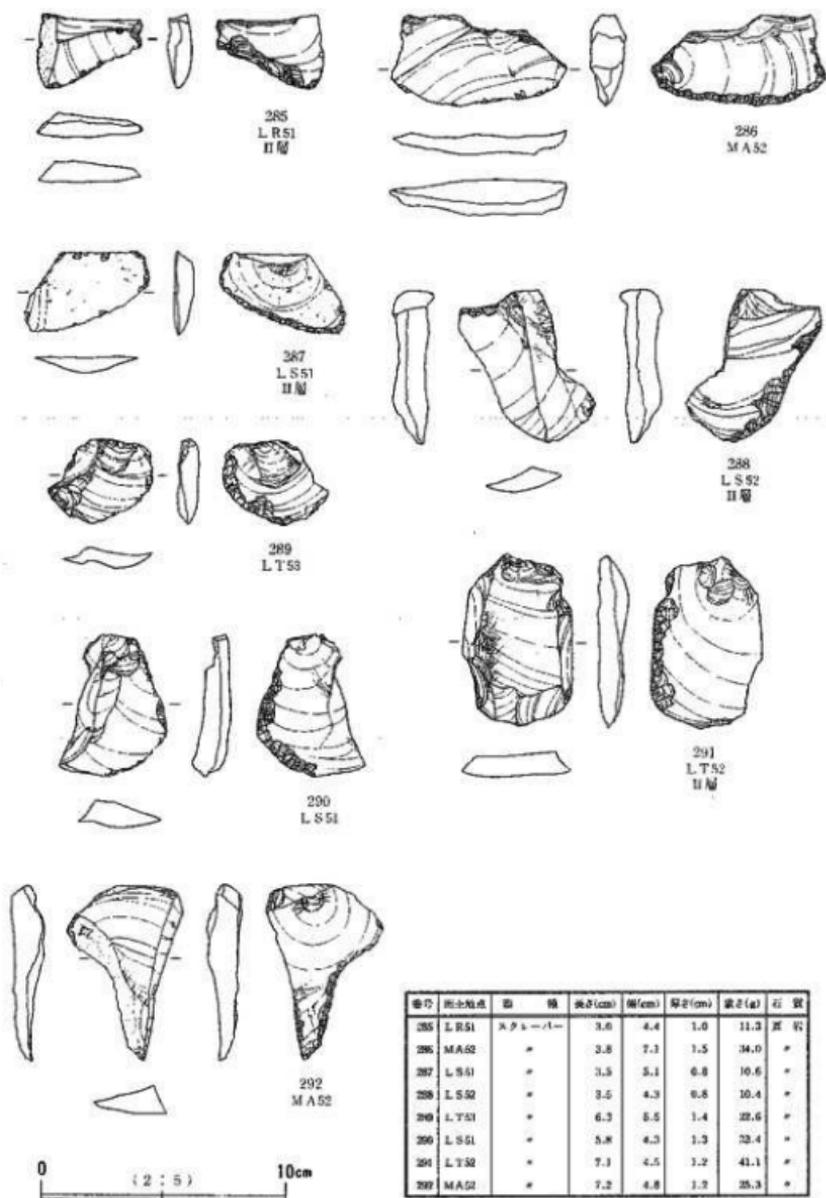
番号	出土地点	器名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質
266	L.N.54	石	4.2	3.3	0.7	7.3	頁岩
267	L.S.53	*	9.5	2.6	1.1	13.9	片岩
268	L.T.52	*	6.3	2.0	0.8	8.1	頁岩
269	L.S.50	*	7.1	3.8	0.8	15.6	*
270	L.S.51	*	9.3	2.0	0.9	17.7	*
271	L.S.53	*	8.5	3.2	0.7	19.1	*
272	L.Q.52	*	5.7	5.1	1.1	22.3	*
273	表塚	*	7.0	4.6	1.0	23.1	片岩
274	L.T.54	*	7.3	5.3	1.3	46.6	片岩
275	表塚	*	1.5	4.6	0.8	9.5	*

第51図 出土石器(3)



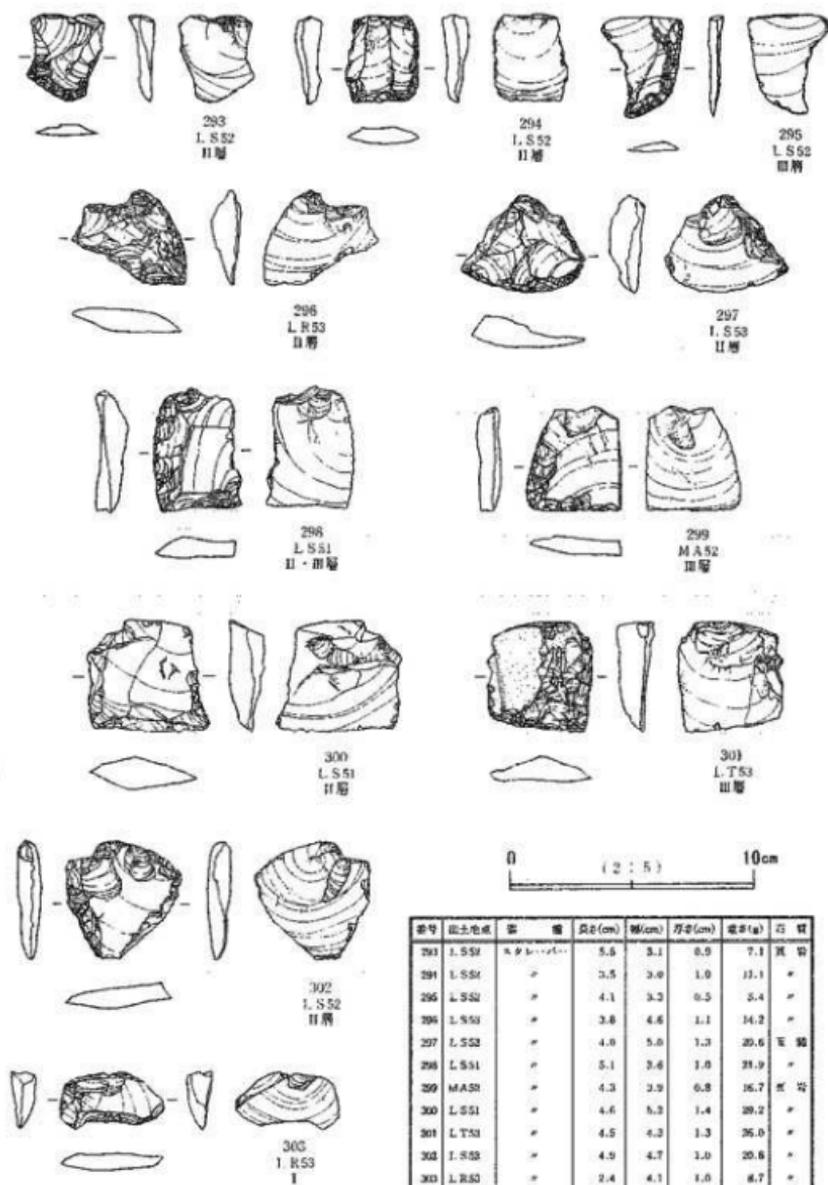
第52図 出土石器(4)

盆刈沢 I 遺跡



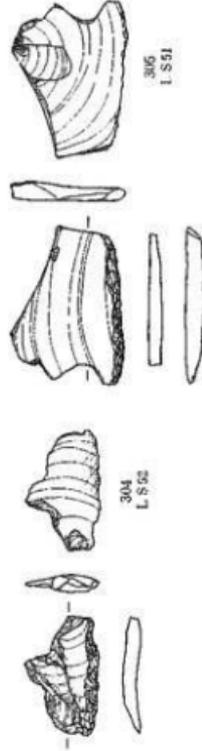
番号	出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質
285	L R 51	片 石	3.6	4.4	1.0	11.3	頁 岩
286	M A 52	片 石	3.8	7.3	1.5	34.0	片 岩
287	L S 51	片 石	3.5	5.1	0.8	10.6	片 岩
288	L S 52	片 石	3.5	4.3	0.6	10.4	片 岩
289	L T 51	片 石	6.3	5.5	1.4	22.6	片 岩
290	L S 51	片 石	5.8	4.3	1.3	23.4	片 岩
291	L T 52	片 石	7.3	4.5	1.2	41.1	片 岩
292	M A 52	片 石	7.2	4.8	1.3	25.3	片 岩

第53図 出土石器(5)



第54図 出土石器(6)

番号	出土地蔵	型	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	片層
293	L.S52	スライス...	5.5	3.1	0.9	7.1	片層
294	L.S52	*	2.5	2.0	1.0	12.1	*
295	L.S52	*	4.1	3.2	0.5	5.4	*
296	L.S53	*	3.8	4.6	1.1	14.2	*
297	L.S53	*	4.0	5.0	1.2	20.6	片層
298	L.S51	*	5.1	3.6	1.0	21.9	*
299	M.A52	*	4.3	2.9	0.8	16.7	片層
300	L.S51	*	4.6	5.2	1.4	29.2	*
301	L.T53	*	4.5	4.3	1.3	26.0	*
302	L.S52	*	4.9	4.7	1.0	20.6	*
303	L.R53	I	2.4	4.1	1.0	6.7	*

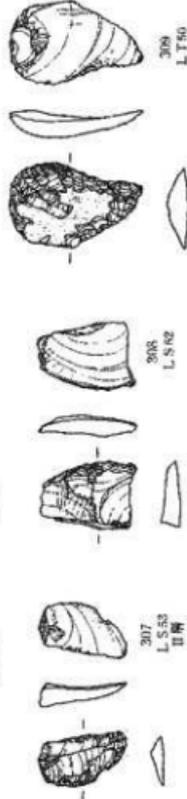
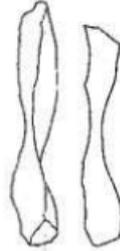


304
LS92

303
LS91



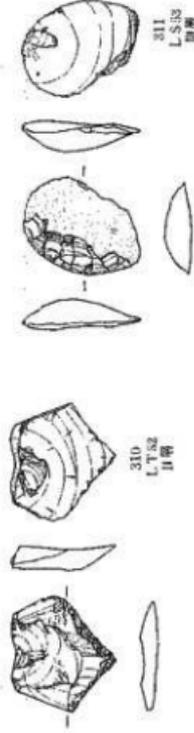
306
MDS0
LS90



307
LS93
LS93

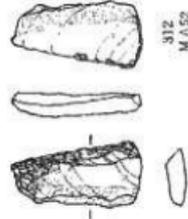
308
LS92

309
LT60



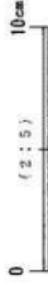
310
LT92
LS92

311
LS99
LS99

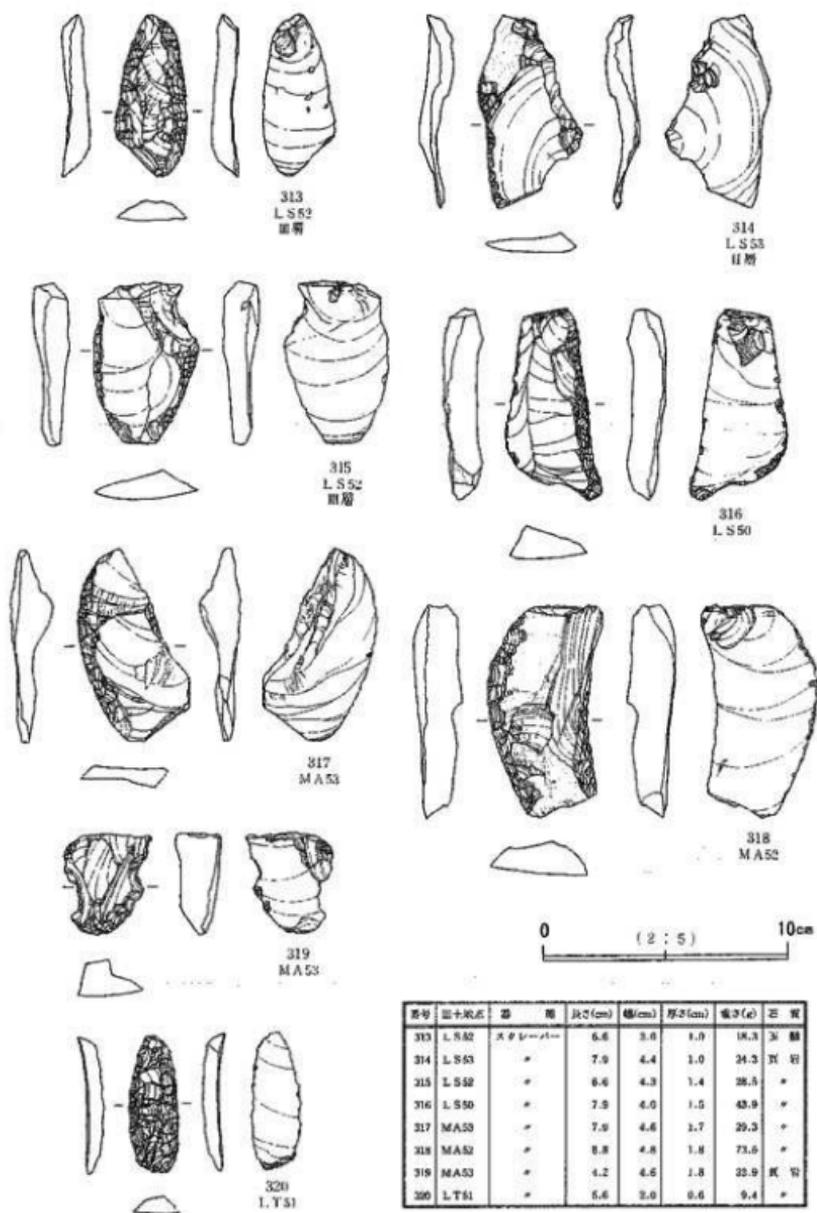


312
MA92

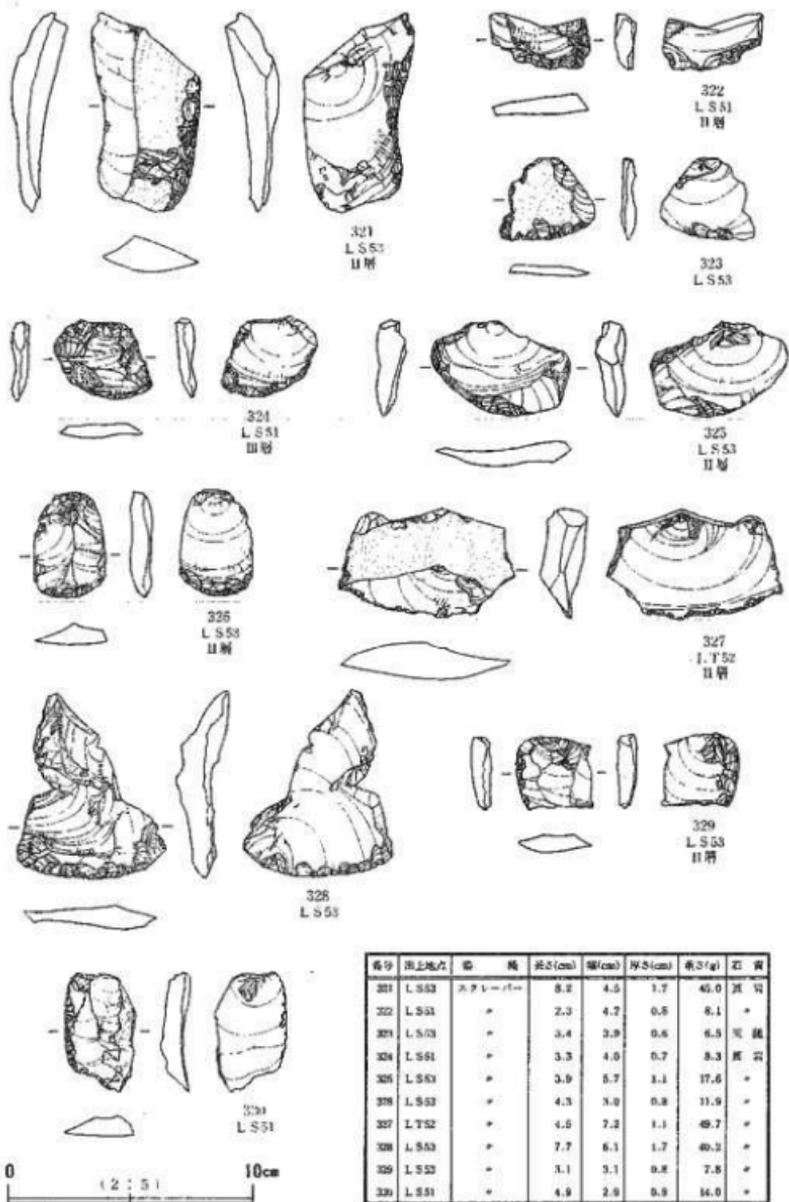
番号	出土地点	形 式	高A(cm)	幅B(cm)	厚C(mm)	重量(g)	注 記
303	L.S92	尖少口一耳	3.1	4.2	0.7	6.3	LS91
306	L.S91	*	4.7	6.4	0.7	37.0	*
308	MDS0	*	4.9	10.0	1.5	62.0	*
307	L.S93	*	3.6	2.3	0.3	4.7	*
309	L.S92	*	4.0	2.8	0.7	8.7	LS93
310	LT92	*	5.5	3.5	1.0	35.9	LS92
311	L.S99	*	4.2	4.8	0.8	14.9	*
312	MA92	*	4.8	4.0	1.2	19.3	*
313	MA92	*	5.4	2.7	0.3	13.2	*



第55圖 出土石器 (7)



第56図 出土石器(8)

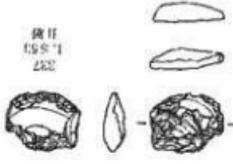
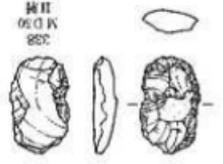
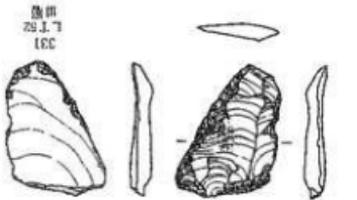
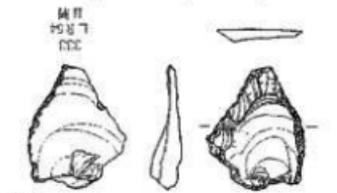
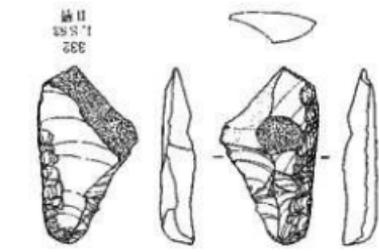
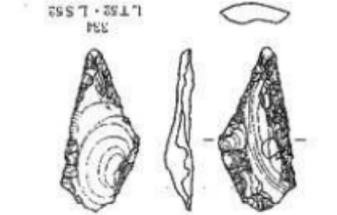
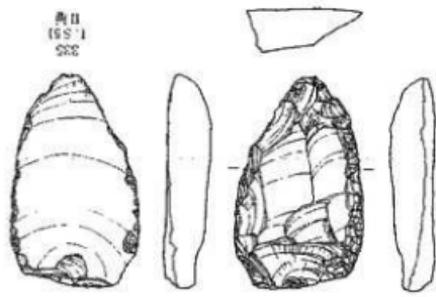
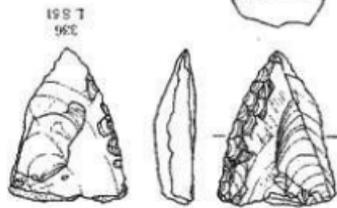
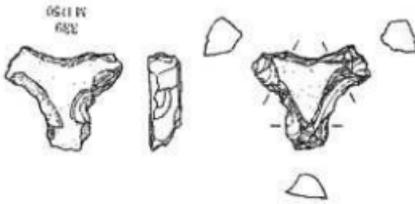
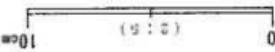


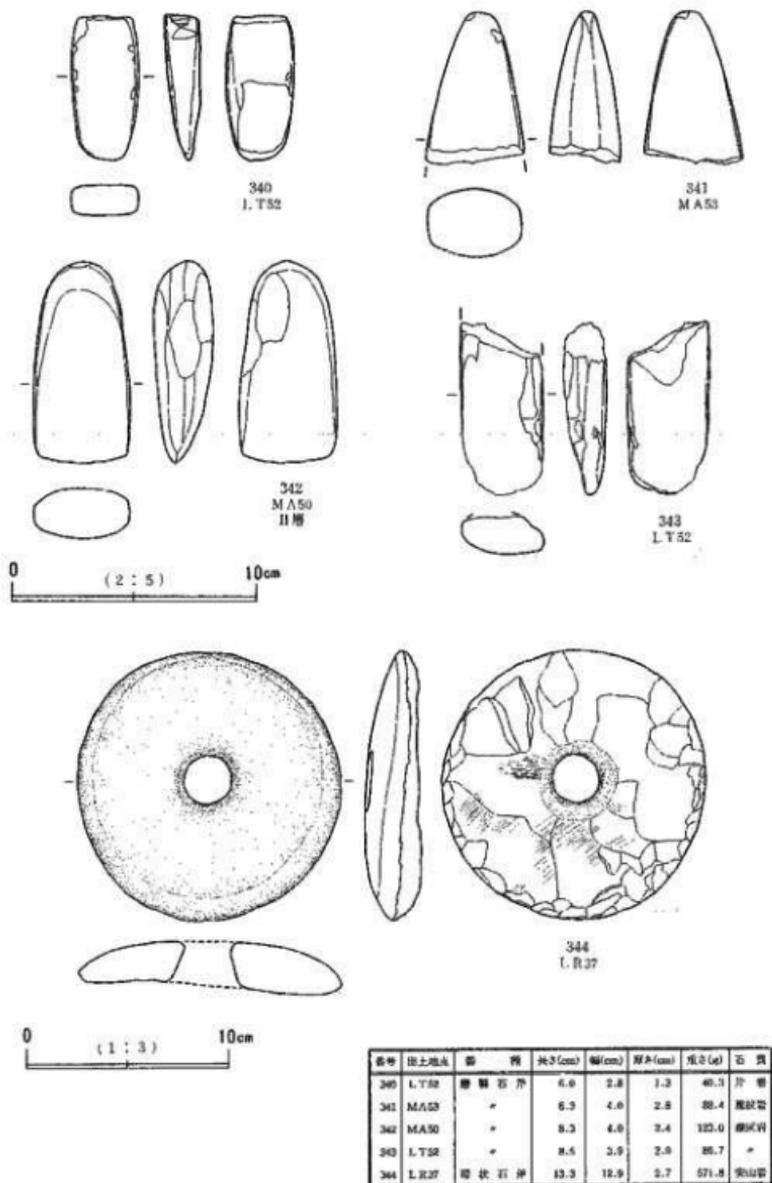
番号	出土地点	形 態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 質
321	L.S53	スクリュー状	8.2	4.5	1.7	45.0	珸 質
322	L.S53	*	2.3	4.2	0.5	8.1	*
323	L.S53	*	3.4	3.9	0.6	6.5	珸 質
324	L.S61	*	3.3	4.0	0.7	8.3	珸 質
325	L.S61	*	3.9	5.7	1.1	17.6	*
326	L.S53	*	4.3	3.0	0.8	11.9	*
327	L.T52	*	4.5	2.3	1.1	48.7	*
328	L.S53	*	7.7	6.1	1.7	40.2	*
329	L.S53	*	1.1	1.1	0.8	7.8	*
330	L.S53	*	4.9	2.9	0.9	14.0	*

第57図 出土石器(9)

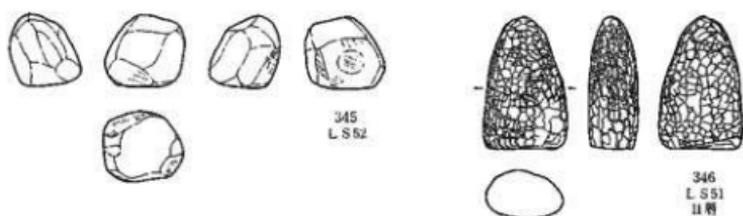
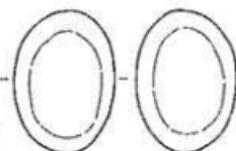
新58圖 田子石器 (10)

標号	出土層位	種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
329	IV	片断	4.3	4.3	0.8	1.4	
328	IV	片断	4.0	2.4	0.8	9.8	
327	L.S.51	片断	2.4	2.1	0.4	6.5	
326	L.S.51	片断	6.4	1.7	0.8	42.9	
325	L.S.51	片断	8.2	5.2	1.0	90.3	片断
324	L.T.52・L.S.51	片断	6.7	3.0	1.1	14.2	片断
323	L.R.54	片断	2.1	4.0	1.2	12.5	
322	L.S.51	片断	2.3	4.1	1.3	21.7	
321	L.T.52	片断	5.5	4.2	0.4	14.2	片断



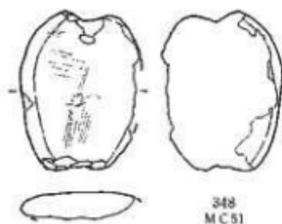
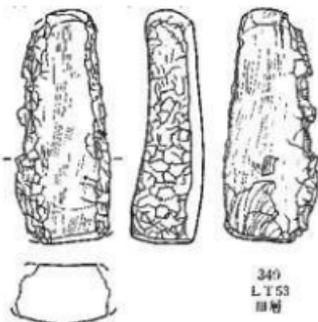
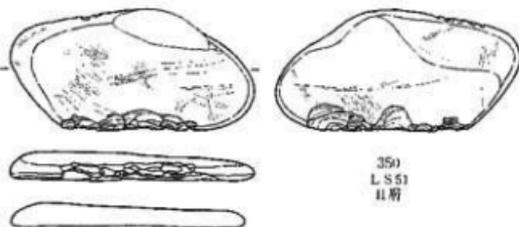


第59図 出土石器 (11)

345
L.S52346
L.S51
皿形347
L.S52
皿形

0 (2:5) 10cm

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	高さ(g)	石質
345	L.S52	餅	3.0	3.4	2.7	12.2	板状岩
346	L.S51	*	6.5	4.0	2.4	29.4	*
347	L.S52	*	7.0	5.0	4.8	229.8	板状岩
348	MC51	石	7.9	5.8	1.5	94.1	雲山石
349	L.T53	磁	11.5	4.5	2.3	99.1	瀬戸式
350	L.S51	磁	5.9	12.1	1.4	80.4	雲山岩

348
MC51349
L.T53
皿形350
L.S51
皿形

0 (1:3) 10cm

第60図 出土石器 (12)

類と特徴は、以下のとおりである。

- i. 断面形が a 長方形又は台形状のもの (351~354・357)、b かまぼこ状のもの (355・356・358~364・366・368・369)、c 円形又は楕円形状のもの (365・367) に分けられる。
- ii. a はほぼ全面が擦られ、平滑である。
- iii. b は特に弦の部分が擦られ、平滑になっている。擦られた面は、平坦なものと湾曲したものの (359・363) が認められる。
- iv. c はほぼ全面が擦られ、端部が斜めに擦られる共通点が認められる。うち1点は上半部に貫通孔が認められる (365)。
- v. 小型の2、3のものは水に浮くが、その他のものは始め浮いているが、時間がたつにつれ水分を吸収してやがて沈んでしまう。
- vi. 端部に溝を有するものが認められる (368)。

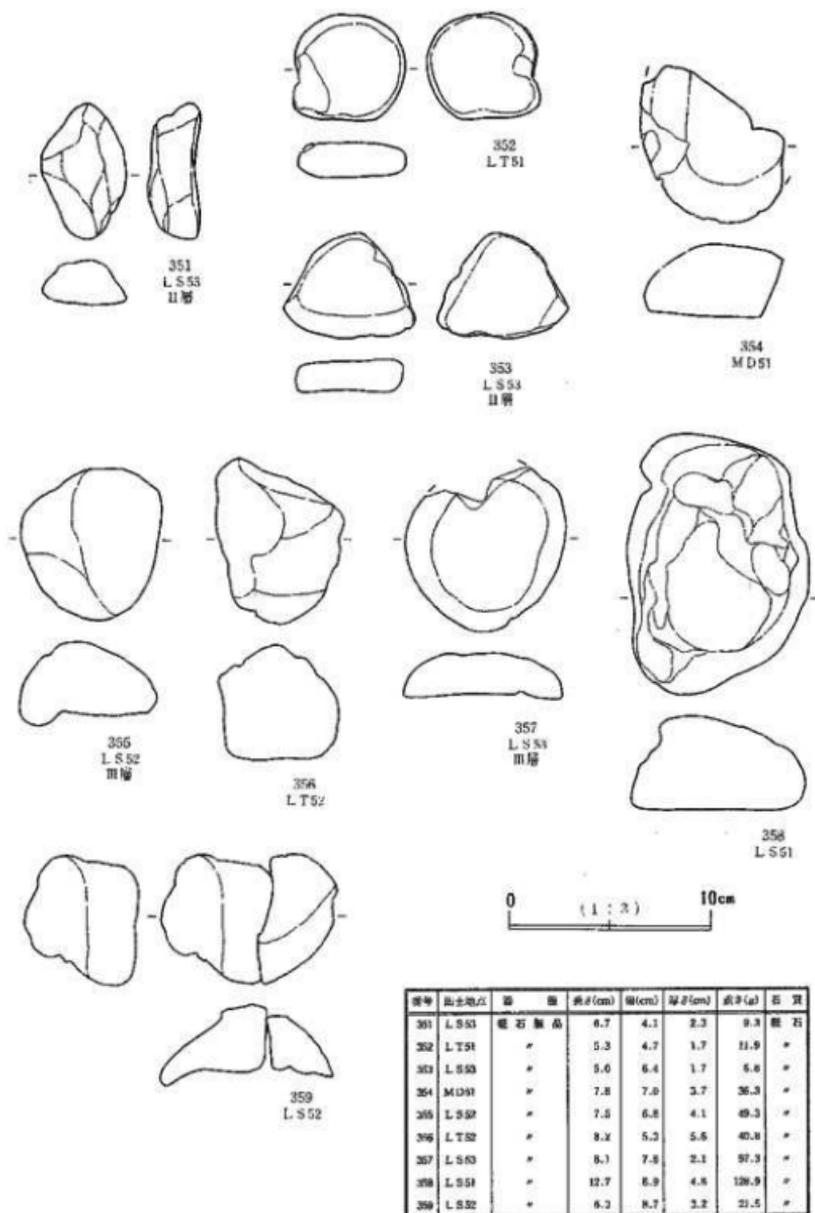
⑧凹石 (第64図371~第66図379) その一部にくぼみをもつ石器であり、372・377は石皿を転用したものである。

⑨石皿 (第66図380~第68図) 382・383・384には、裏面も使用された痕跡が認められる。382の裏面には溝状のくぼみが少なくとも2条認められ、383は裏面も石皿として使用されたものと推測され、中央部にいくにしたがって厚みがなくなっているのがわかる。384の裏面には線条痕が認められる。

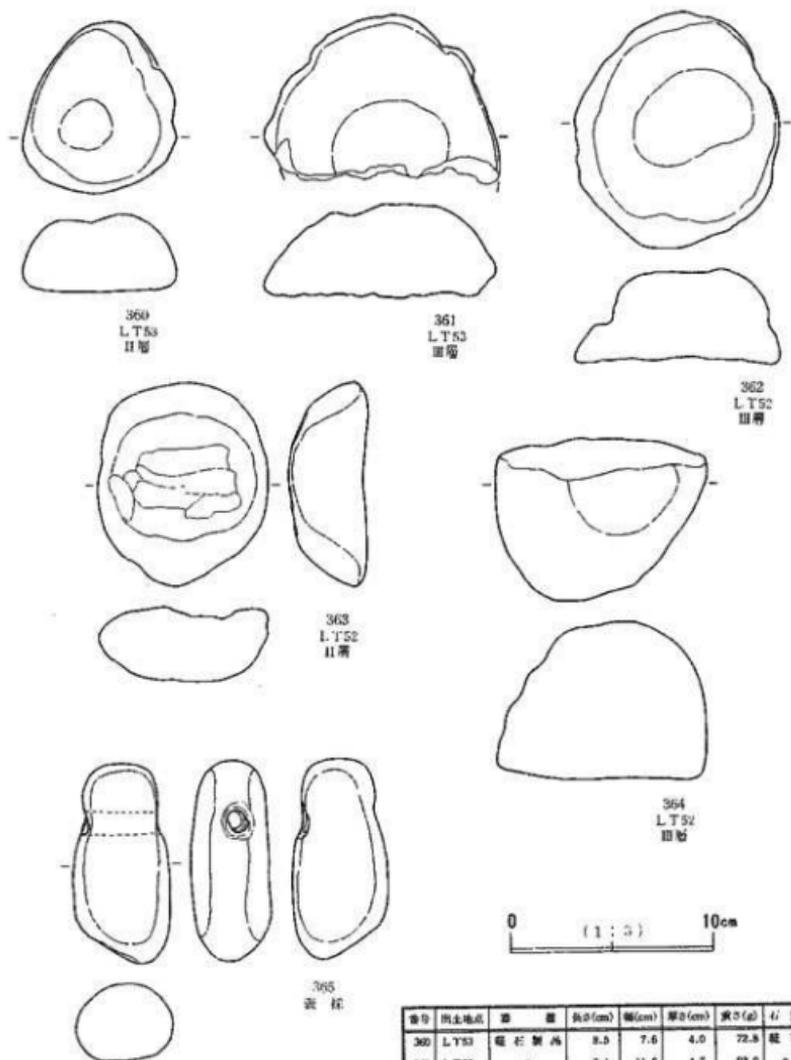
⑩その他 (第64図370) 棒状の礫の破片であり、火熱を受けた痕跡と擦痕が認められる。

(参考文献)

鈴木道之助『図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文』拓書房 1981 (昭和56年)

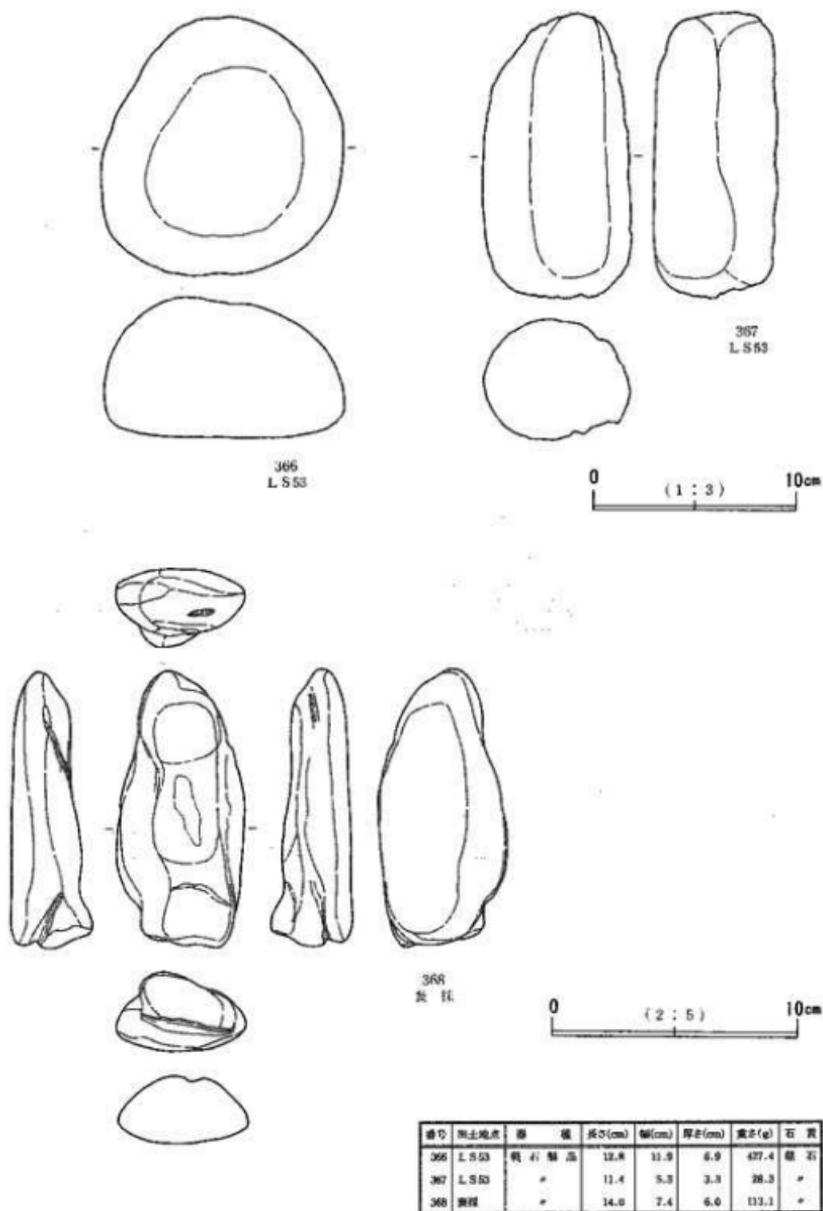


第61図 出土石器 (13)

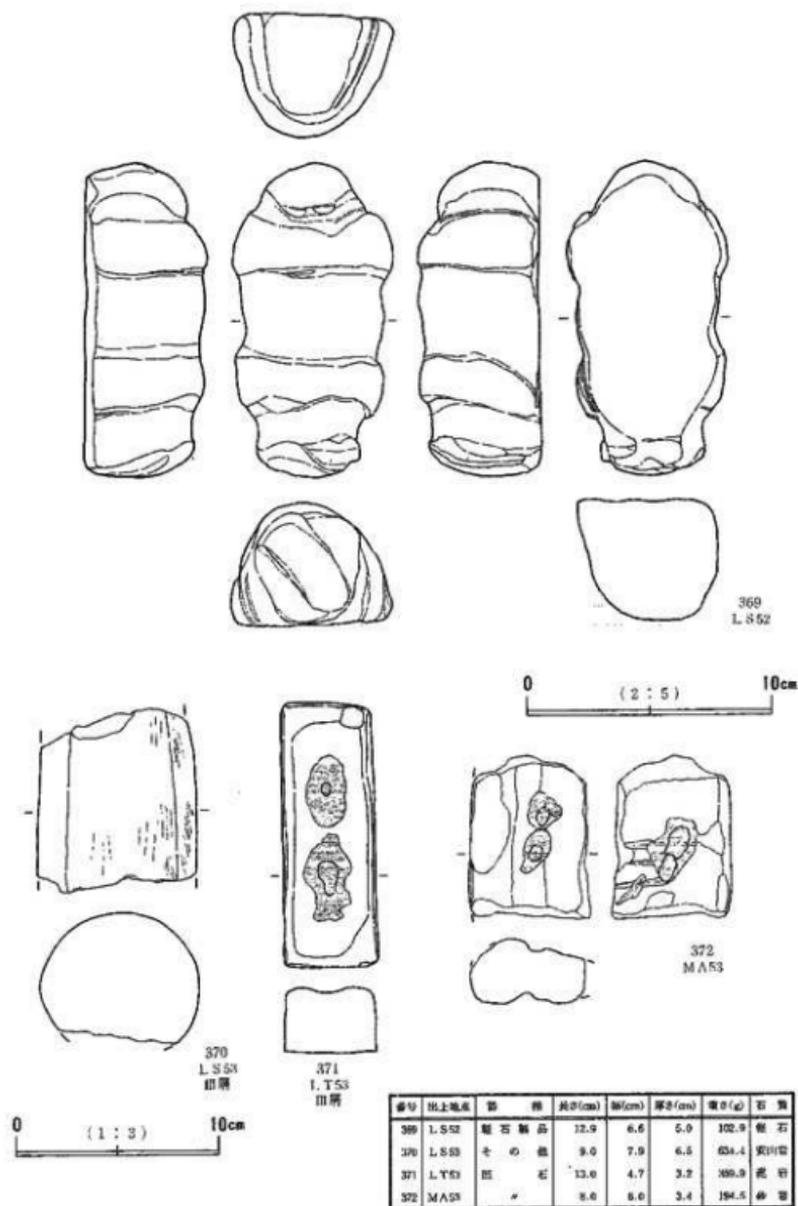


番号	出土地点	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質
360	L.T53	礫石製 凹形	8.5	7.6	4.0	72.8	礫石
361	L.T53	"	8.1	11.6	4.7	93.0	"
362	L.T52	"	11.6	10.0	4.6	146.5	"
363	L.T52	"	10.0	8.3	3.7	112.2	"
364	L.T52	"	7.9	10.4	7.7	180.4	"
365	溝根	"	9.9	4.7	3.8	46.0	"

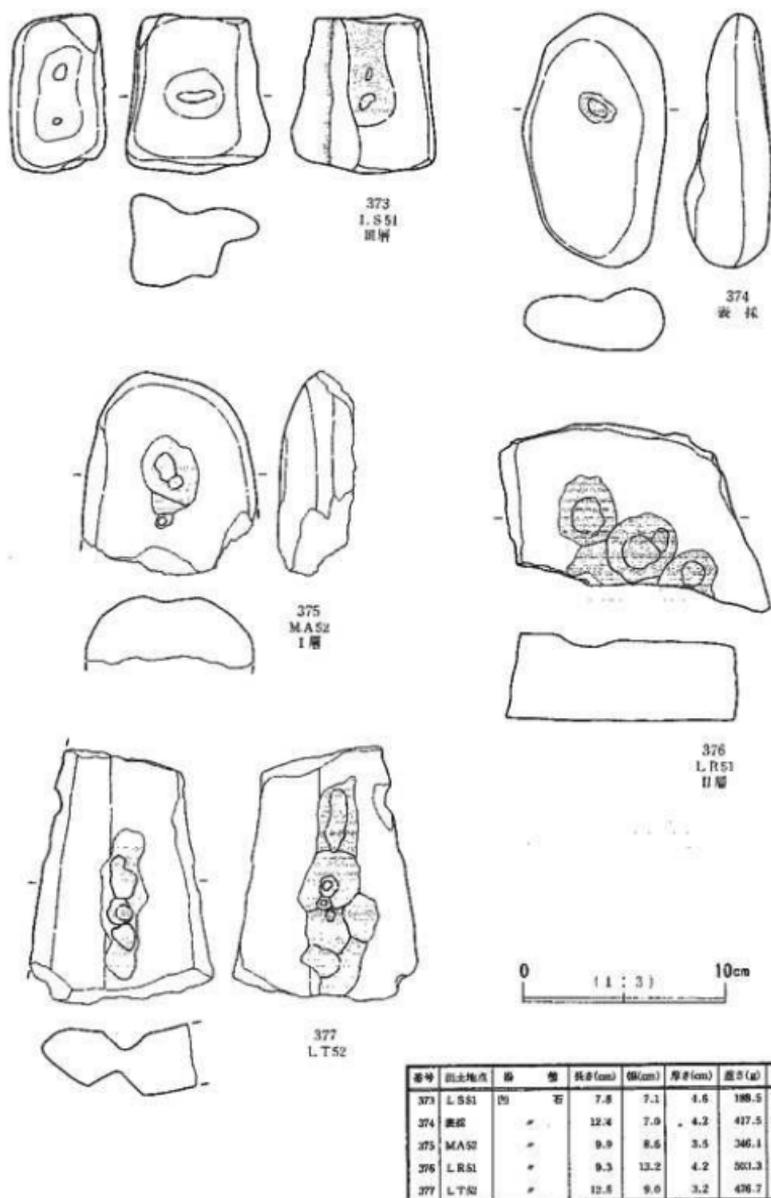
第62図 出土石器 (14)



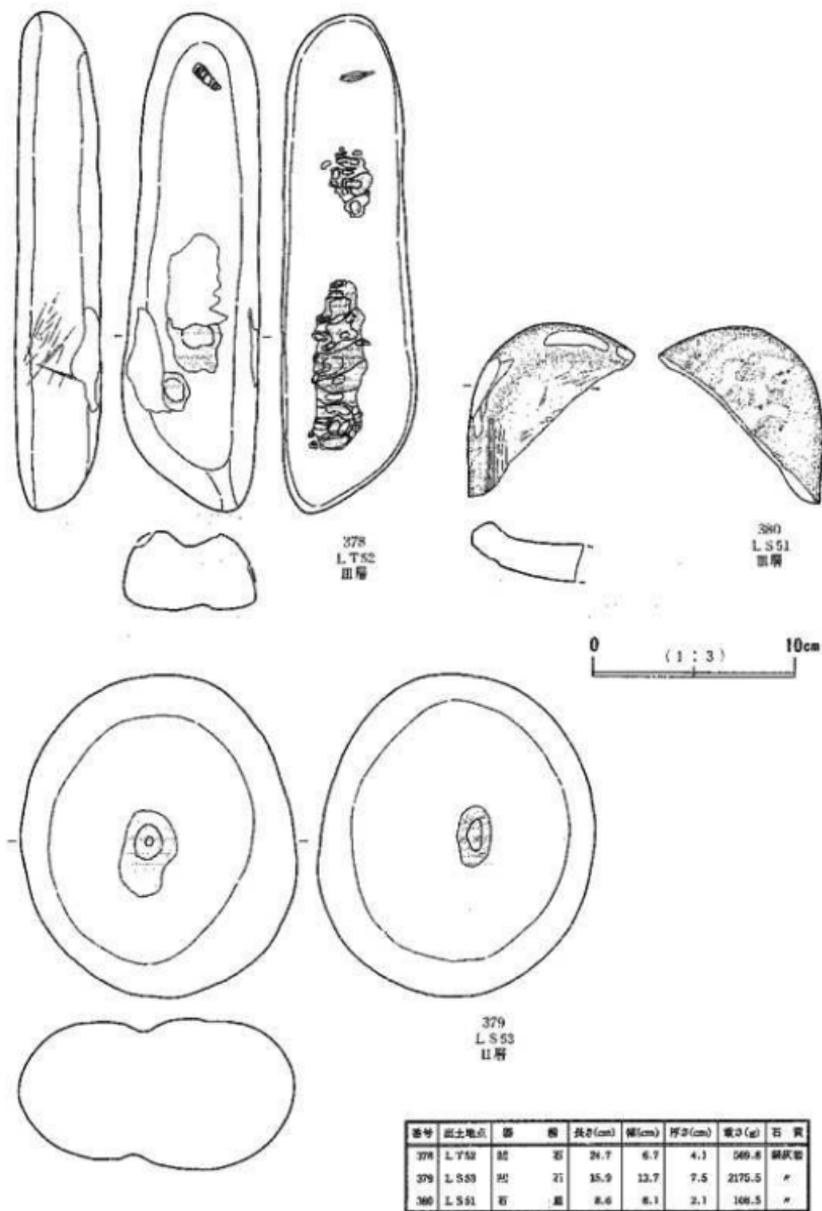
第63図 出土石器 (15)



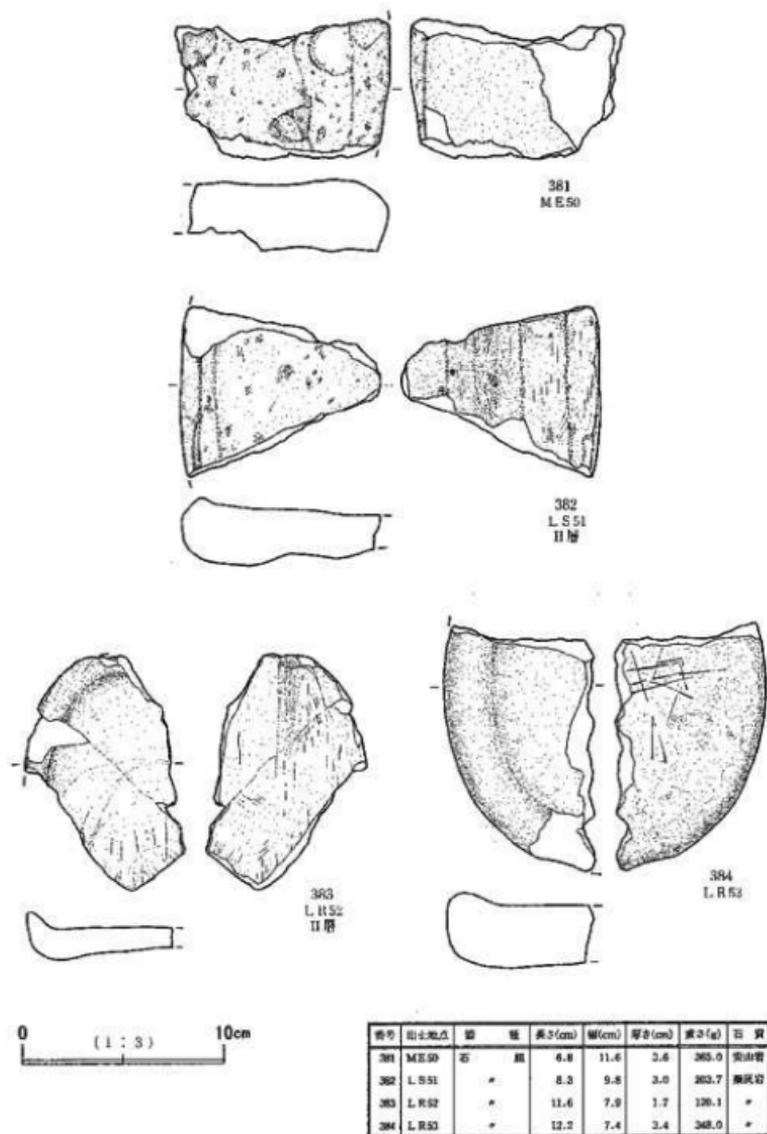
第64圖 出土石器 (16)



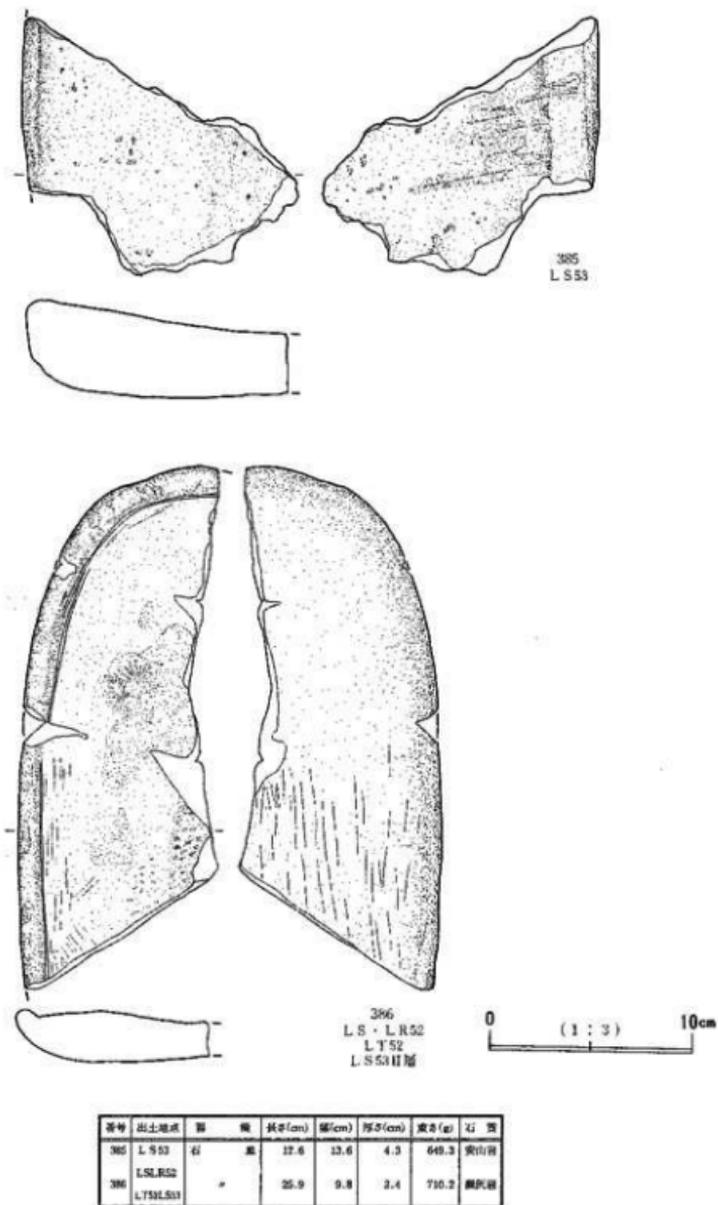
第65図 出土石器 (17)



第66図 出土石器 (18)



第67図 出土石器 (19)



第68図 出土石器 (20)

第3章 まとめ

萱刈沢Ⅰ遺跡の調査によって、台地北側の斜面が捨て場であったことが明らかになり、そこから縄文後期の遺物、特に土器と石器が発見された。ここでは、捨て場と縄文後期の土器（第Ⅲ群土器）について述べ、まとめたい。

1. 捨て場のあり方について

捨て場は北に萱刈沢Ⅱ遺跡、南に萱刈沢Ⅰ遺跡がそれぞれ立地する台地に挟まれた沢の急斜面にある。この捨て場からは、前述のように1,800個体をこえる土器及び土製品、石器等が発見された。遺物の出土状態については、特異な点は認められなかった。但し、土器が潰れた状態で出土する場合もみられたことから、そういうものについては斜面上方から投げ捨てられたものではなく、「置かれた」状況を推測できる。

また、出土遺物の中に少数ではあるが中期の土器も認められた。このことは、平成元年に行われた範囲確認調査の結果と微妙にかかわってくるように思われる。この時の調査は、捨て場の南側台地上を対象としたものであるが、中期の竪穴住居跡を検出している。したがって、中期にこの地に生活を営んだ人々は、北側の斜面を捨て場としてほとんど使用しなかったことが窺われる。

以上のことから、縄文時代中期と後期とでは捨て場とする場所の選定、さらには捨て場に対する意識の違いが認められるのではなからうか。これについて小林氏は、「前期から中期の遺跡では、集落跡と捨て場とがセットになる場合が多く、晩期の遺跡では、墓域と対になる場合が多い。」とし、『物』に対する意識の変化を見出している。そして、そういう意識の変革期として縄文後期を位置付けている¹⁾。捨て場という用語からは、廃棄物の処分場という意味合いしか感じ取れないが、少なくとも縄文後期以降にあっては、人を葬ると同じように物を葬ったひとつの空間と言えるのかもしれない。

2. 第Ⅲ群土器について

ここでは本遺跡出土遺物の中で90%以上を占める第Ⅲ群土器について、若干述べてみたい。これまでの調査で知り得た第Ⅲ群土器の特徴を列挙すると、以下のとおりである。

①器種の点からみると、縄文中期以前の深鉢形のみ単一構成から壺、浅鉢、台付浅鉢など

多様化した器種構成に変化している。ただし、器種間の比率の上では、深鉢が主体であることに変わりはない。

- ②文様帯をもつものがほとんどであり、文様帯の下端を区画しないものは、ほんの一例にすぎない(31)。また、文様帯の幅については、深鉢でみる限りでは胴部下半までのものと胴部中ごろまでのものがあり、前者の比率が高いようである。
- ③施文手法としては、沈線文、磨滑縄文、櫛目状文、粘土紐貼り付けによる隆線文が認められる。沈線文は、2ないし3本が一組となり、文様が描かれるものが多い(12・13・14・24・26・30・39・45・47・56など)。
- ④横方向に文様が展開するものが多い。これは深鉢において顕著に認められるもので、横位に展開する波状文(25・30・59など)、入組状文(27・29・47など)、カギ状文(39・40)雷文(69)等がそれである。
- ⑤完形及び図上復元できた土器をみる限り、深鉢E類に波状口縁の土器が多いという傾向が認められる。
- ⑥北海道の大津式に類似の文様をもつものがある。その文様としては、「カニのハサミ」状文(41・57・58・155)、逆「く」の字状文(41・60)、雷文(69)、櫛目状文(102・169～172)などが認められる。
- ⑦底部外面に網代痕や木葉痕を残すものがほとんど認められない。底部に木葉痕が認められたものは、70の底部資料のみである。
- ⑧上げ底の底部を有するものが少数認められる(38・39)。

以上の①～⑧まで特徴を要約すると、

- a：①～④の特徴から、本群土器が縄文後期前葉に位置付けられるものと認められる。
- b：①⑤⑦及び⑧の特徴は、萱刈沢Ⅰ遺跡に固有のものである。
- c：⑥の特徴は、地域間の交流を示すものと理解される。

このように、3点にまとめることができる。それを個々にみていくと、

aの型式編年上の位置としては、十腰内Ⅰ式があてられる。本群土器の中でも第27図80・81は、やや古い要素を持つものと推測され、十腰内Ⅰ式よりも前に位置するものと思われる。

十腰内Ⅰ式については、本土器型式を設定した磯崎氏により、中期末葉の土器から十腰内Ⅰ式にいたる間に一、二型式の介在を必要とする²⁾としたことから、新型式の設定及び十腰内Ⅰ式の細分が試みられている。成田氏の編年によれば、前入江・十腰内様式と入江・十腰内様式に大きく二分し、さらに前者を三型式、後者を二型式(十腰内ⅠA式と十腰内ⅠB式)に分類している³⁾。この編年によれば、本群土器のほとんどは、後者のうちの十腰内ⅠB式に含まれるものと思われる。

bに要約された特徴について、県内の同じ時期の主な遺跡と比較すると、器形の種類では、大湯環状列石、高屋館跡には蓋形の土器がみえるが、本群土器中には認められない。

底部外面の網代痕又は木葉痕は、大湯環状列石でも痕跡を残しているものは少ないようであり、高屋館跡では粗製土器に多く認められる。

底部のつくりでは、上げ底は認められるが、38・39のような極端なものはみられないようである。

cについては、⑥に述べた文様が本遺跡のほか大湯環状列石や青森県にも認められるが、北海道南部にその出土頻度が高いようである⁴⁾。

註1) 秋田県教育委員会 『八木遺跡発掘調査報告書 一公害防除特別土地改良事業八木地区に係る埋蔵文化財発掘調査一』 秋田県文化財調査報告書第181集 1989(平成元年)

註2) 今井富士雄・磯崎正彦 『十隈内 青森県弘前市十隈内縄文式遺跡調査子報』 十隈内遺跡調査団 1969(昭和44年)

註3) 成田滋彦 「入江・十隈内式土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 縄文』小学館 1989(平成元年)

註4) 大津式の中には櫛目状の文様が認められるが、大沼氏はこれと同様の土器が礼文島の遺跡から出土していることに注目し、沿海州方面の櫛目文土器との関連を考えている。これに関連して、山田氏は縄文時代を日本だけの視点で考えるより、周辺の国々との関連でとらえる必要性を説いておられる。事実朝鮮半島或は北海道西浦項貝塚やロシア共和国アムール川流域等に縄文後期の土器に類似のものが認められるが、それらの編年が不十分であることが、日本の縄文土器と対比するうえで障害になっているようである。

財団法人 北海道埋蔵文化財センター 『木古内町 建川1・新道4遺跡 一津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書(3)一』 1986(昭和61年)

後藤 直 「櫛目文土器」『世界考古学事典 上』平凡社 1979(昭和54年)

佐藤達夫 「1 朝鮮有紋土器の変遷」『日本の先史文化—その系統と年代—』河出書房新社 1978(昭和53年)

山田昌久 「『縄文文化』の構図(下) 一東アジア始源文化の動向と“縄文文化”の位相—」『古代文化』第42巻第12号 財団法人 古代学協会 1990(平成2年)

(参考文献)

加藤邦雄 「5 縄文文化後期・晩期」『北海道考古学講座』みやま書房 1980(昭和55年)

登別市遺跡

財団法人 北海道埋蔵文化財センター 『木古内町 建川2・新道4遺跡 一津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書(4)一』 1987(昭和62年)

財団法人 北海道埋蔵文化財センター 『木古内町 新道4遺跡 一津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書(5)』 1988(昭和63年)

釧田町教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター 『入江遺跡 ～教職員住宅並びに汚水5号幹線新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～』 1990(平成2年)

成田滋彦 『3. 後期の土器 青森県の土器』 『縄文文化の研究4 縄文土器II』 雄山閣 1981(昭和56年)

青森県教育委員会 『沖付(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第101集 1986(昭和61年)

青森県八戸市教育委員会 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書II 一丹後谷地遺跡一』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集 1986(昭和61年)

青森県八戸市教育委員会 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書V 田面木平遺跡(1)』 八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集 1988(昭和63年)

秋田県鹿角市教育委員会 『大湯環状列石発掘調査報告書(8)』 鹿角市文化財調査資料43 1992(平成4年)

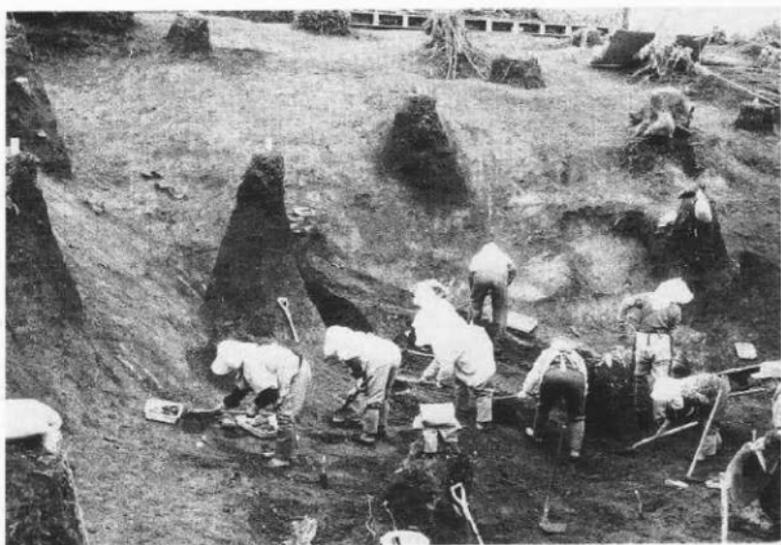
秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書I 一戸熊井遺跡・湯瀬館遺跡・大地平遺跡・上山田遺跡・堂の上遺跡・上葛岡田遺跡一』 秋田県文化財調査報告書第78集 1981(昭和56年)

秋田県教育委員会 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI 一高屋館跡一』 秋田県文化財調査報告書第198集 1990(平成2年)

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第201集 1990(平成2年)



1. 萱刈沢1遺跡調査前の状況(西から)



2. 萱刈沢1遺跡調査状況①(北東から)



1. 萱刈沢 I 遺跡調査状況② (北東から)



2. 萱刈沢 I 遺跡調査終了後の状況 (南から)

1. 遺物出土状況①
(LT53グリッド)



2. 遺物出土状況②
(LS52グリッド)



3. 遺物出土状況③
(LS51グリッド)





1. 遺物出土状況④
(MC51グリッド)



2. 遺物出土状況⑤
—土偶 (LS52グリッド)



3. 遺物出土状況⑥
—軽石製品 (LS52グリッド)



9



10



11



12



13



14



15



16

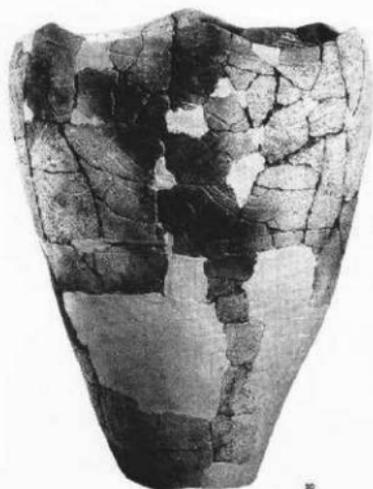


17



18

出土遺物 (1)



30



33



34



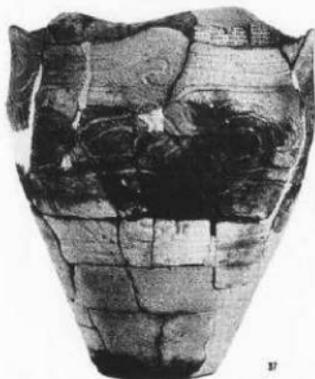
35



36



40



37



38

出土遺物 (2)



41



42



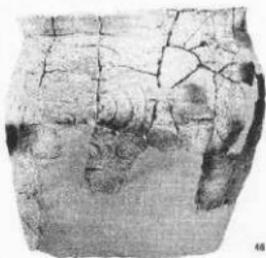
43



44



45



46



47

出土遺物 (3)



54



57



55



58



62



61



60



64



63

出土遺物(4)



出土遺物 (5)



11



14



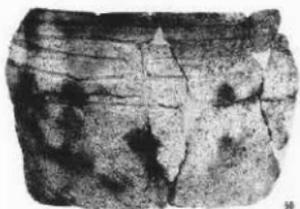
17



32



44



50



51



54



55



58



56



出土遺物 (7)



117



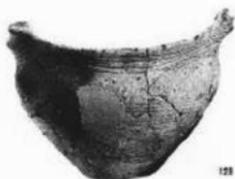
118



119



121



120



124



125



127



218



220



221



219



222



223



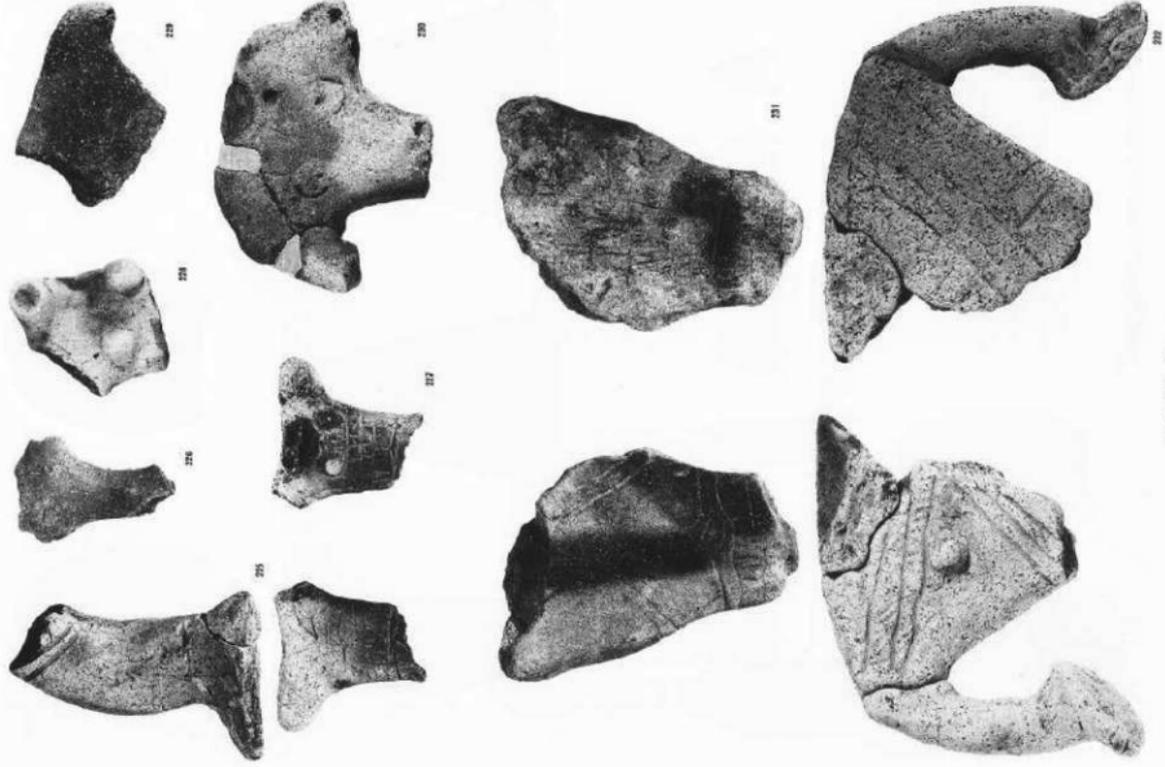
224



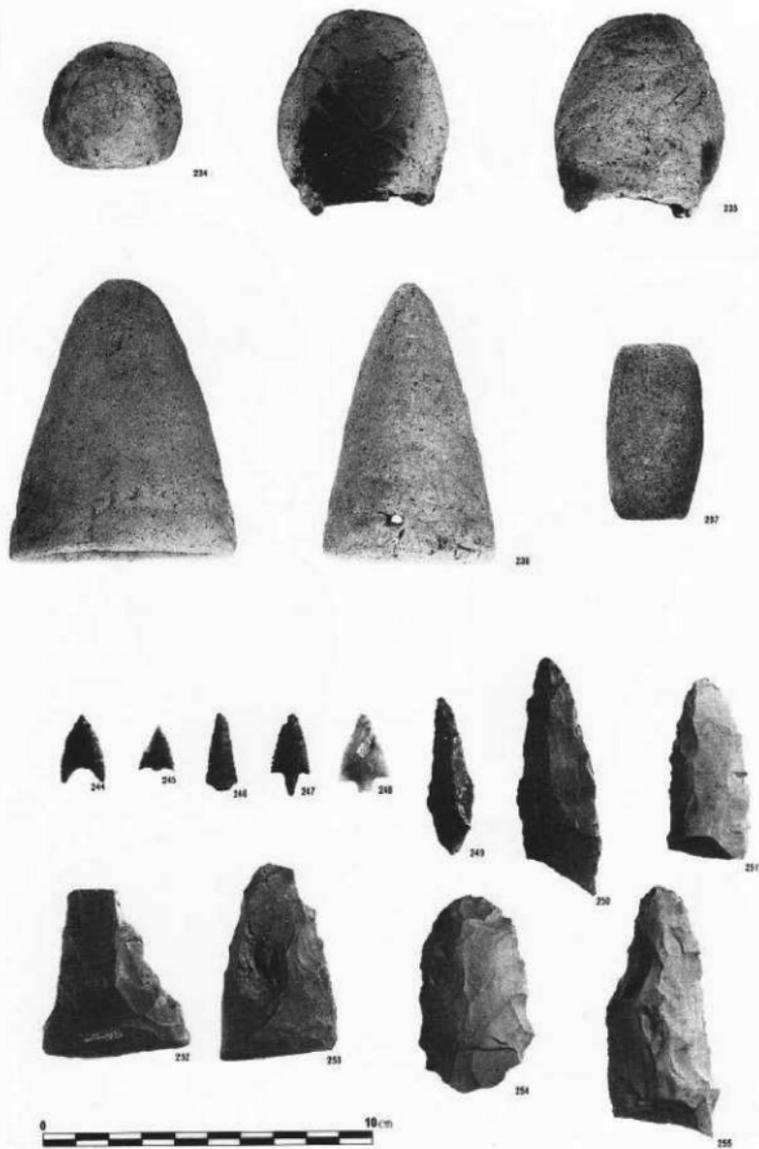
225



226



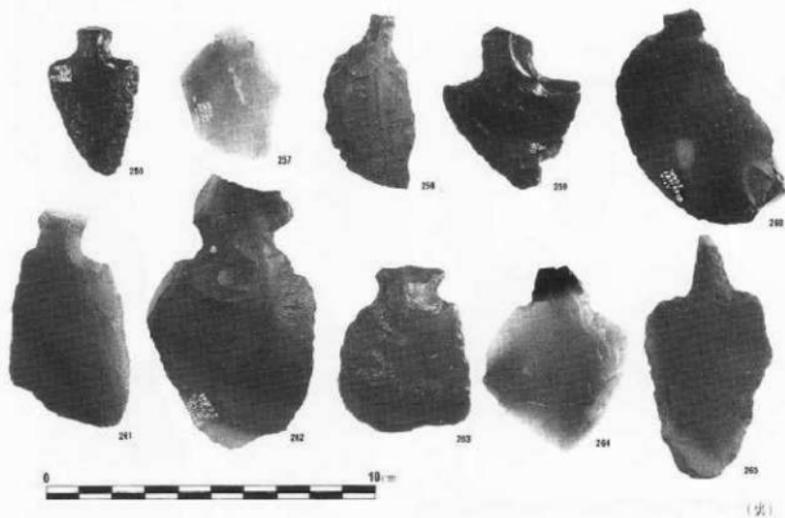
出土遺物 (9)



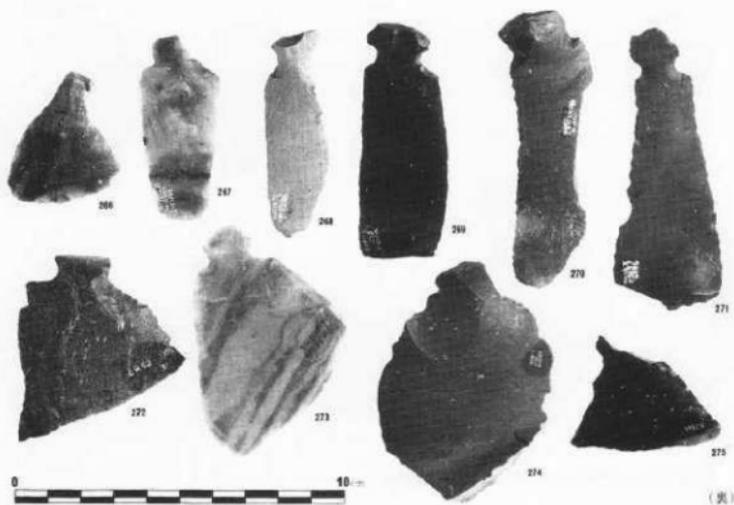
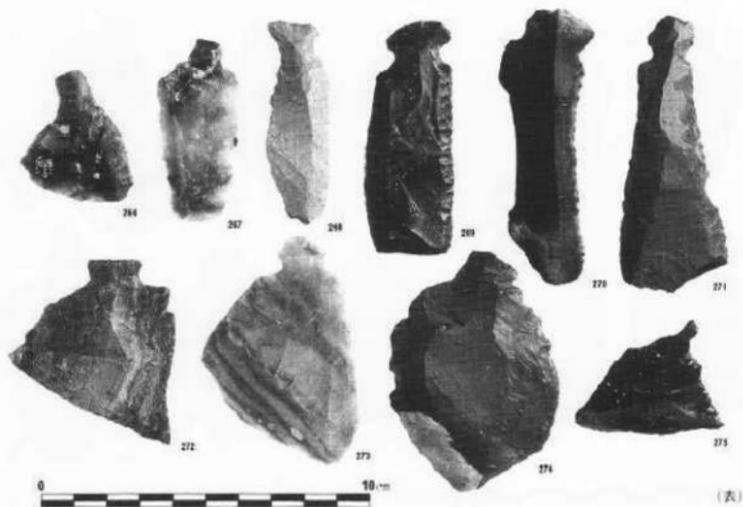
出土遺物 (10)



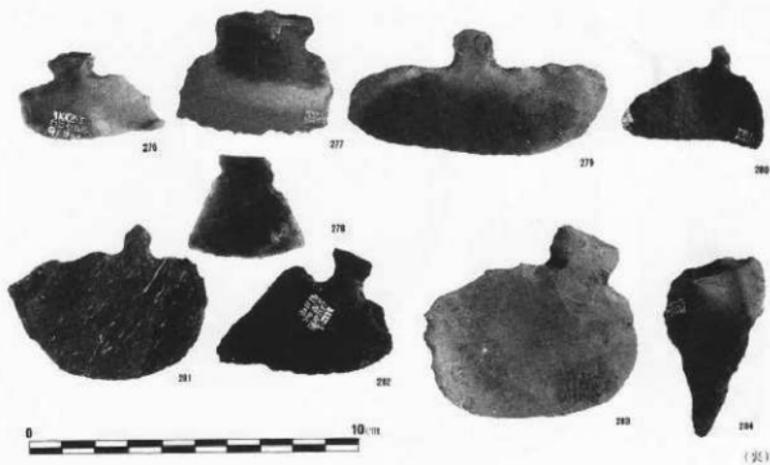
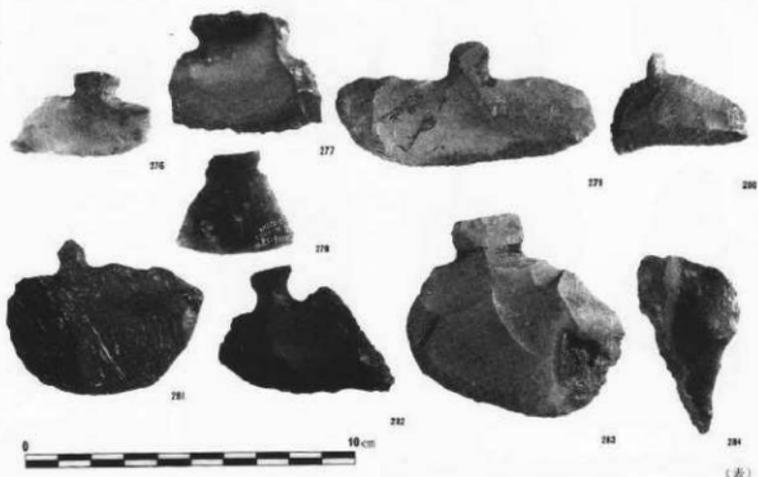
(表)



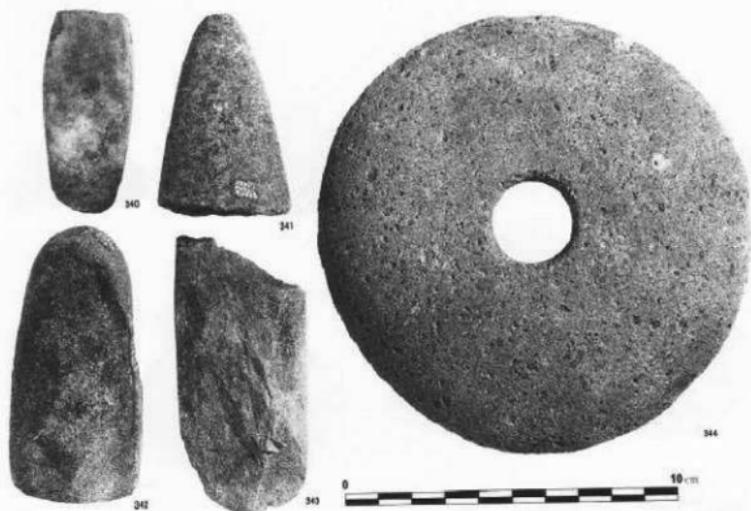
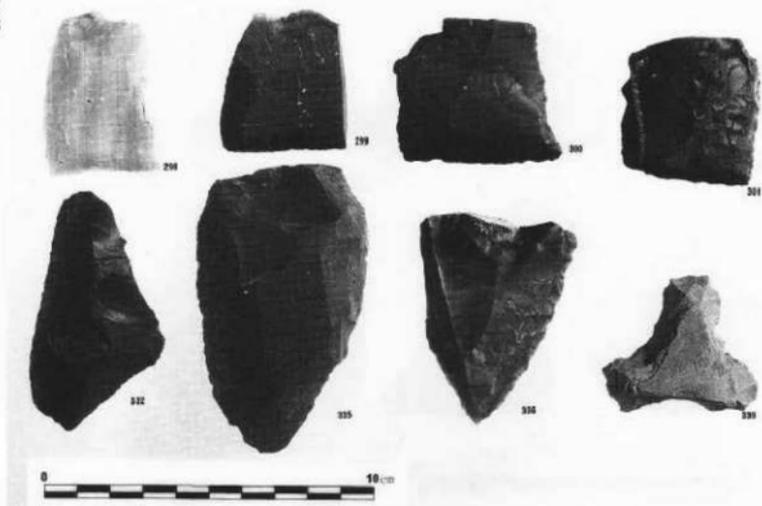
(裏)



出土遺物 (12)



出土遺物 (13)



出土遺物 (14)



出土遺物 (15)



345



344



出土遺物 (16)

萱刈沢Ⅱ遺跡
(3KKZ-Ⅱ)

第1章 調査の概要

第1節 遺跡の概観

萱刈沢Ⅱ遺跡は、北緯40° 6′ 41″、東経140° 0′ 48″ に位置する。能代市から国道7号線を秋田市方向に南下し、八竜町に入って間もなく萱刈沢の集落に至る。集落の北側にはやや大きな沢が形成されており、遺跡はその沢を東に500mほど逆上った左手の台地上に立地している。

台地は、標高28～31mとほぼ平坦であるが、台地南縁部は西から東へ切れ込む沢の浸食作用により一段低い平坦面が形成されている。したがって、台地南縁部は階段状の地形となっており、北から南に向かって標高26～30mの平坦面（上位面）、約8mの比高差をもって一段低い平坦面（下位面）、さらに3～4mの比高差をもって沢に達する。下位面の標高は、18～20mである。

沢の上流には寒堤と呼ばれる溜池が造られているが、その下流（西側）にも小規模な堤を設けて遊水池が造られている。計画道路は、この遊水池を跨いで南北に台地を貫くように通る。平成元年5月に実施された遺跡範囲確認調査では、縄文時代中期の堅穴住居跡、土坑、平安時代の堅穴住居跡等が確認されており、縄文時代と平安時代の集落跡と推測されていた。計画道路は、その集落跡のほぼ中央部にかかることになったのであるが、その後工事の工法変更により、沢を跨ぐ橋脚部分と工事用道路部分のみが調査対象となった。このため、調査は台地南縁部を部分的に行うこととなった。

なお、本遺跡と沢を挟んだ南側の台地には萱刈沢Ⅰ遺跡が立地している。

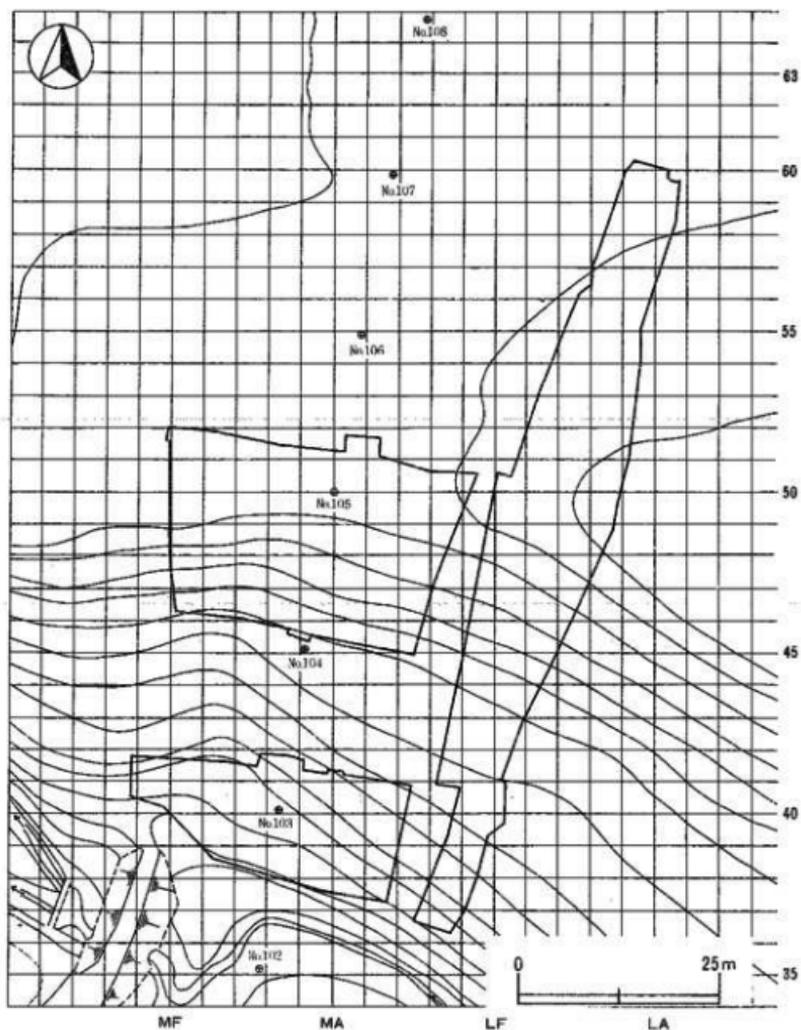
第2節 調査の方法

1. 調査区の設定

調査対象区に4m×4mのグリッド（方眼）を設定した。グリッドの設定にあたり、調査区内に所在する道路計画センター杭No.105を原点として国家座標第Ⅹ系座標北を求め、この座標北のラインを南北基線Y軸とし、これに直交するラインを東西基線X軸とした。基準交点No.105をMA50とし、Y軸に2桁の算用数字、X軸に2文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の杭で両者を組み合わせてグリッド名とした。

2. 発掘方法および記録の作成

調査区は、上位面、斜面、下位面と大きく3つに分けられるが、斜面と下位面の調査面積が



第69図 壺刈沢II遺跡グリッド配置図

大部分を占めていた。一方、沢は寒堤の用水流路を確保する必要上排土を置けないことから、排土場所の確保が問題となった。そこで、上位面に排土を置くこととし、このためベルトコンベアー40数台を導入した。また、斜面部には比較的大きな木根が残っていることから、バック

ホーにより抜根を行った。

遺構の検出は、地山漸移層または地山上面において行い、断面図、平面図、遺物出土状況図等を作成した。縮尺は、20分の1を原則とした。

遺物の取り上げは、出土位置と出土層位またはレベルを記録して行った。

写真による記録は、35mm判と6×4.5判のカメラを用いて行い、モノクローム、カラーリバーサル の2種類のフィルムを使用した。

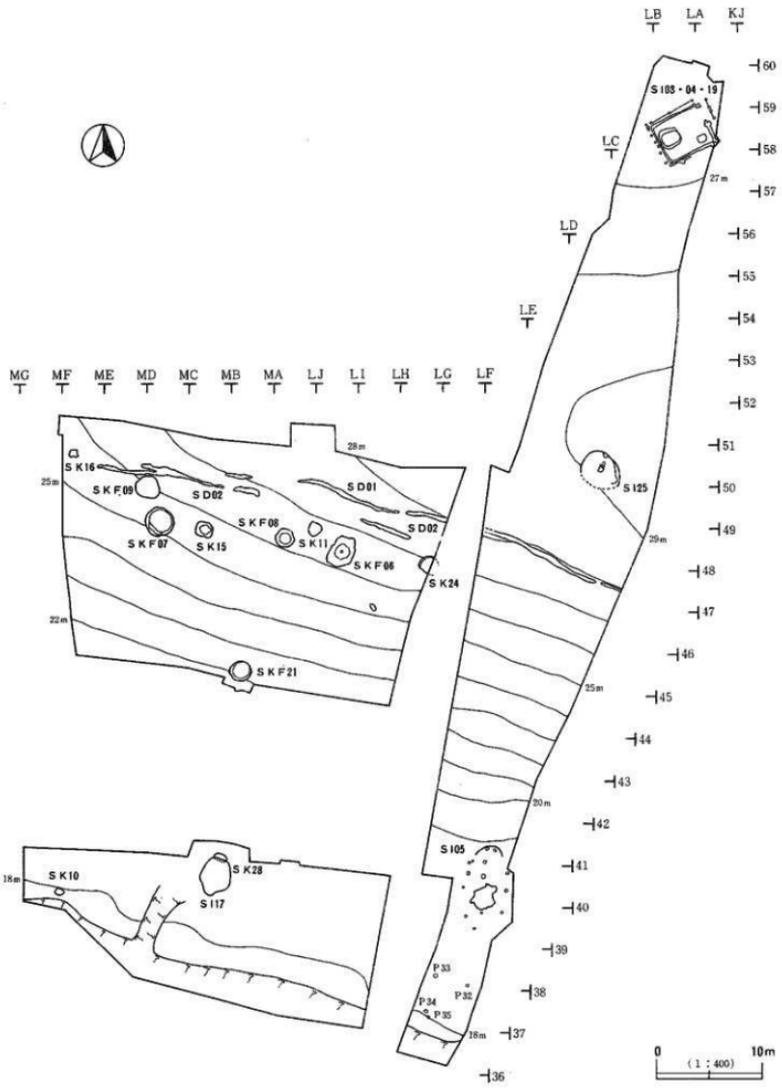
3. 遺物整理の方法

出土した遺物は、コンテナ14箱分である。これらの遺物を洗浄し、出土位置、出土年月日等を注記後接合を行った。実測図の作成は、縮尺1/1で行った。

第3節 調査の経過

- 10月2日 萱刈沢公民館において作業について説明を行った後、調査区、排土置場等の刈り払いを行う。
- 10月6日 調査区斜面上方の抜根作業をバックホーにより行った。
- 10月11日 斜面上方と上位面の粗掘りを開始する。下位面南端の沢に面した斜面部に土留樁を設置する。文化課熊谷学芸主事来跡。
- 10月12日 斜面上方で等高線に平行するように溝1条を検出した。
- 10月16日 MC39、MB39グリッド第II層中で土器片、石器剥片が出土している。
- 10月17日 雨または霧が降る天気の中で粗掘りを行ったが、斜面部は滑りやすいため、斜面下方に地点を移して行った。
- 10月24日 斜面部の遺構ブランチ検出作業を行った。その結果、溝2条、土坑5～6基、柱穴様ビット5基を検出した。また、溝2条を中心とする検出状況を撮影した。
LF40グリッドで焼土と炭化物を検出した。竪穴住居跡の地床炉の可能性がある(SI05)。
KJ58、LA57・58グリッドで平安期の竪穴住居跡を検出した(SI03・04・19)。
- 10月25日 斜面で検出した土坑の調査に着手。SK06・07・08・09・11・12は、等高線に沿って並んでいる。
SI03・04・19の調査に着手。壁は残っておらず、壁溝と貯蔵穴と思われる落ち込みを検出した。
- 10月26日 MB40グリッドで遺物がまとまって出土しており、遺構の可能性あり(SI17)。
- 10月27日 溝状遺構の平面図を作成した。

- 10月30日 S I 17の遺物出土状況を撮影。S K08埋土中から復元可能な土器が出土した。建設省能代工事事務所 茹崎氏、伊藤氏、今野氏来跡。
- 10月31日 MA45、MB45グリッドで土坑と思われるプランを検出した。かなりの急斜面に立地している。S I05の精査を行い、柱穴と思われるビットを検出した。S K08の掘り込みは、下方に広がる様子がみられ、フラスコ状土坑となるものと推測される。
- 11月2日 雨のため遺構の精査が進まず、作業を中止する。
- 11月6日 雨のため図面と遺物の整理を行った。
- 11月8日 LC50グリッドで長軸4m、短軸3mの炭化物を含む落ち込みを検出し(S I25)調査に着手した。S K08については、脂肪酸分析用の土壌採取を行った。また、S K06・07・08・09・21はいずれもフラスコ状土坑であり、深さは2mをこえるようである。遺物は、埋土上位に縄文土器が含まれるが、中位以下には含まれない。
- 11月14日 S I17土層観察用のベルトを除去し、遺物の取り上げを行った。
- 11月15日 浜口小学校児童(4～6年生)遺跡見学。
- 11月16日 S I17とS K28の平面図作成。
- 11月17日 LE42グリッドで条痕文土器を検出した。
- 11月20日 S K06の平面図を作成。斜面部の全景写真を撮影した。
- 11月21日 S K08の調査を終了した。下位面東端の柱穴様ビット調査終了。上位面および下位面の全景を撮影した。
- 11月22日 地形測量に着手する。湖北小学校児童遺跡見学。
- 11月27日 撤収に向けての作業を行った。基本土層実測も行う。
- 11月30日 すべての作業を終了し、撤収する。

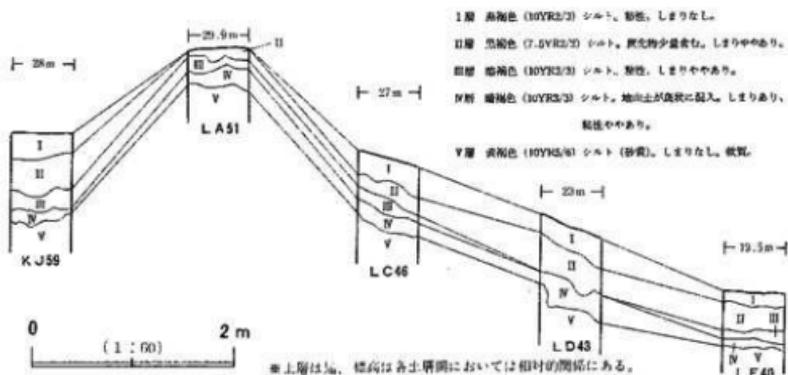


第70圖 董洲河II遺跡遺構配置圖

第2章 調査の記録

第1節 遺跡の基本土層

第71図に示した基本土層は、調査区東端において北(左)から南(右)にかけて観察・記録したものである。地形の上で斜面部を含むことから、それぞれの土層は地点によって微妙に異なるが、ほぼⅠ～Ⅴ層に大別された。Ⅰ～Ⅲ層は遺物包含層、Ⅳ層が地山漸移層、Ⅴ層が地山である。遺構検出面は、ⅣないしⅤ層である。



第71図 葦刈沢Ⅱ遺跡基本土層図

第2節 検出遺構と出土遺物

遺跡の地形は、第1章第1節で述べたように大きく3つに分けられる。すなわち、標高26～30mの上位面、標高18～20mの下位面、上位面から下位面に至る斜面の3つである。本節においては、この地形ごとに検出された遺構と遺物をみていきたい。

1. 上位面の遺構と遺物

上位面は、斜面に近い南東側の標高が高く、台地の奥に行くにしたがって低くなっている。検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1軒、平安時代の竪穴住居跡3軒である。

(1) 縄文時代

S | 25竪穴住居跡 (第72・73図、図版23・24)

[位置・確認状況] LB49・50、LC49・50グリッド地山面に不整円形のプランを検出し

た。本遺構は、上位面南東寄りに位置し、調査区の中で最も標高の高い場所にある。また、南隣に倒木痕がみられる。

〔形態・規模〕 南側半分について壁が不明確なこともあり、北西南東方向にやや長い楕円形と推測される。その規模は、長軸方向が396cm、短軸方向が推定で360cm、確認面から床面までの深さ9～16cmである。

〔床面・柱穴〕 床面は小さい凹凸はみられるが、全体としてはほぼ平坦である。東側の壁に近い床面はゆるい段を有する。北東壁寄りに暗褐色の落ち込みが検出された。それは北東南西方向に細長く約106cmあり、これと直交する方向の幅は最大で43cm、床面からの深さは3～8cmである。この埋土中には焼土粒と炭化物が混入していたことから、炉跡の可能性もあるが、熱を受けて硬化した面が認められないこともあり明らかでない。

柱穴と思われる落ち込みは、合計15基検出されたが、P₁、P₆、P₈、P₁₁については、土層断面から本住居跡より新しいことが判明している。P₁₁については、本住居跡に伴う可能性が高いと思われる。これ以外の柱穴の帰属については不明である。

〔埋土の状態〕 第72図中では8層に分けられたが、本住居跡の埋土のみをみると、1・2・2'・5の4層のみであり、床面に褐色土が部分的に堆積し、その上を大量の暗褐色土が覆っている。

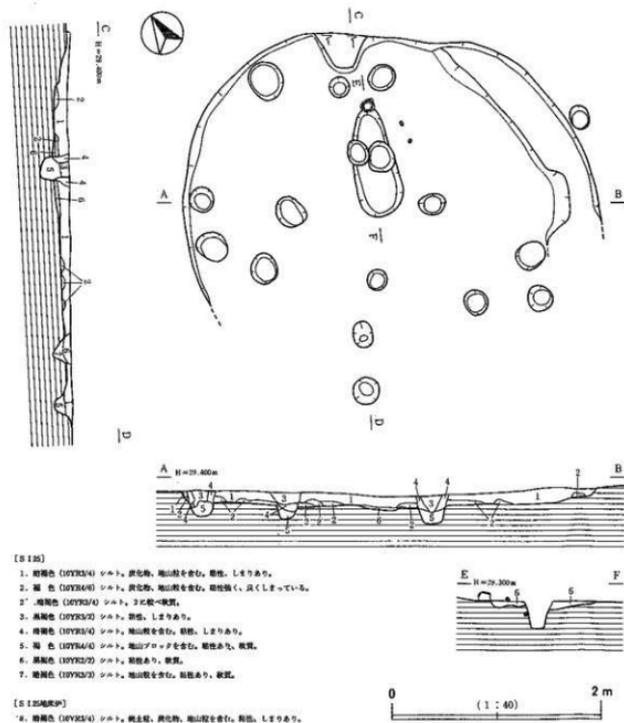
〔出土遺物〕 前述の炉の可能性が指摘される落ち込み（P₂と略。以下同じ。）の近くから土器片が出土している。1は、P₂の長軸の北東側に伏せられた状態で見つかった。深鉢形土器の底部から体部にかけての資料であり、器形は底部の張り出しが強く、一旦内側に屈曲したのち体部に移行する。LR縄文が横位又は縦位に施されている。内面には煤状炭化物が付着している。胎土は砂粒が少なく、繊維の混入は認められない。底径は8.6cmである。1のほかP₂の東側から土器片2点が出土しているが、1点は1と接合し、もう1点は無文の小破片であり1とは別個体であった。

〔時期〕 出土遺物の中に、施文されている文様等から時期を決定できるものはない。あえて時期を求めようとすれば、1の器形からある程度導くことが可能かもしれない。1の器形で注意されるのは、底部の張り出しである。これに類似するのは、SKF08出土の15の土器底部と思われ、遺構外出土の前期のものとは異なる。この点に注目すれば、本住居跡の時期を中期中葉と推測することができる。

(2)平安時代

S103・04・19竪穴住居跡（第73・74図、図版24・25・26）

〔位置・確認状況〕 上位面のやや奥に位置し、若干標高の低い場所にある。調査区の中では最も北に位置する。KJ57～59、LA57～59、LB58グリッドで長方形を描く壁溝のみを検



第72図 S125竪穴住居跡実測図

出した。これは竪穴住居跡の掘り込みが地山まで及んでおらず、地山漸移層を床面としていたところ、表土除去の段階で壁を取り去ってしまったことによる。

〔形態・規模〕 数箇所土層観察用のベルトを残して掘り進めたところ、1軒単独ではなく数軒が重複していることが明らかになった。壁溝の切り合いから2軒、柱穴の配置から1軒の合計3軒の存在が推測される。

SI03としたものは、 $P_1 \sim P_3$ とそれらと重複する壁溝の範囲で、長辺490～510cm、短辺400～405cmの長方形と推測される。壁溝は、幅13～23cm、深さ5～15cmである。

SI04としたものは、柱穴配置から推測したもので、 $P_{11} \sim P_{13}$ により囲まれた範囲であり、長辺480～510cm、短辺455～490cmのややいびつな長方形を呈する。

SI19としたものは、壁溝および柱穴の切り合いから、SI03よりも古い時期のものと推測され、 $P_{20} \sim P_{23}$ とそれらと重複する壁溝で、その規模は約390cmである。他の3辺は不明であるが、SI03の壁溝を共有していた可能性がある。

〔床面・付属施設〕 床面はほぼ平坦であるが、硬くしまっている面は認められなかった。

北東辺内側の中央やや北寄りに焼土の付着がみられ、その範囲は25×25cmの隅丸方形である。カマド構築材とされる粘土等が検出されていないが、その位置からカマド火床と考えられる。

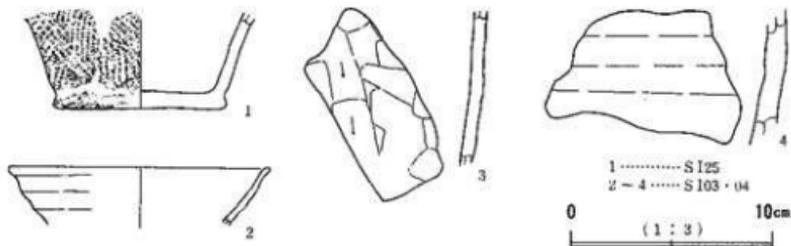
東隅と西隅近くに方形の落ち込みがそれぞれ1基検出された。竪穴住居跡と方向性が同じであることから、3軒のうちのいずれかに伴うものとして調査を行った。東隅の落ち込み(A)は、長辺85cm、短辺72cm、深さ33～42cmの規模である。壁の中部から上部にかけて焼けており、それに伴うものと思われる焼土を含む土が埋土上位に堆積している。西隅近くにある方形の落ち込み(B)は、長辺195cm、短辺185cm、深さ13～18cmの規模である。底面は、平坦で硬くしまっている。ところで、(B)の土層断面をみると、竪穴住居跡の埋土を切っていることがわかる。したがって、(B)は竪穴住居より新しい時期のものということになる。

〔埋土の状況〕 前述のように、プラン確認前に埋土の大部分を掘り出してしまっているものでその詳細は不明である。ただ、竪穴住居跡北側コーナー一部分が調査境界にかかっており、その部分の断面でみる限りでは黒褐色土一層の堆積である。

〔出土遺物〕 2は、方形の落ち込み(B)の埋土下位から出土した土師器杯である。ロクロにより成形されており、内湾ぎみに立ち上がったのちややひらいて口縁に至る。色調は浅黄褐色10YR8/3で、胎土は緻密である。推定の口径は13cmである。3は、落ち込み(A)の埋土中位から出土した土師器甕の胴部破片である。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整が施されている。また、内外面に媒炭炭化物が付着している。胎土は、砂粒を多く含む。4も土師器甕の胴部破片であるが、ロクロ成形されている。胎土には小砂利が多く含まれている。色調は、

浅黄褐色10YR8/3である。

〔時期〕 平安時代後半と推定される。



第73図 上位面遺構内出土遺物

2. 斜面の遺構と遺物

斜面部の遺構の配置状況は、上位面から斜面に移る肩口のところに溝状遺構が東西方向に伸びている。その直下の標高25～27mに土坑が集中している。

(1) 縄文時代

① フラスコ状土坑

S K F 06 フラスコ状土坑 (S K 06) (第75図、図版27・28)

〔位置・確認状況〕 LI 48グリッド地山面において、当初は2ないし3基の土坑が重複したものとして確認された。調査を進めたところ、堆積した埋土の違いであることがわかった。

〔形態・規模〕 開口部は斜面に沿ってやや長い不整円形であり、長径333cm、短径237cmである。頸部も不整円形であり、径132～140cmの大きさがある。底部は径約200cmのはぼ円形である。底面はほぼ平坦であり、中央部に径24×26cm、深さ5cmのビットを有する。確認面から底面までの深さは、200～220cmである。

〔埋土の状況〕 最下層には自然堆積と思われる黒褐色土があり、その上から埋土上位にかけて壁の崩落土と思われる褐色土がやや多くみられる。

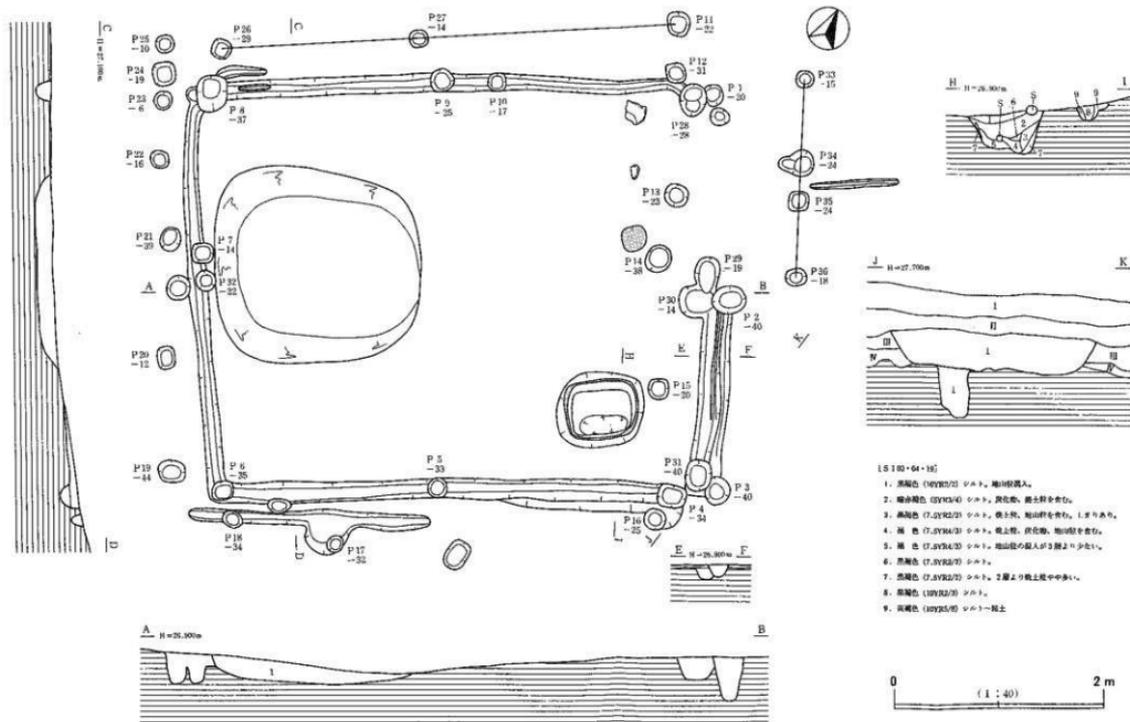
〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

S K F 07 フラスコ状土坑 (S K 07) (第76・82・90図、図版28・29)

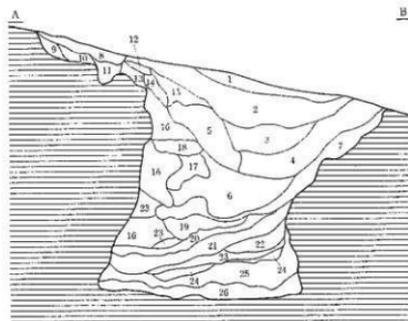
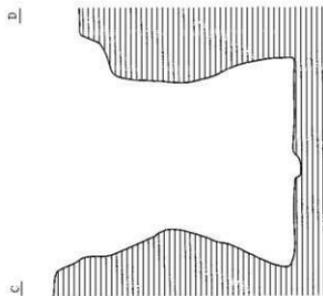
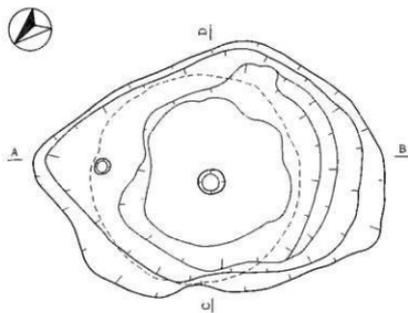
〔位置・確認状況〕 MC 49グリッドの南西側、地山漸移層中で砂を含む黒褐色プランを検出した。

〔形態・規模〕 平面形は円形、断面形は鍋状を呈するが、中間に緩いくびれがみられる。開口部径は263～285cm、底部径は202～225cm、深さは斜面上方の北側で203cm、斜面下方の南側は150cmである。

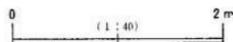
〔埋土の状況〕 最下層に暗褐色土、上位に暗褐色または黒褐色土がレンズ状に堆積してい



第74図 S | 03・04・19 壁穴住居跡・S K18 土坑実測図



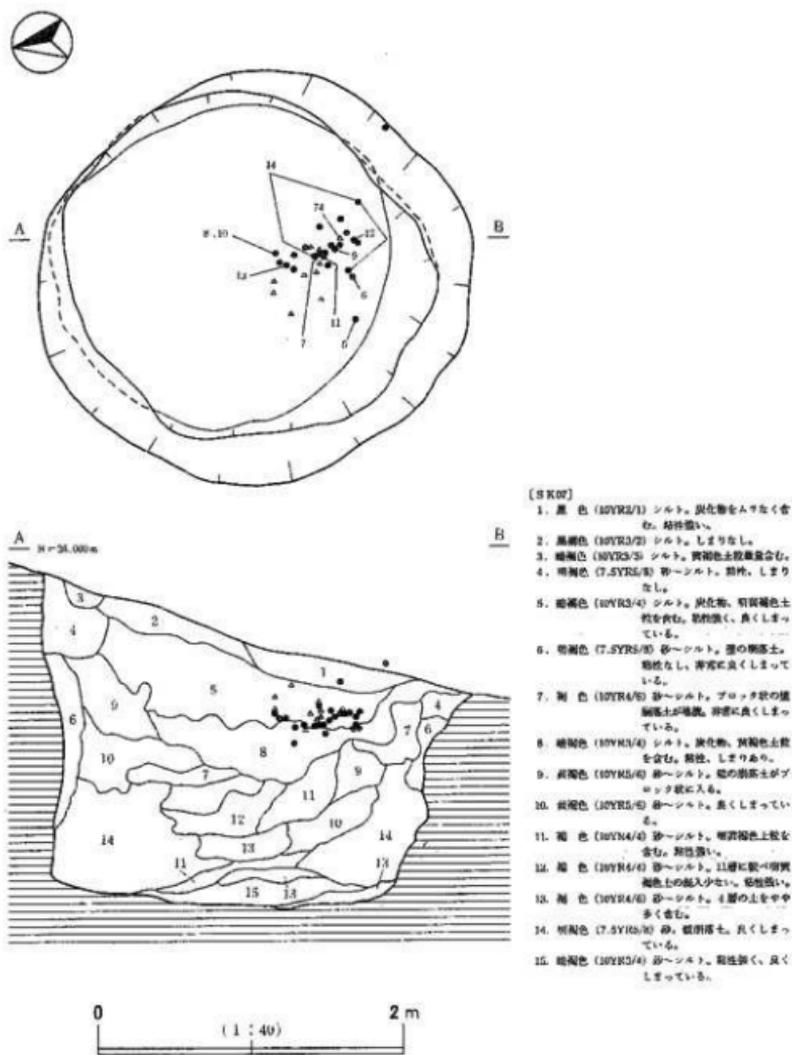
表示スケール 27.00m



〔9 K 附〕

1. 埋藏色 (H9Y22) シルト。縦型でしきりに交錯する。
2. 埋藏色 (H9Y23) シルト。砂、炭化物を含有し、しまっている。
3. 埋藏色 (H9Y24) シルト。砂を含有し、しまっている。
4. 埋藏色 (H9Y25) シルト。砂、炭化物を含有し、しまっている。
5. 埋藏色 (H9Y26) シルト。粘土層構造がブロック状に入る。しまっている。
6. 埋藏色 (H9Y27) シルト。粘土層構造を含有し、しまっている。
7. 埋藏色 (H9Y28) シルト。砂。炭化物を含有し、しまっている。
8. 埋藏色 (H9Y29) 粘土。炭化物、粘土ブロックを含有し、縦型があり、ましくしまっている。
9. 埋藏色 (H9Y30) シルト。炭化物がなく、しまりが少ない。
10. 埋藏色 (H9Y31) シルト。粘土ブロックを含有し、縦型がない。
11. 埋藏色 (H9Y32) シルト。粘土ブロックを含有し、しまり、縦型とまがない。
12. 埋藏色 (H9Y33) シルト。粘土層を多く含む。しまりが少ない。
13. 埋藏色 (H9Y34) シルト。埋藏色上のブロック状に見られる。
14. 埋藏色 (H9Y35) シルト。粘土層を含有し、ましくしまっている。
15. 埋藏色 (H9Y36) シルト。粘土層を多く含む。
16. 埋藏色 (H9Y37) シルト。粘土層構造がブロック状に入る。しまり中であり。
17. 埋藏色 (H9Y38) シルト。1層より粘土層構造の侵入が少ない。
18. 埋藏色 (H9Y39) シルト。粘土層を多く含む。縦型はない。
19. 埋藏色 (H9Y40) シルト。粘土層を含有し、ましくしまっているが、縦型はない。
20. 埋藏色 (H9Y41) シルト。粘土層、粘土ブロックを含有し、ましくしまっている。
21. 埋藏色 (H9Y42) シルト。粘土層を多く含む。ましくしまっている。
22. 埋藏色 (H9Y43) 粘土層を多く含む。ましくしまっている。
23. 埋藏色 (H9Y44) 砂。粘土層構造。ましくしまっている。
24. 埋藏色 (H9Y45) シルト。粘土層を多く含む。ましくしまっている。
25. 埋藏色 (H9Y46) シルト。粘土層を含有し、ましくしまっている。
26. 埋藏色 (H9Y47) シルト。粘土層を含有し、縦型とましくしまっている。

第75図 S K F 06 プラスコ状土坑実測図



第76図 SKF07フラスコ状土坑実測図

るほかは、壁の崩落土と思われる褐色土が中位から下位にかけて堆積している。

〔出土遺物〕 遺物は、埋土上位の暗褐色土または黒褐色土中からすべて出土している。これらの土は、本遺構が壁の崩落を繰り返して半分以上埋まった後に斜面上方から流入した土と推

定される。5は、小型の鉢形土器の口縁部と思われ、燃糸文が施文されている。胎土には、細かい砂粒がみられる。6は、深鉢形土器の口縁部で、小波状を呈する。単節斜縄文LRの下端を横位の沈線で画し、その沈線に沿って刺突が施されている。胎土に細かい砂粒を含み、焼成は良好である。7は、縦位の条線が施され、煤状炭化物が付着している。8は、木目状燃糸文が施され、胎土に繊維を混入している。9・10は同一個体であり、隆帯間に複節斜縄文R(L)を施文した後隆帯に沿って沈線を施している。内面は、丁寧なナデ調整がなされている。11は、単節斜縄文RLを施文し、その下に2条の横位沈線を引きその沈線間を無文としている。外面に煤状炭化物が付着し、胎土に繊維を含む。12は、単節斜縄文LRの地文の上に沈線が施されている。胎土に少量の砂粒を含む。13・14は、単節斜縄文RLが施されている。75は、横長割片に調整を加えた石筥である。主要剥離面の中央部に第1次剥離面を残し、縁辺部に剥離を行っている。

SKF08フラスコ状土坑 (SK08) (第77・82図、図版29・30)

〔位置・確認状況〕 LJ48グリッドの北西隅寄りの地山漸移層中で円形のプランを検出した。

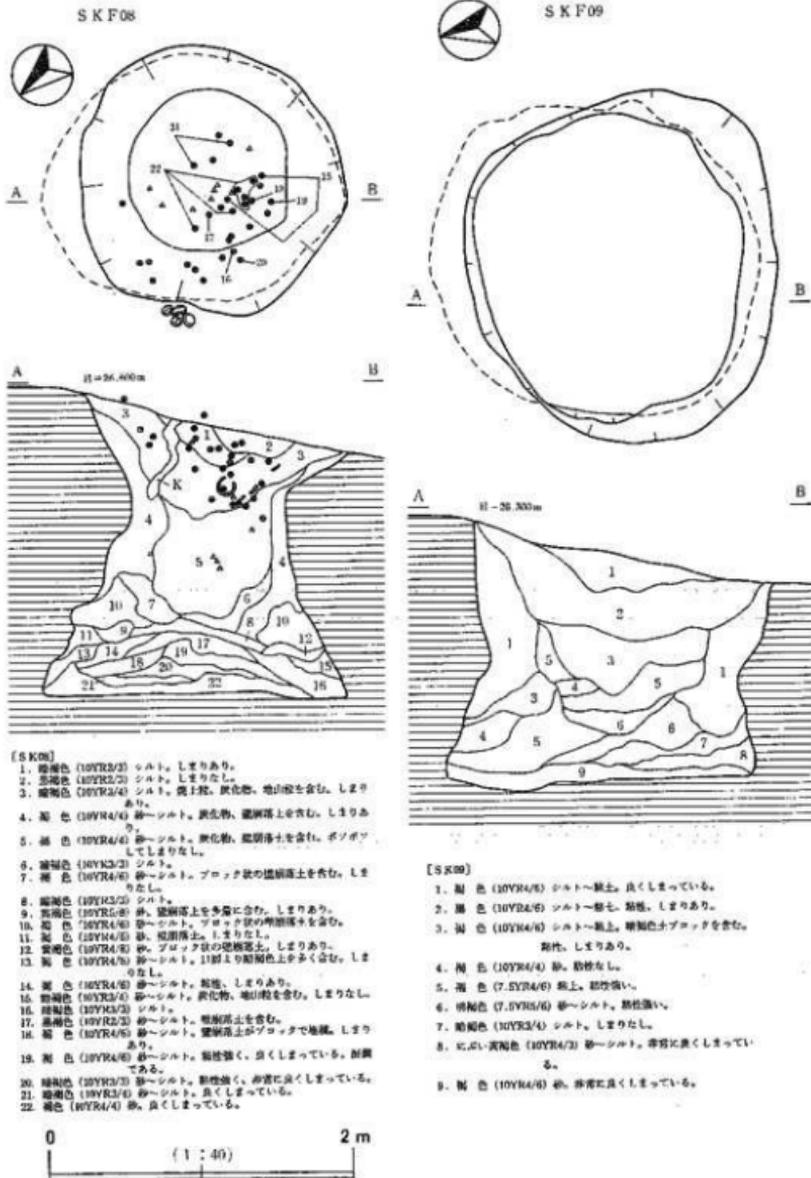
〔形態・規模〕 平面形は円形、断面形はフラスコ状を呈する。開口部径は173～183cm、頸部径103～110cm、底部は北東南西方向にやや長い円形で長径200cm、短径161cmである。確認面からの深さは、170～193cmである。

〔埋土の状況〕 褐色土または明らかに壁の崩落土と思われるブロックが、下位と中位に堆積しており、上から黒褐色土が流入堆積していく途中で壁の崩落が起きていることが推測される。

〔出土遺物〕 遺物は、埋土の上位の黒褐色土または暗褐色土から出土しており、斜面上方からの流入が推測される。15は、LRの原体による地文に沈線で懸垂文を施した深鉢形土器である。内外面に煤状炭化物が付着している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。底部径6.6cm、現存高15.7cmである。16は、深鉢形土器の口縁部から体部に移行する部分の破片である。口縁部と体部を区画する刺突文を施し、体部に燃糸文を施文した後沈線文を矩形に巡らせている。煤状炭化物が内外面に付着し、胎土に砂粒を少量含む。17は、燃糸文の地文に沈線により円形文を施文している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。18も燃糸文の地文に沈線が施されている。19は、円文または弧状の沈線、指頭によるつまみ上げ等により器表面に凹凸をつけ、円文内に単節斜縄文を充填している。凸部は平滑にナデ調整がなされている。20～22は、地文のみの土器で、20は縦位の条線、21はRL縄文、22は付加条が施文されている。

SKF09フラスコ状土坑 (SK09) (第77図、図版28・29)

〔位置・確認状況〕 MD50グリッド杭を中心とする地山漸移層中で円形のプランを検出し



第77図 S K F 08・09フラスコ状土坑実測図

た。

〔形態・規模〕 断面形は、中位に若干のくびれがみられる袋状を呈する。規模は、開口部径203×227cm、頸部径175×197cm、底部径204×217cm、確認面からの深さ130～170cmである。

〔埋土の状況〕 9層に分けられた埋土のほとんどが暗褐色から褐色を呈し、壁の崩落が終始起こっていたものと推測される。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

S K F 21 フラスコ状土坑 (S K 21) (第78・82図、図版30)

〔位置・確認状況〕 MA45グリッドの北西隅寄りの地山面で円形のプランを検出した。斜面で検出した遺構のほとんどが斜面上方に位置するのに対し、本遺構は下方に位置するもののひとつである。

〔形態・規模〕 断面形は、中位がやや袋状を呈する。規模は、開口部径183～185cm、頸部径149～152cm、底部径175×193cm、確認面からの深さは160～208cmである。

〔埋土の状況〕 下位に黒褐色土、中位に壁の崩落土である褐色土、上位に暗褐色土という堆積がみられる。

〔出土遺物〕 土器片2点が出土したが、出土状況は不明である。23は、羽状縄文が施文された深鉢形土器の体部破片と思われる。内面に煤状炭化物が付着していたと思われる痕跡が認められる。煤状炭化物は割れ口部分にも付着している。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。24は、底部の破片であるが、煮炊きで使用されかなり脆くなっている。内面に煤状炭化物が付着している。胎土に砂粒を多く含む。

②土 坑

S K 11土坑 (第79図、図版31)

〔位置・確認状況〕 L J 49グリッド杭を中心とする地山漸移層中で不整円形のプランを検出した。

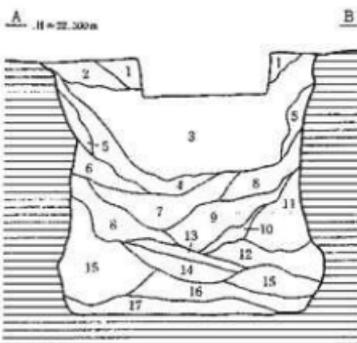
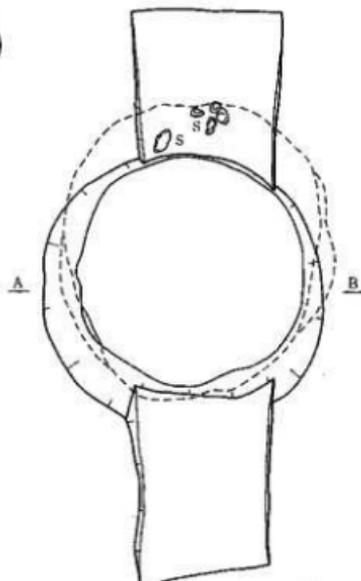
〔形態・規模〕 断面形は皿状に近い形態であり、規模は南北方向が135cm、東西方向が133cm、確認面からの深さは22～28cmである。底面中央から東寄りにもう一段の掘り込みが認められる。その規模は、南北方向45cm、東西方向55cm、底面からの深さ約16cmである。

〔埋土の状況〕 砂がちの地山土の混入割合が多く、斜面上方からの流入量が多いことが推測される。

〔出土遺物〕 縄文土器底部破片が1点出土した。

S K 13土坑 (第80図、図版31)

〔位置・確認状況〕 L H 47グリッド南西寄りの地山漸移層中でプランを検出した。



第78図 SKF21フラスコ状土坑実測図

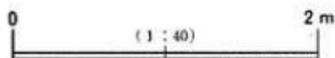
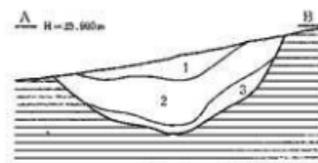
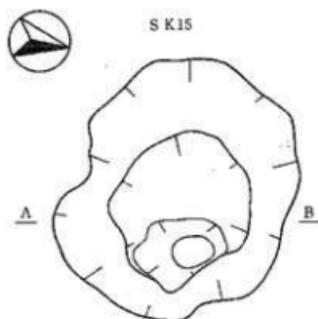
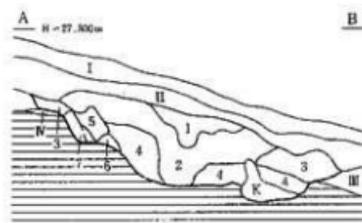
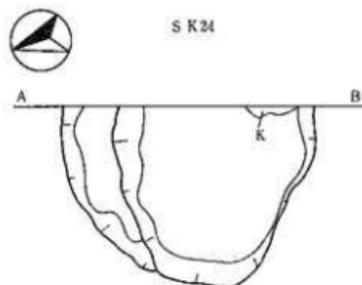
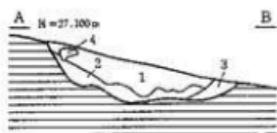
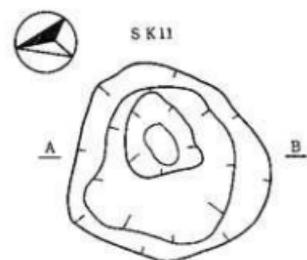
〔形態・規模〕 平面形は楕円形、断面形が鍋底状である。規模は、長軸方向71cm、短軸方向42cm、確認面からの深さ約20cmである。

〔埋土の状況〕 粘性のない黒褐色土1層の堆積である。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔SK21〕

1. 黒色 (10YR2/1) シルト。炭化物を含む。粘性あり、良くしまっている。
2. 黒褐色 (10YR2/3) シルト。炭化物を含む。粘性あり、良くしまっている。
3. 黒褐色 (10YR2/2) 砂〜シルト。炭化物を含む。粘性あり、良くしまっている。
4. 黒褐色 (10YR2/1) 砂〜シルト。炭化物を含む。粘性、しまりあり。
5. 黒褐色 (10YR2/2) 砂〜シルト。粘性、しまりあり。
6. 黒褐色 (10YR2/4) 砂〜シルト。しまりなし。
7. 黒褐色 (10YR2/3) 砂〜シルト。粘性あり、良くしまっている。
8. 黒色 (10YR4/4) 砂。良くしまっている。
9. 黒褐色 (10YR2/3) 砂〜シルト。炭化物を含む。粘性強く、良くしまっている。
10. 黒褐色 (10YR2/2) 砂〜シルト。粘性強く、しまりなし。
11. 黒褐色 (10YR2/4) 砂。良くしまっている。
12. 黒褐色 (10YR2/4) 砂。粘性あり、良くしまっている。
13. 黒褐色 (10YR2/6) 砂。非常に良くしまっている。
14. 黒褐色 (10YR2/3) 砂〜シルト。粘性、しまりあり。
15. 黒褐色 (10YR2/6) シルト。しまりなし。
16. 黒褐色 (10YR2/4) 砂〜シルト。粘性強い。
17. 黒褐色 (10YR2/4) シルト。粘性強く、良くしまっている。



〔SK11〕

1. 黒褐色 (10YR2/2) 砂-シルト。粘性あり、良くしまっている。
2. 黒褐色 (10YR2/3) 砂-シルト。粘性なく、良くしまっている。
3. 灰黄褐色 (10YR3/2) 砂-シルト。粘性あり、良くしまっている。
4. 黄褐色 (10YR5/0) 砂。粘性なく、良くしまっている。

〔SK15〕

1. 黒褐色 (10YR2/3) 砂-シルト。炭化物を含む。粘性あり、良くしまっている。
2. 黒褐色 (10YR3/3) 砂-シルト。炭化物を少量含む。粘性あり、良くしまっている。
3. 灰色 (10YR4/0) 砂-シルト。粘性、しまりあり。

〔SK24〕

1. 灰色 (10YR2/1) シルト。地山ブロックを含む。粘性強く、しまりあり。
2. 黒褐色 (10YR2/2) シルト。地山粒を含む。良くしまっている。
3. 黒褐色 (10YR2/2) シルト。地山粒を含む。粘性強く、しまりあり。
4. 黒褐色 (10YR3/2) シルト。地山粒、地山ブロックを含む。粘性強く、しまりなし。
5. 黒褐色 (10YR3/2) シルト。地山粒、地山ブロックを含む。良くしまっている。
6. 暗褐色 (10YR3/4) シルト。地山ブロックを多く含む。粘性あり、良くしまっている。
7. 暗褐色 (10YR3/5) シルト。地山粒を含む。しまりなし。

第79図 SK11・15・24土坑実測図

S K 15土坑 (第79図、図版31)

〔位置・確認状況〕 MB 48・49グリッド地山漸移層中で不整円形のプランを検出した。

〔形態・規模〕 断面形は鍋底状を呈し、東寄りの底面部にもう一段の掘り込みが認められる。規模は、南北方向135~150cm、東西方向175cm、確認面からの深さ31~47cmである。底面のもう一段の掘り込みは、62×48cmの不整形であり、底面からの深さは約18cmである。

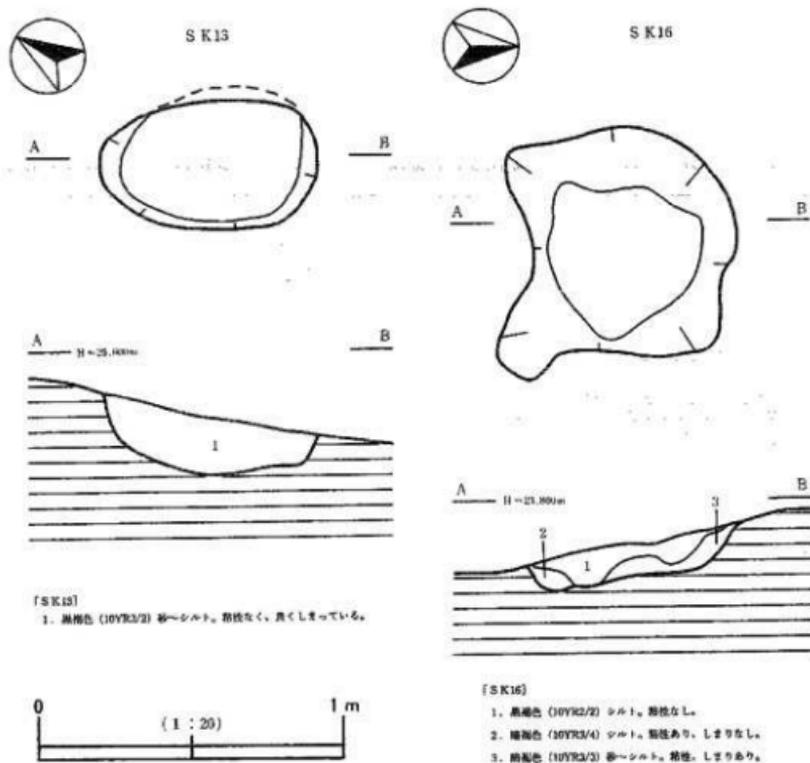
〔埋土の状況〕 上位から下位にかけて暗褐色土、最下層に褐色土がレンズ状に堆積している。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

S K 16土坑 (第80図、図版32)

〔位置・確認状況〕 ME 50グリッドの北西隅寄りの地山漸移層中でプランを検出した。斜面部検出の遺構の中で最も西に位置している。

〔形態・規模〕 平面形は不整形、断面形は鍋底状である。規模は、南北方向66cm、東西



第80図 S K 13・16土坑実測図

方向74cm、深さ約14cmである。

〔埋土の状況〕 斜面上方から流入した状況がみられる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

S K 24土坑（第79図、図版32）

〔位置・確認状況〕 L G 48グリッド地山漸移層中でプランを検出した。プランの東側は調査境界にかかっており、西半分を調査したことになる。

〔形態・規模〕 平面形は不整形円形、断面形は鍋底状を呈するが、北側の壁は段を有する。南北方向の規模は166cm、確認面からの深さは18～20cmである。

〔埋土の状況〕 断面図によれば、掘り込み面は第Ⅲ層の上面と思われる。埋土は7層に分けられたが、地山ブロックを含む土が不自然な堆積状況を示している。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

(2)時期不明

S D 01溝状遺構（第81図、図版33）

〔位置・確認状況〕 上位面から斜面に移る肩口のあたりを断続しながら東西に伸びている。地山漸移層上面でプランを検出した。1～2m下方をS D 02が並行するように位置している。

〔形態・規模〕 溝状のプランを呈し、調査区外に伸びており、全長40mをこえるものと推測される。断面形はU字形または逆台形を呈し、幅25～40cm、確認面からの深さは11～20cmである。断面OPをみると、第Ⅱ層上面から掘り込まれ、第Ⅲ層地山漸移層中で終わっていることがわかる。これによると、本来の溝の規模は、幅約75cm、深さ約40cmということになる。

〔埋土の状況〕 東西に長いので、地点により若干異なるが、黒褐色から暗褐色土が堆積しており、OP断面からするとレンズ状の自然堆積と推測される。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

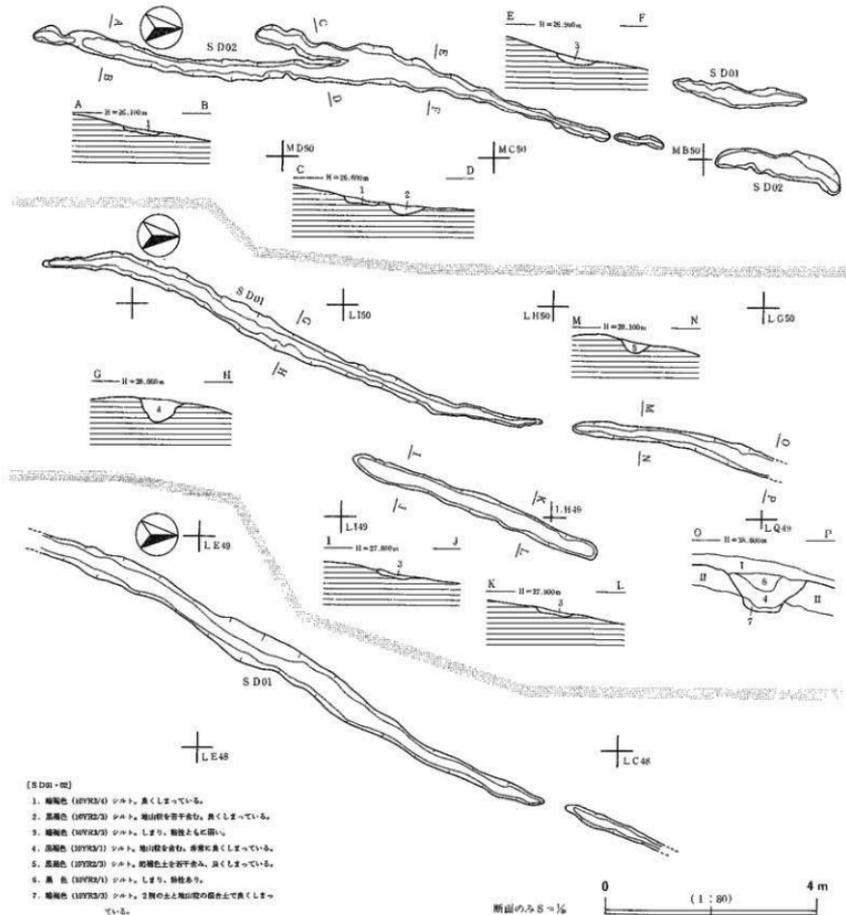
S D 02溝状遺構（第81図、図版33）

〔位置・確認状況〕 S D 01の南側に並行するように位置している。地山漸移層（第Ⅲ層）上面で断続しながら東西に伸びているプランを検出した。MC 50グリッド西側で二股に分かれている。

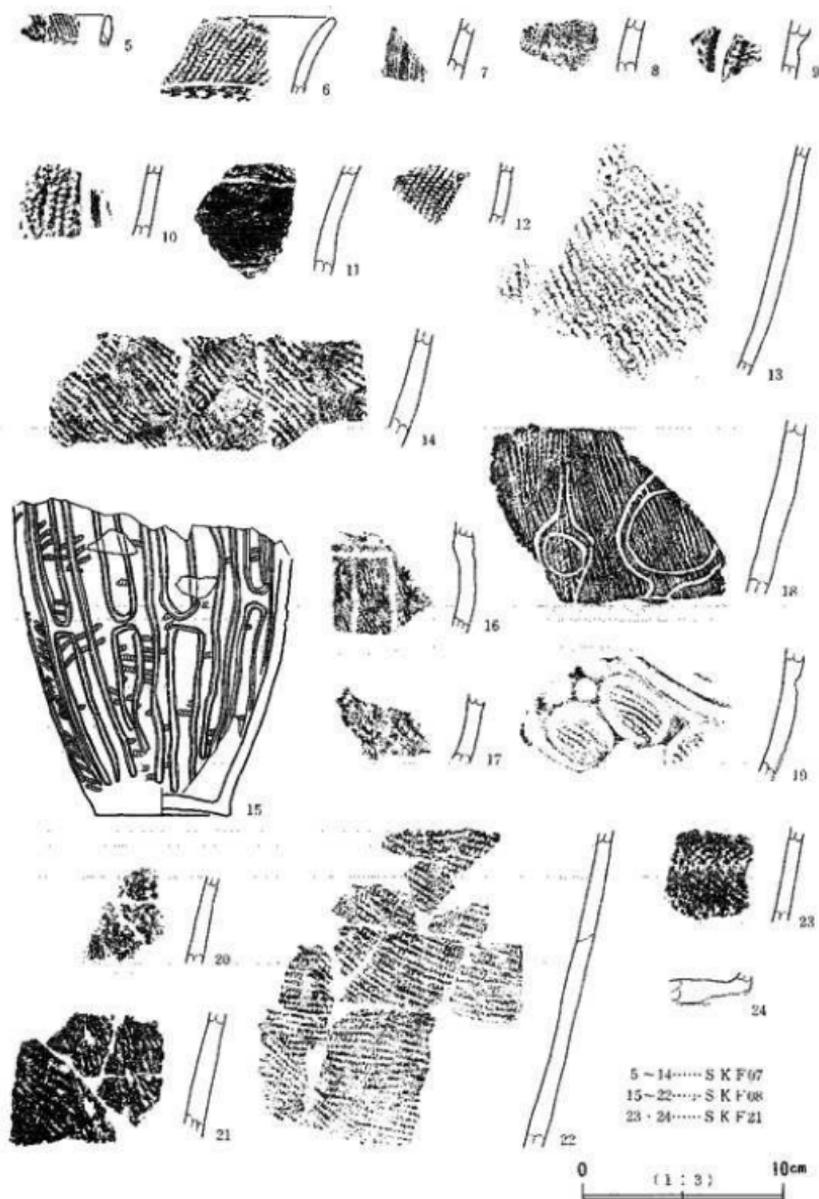
〔形態・規模〕 溝状のプランを呈し、全長は30mをこえるものと推測される。断面形は、逆台形である。その規模は、幅30～35cm、確認面からの深さ3～10cmである。

〔埋土の状況〕 暗褐色土が主体をなすが、部分的に黒褐色土が流入している。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。



第81図 S D01・02溝状遺構実測図



第82図 斜面部遺構内出土遺物

3. 下位面の遺構と遺物

下位面検出の遺構は、縄文時代の竪穴住居跡2軒と土坑1基、時期不明の土坑1基と柱穴4基である。このうち縄文時代の遺構は、下位面のやや奥の斜面寄りに位置しており、時期不明の遺構は、南寄りの縁辺部に位置する傾向が認められる。

(1) 縄文時代

① 竪穴住居跡

S105竪穴住居跡（第83・88図、図版34）

〔位置・確認状況〕 下位面の最も東側のLE39～41、LF39～41グリッドに位置する。LF40グリッド杭の北側を精査していたところ、地山漸移層中に焼土と炭化物の分布範囲が検出された。竪穴住居跡の炉跡の可能性があったので、さらにその周囲を精査したところ、柱穴と思われるピットと壁の一部が検出され、竪穴住居跡と推測された。

〔形態・規模〕 北側に検出された壁の一部と柱穴配置から、 $P_1 \sim P_{11}$ の外側に壁が巡っていたものと推測される。このため、推測される平面形は、ほぼ南北方向に長い小判形または楕円形である。その規模は、長軸（ $P_4 - P_{10}$ 間）805cm、短軸（ $P_2 - P_{10}$ 間）436cmを若干こえるものと推測される。北側に一部検出された壁の高さは、3～10cmである。

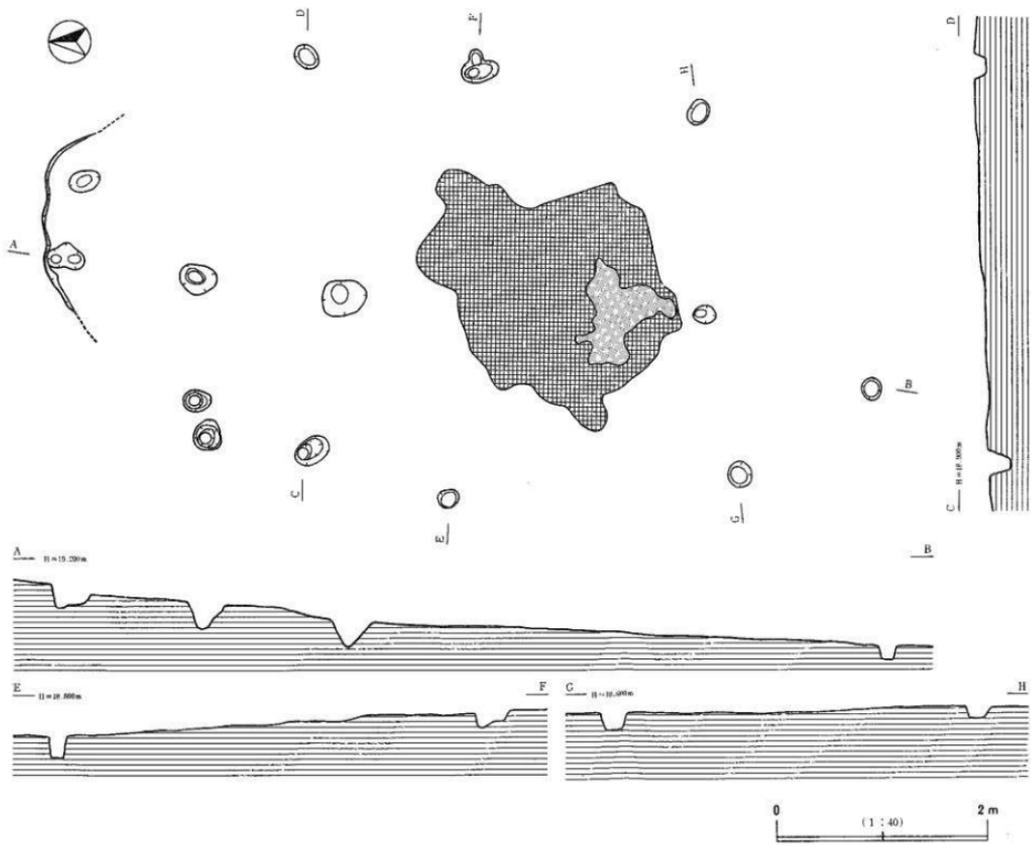
〔床面・柱穴〕 床面は地山漸移層の上面かそれよりやや高い面と思われ、本遺構の確認時の状況から考えると、踏み踏められたような堅致な面は認められなかったと思われる。

柱穴は、 $P_1 \sim P_4$ 、 P_8 、 P_{10} 、 P_{11} が主柱穴、 $P_{12} \sim P_{14}$ が棟木を支える柱穴と推測される。

〔地床炉〕 竪穴住居跡のやや南寄りに位置しており、南北261cm、東西215cmの範囲に炭化物が分布し、その中の南寄りに焼土範囲が認められた。焼土は、床面が堅く焼きしまった状態のものであった。

〔出土遺物〕 25・26は、地床炉北側の床面近くから出土した。25は、鉢形土器の口縁部である。無節斜縄文（R）が施されている。胎土に砂粒を含み、焼成は普通である。26は、RLの原体にRの原体を付加したものを回転施文した深鉢形土器である。外面に煤状炭化物が付着している。27・28は、捻糸文が施文されており、27の内面には煤状炭化物が付着している。30は26と、31は27と同一個体である。73は、主要剝離面の端部と左側縁に細かな調整を施して刃部とする搔器と思われる。長さ5.7cm、幅2.4cm、重さ13.3gである。石質は頁岩である。

〔時期〕 地文のものばかりで、時期を決定できるものがないが、26の付加条の原体を回転施文したものがあつた。中期中葉から後葉にかけての遺物を出土しているSKF08において、付加条のものが相伴していることから、本住居跡の時期を中期中葉から後葉にかけてと推測することが可能である。



第83図 S105竪穴住居跡実測図

S I 17 竪穴住居跡 (第84・85・88・89・90図、図版35・36)

【位置・確認状況】 S I 05から西へ20数m離れたMB40・41グリッドに位置する。MB40グリッドにおいて表土除去中に土器片がまとまって出土し始め、地山漸移層中で黒褐色プランを確認した。

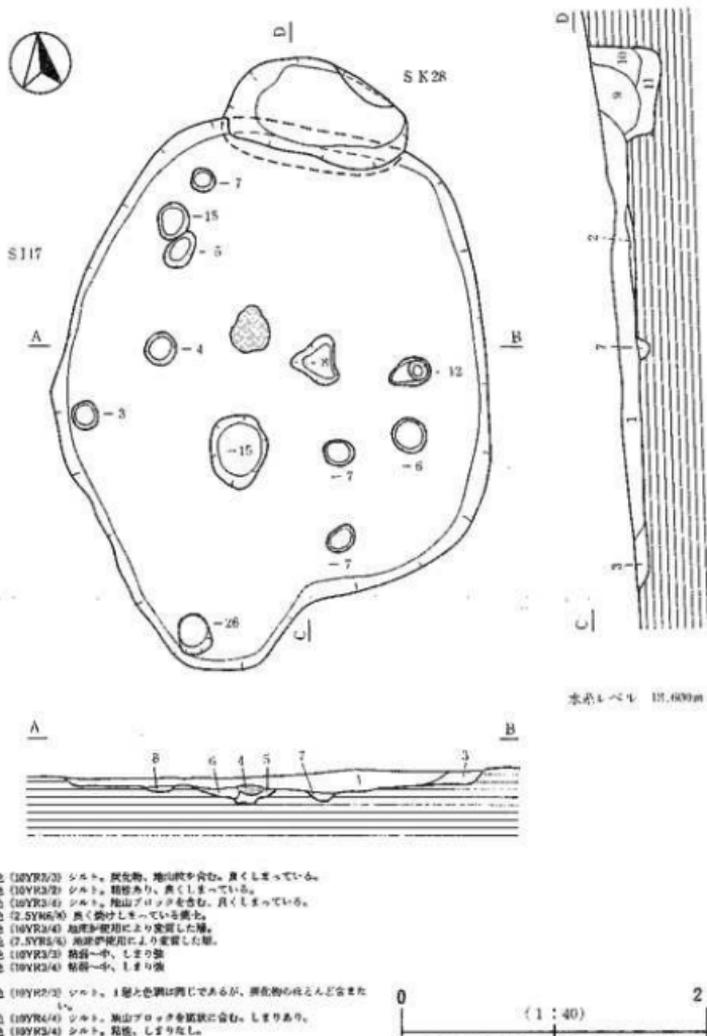
【形態・規模】 確認時のプランは、隅丸方形に近く北隅がやや突出していた。調査を進めたところ、南西側の壁が若干ふくらむ不整形となり、北隅の突出部は本遺構より古い土坑(SK28)と判明した。規模は、南北方向300~360cm、東西方向286cm、確認面から床面まで6~13cmである。

【床面・柱穴】 床面はほぼ平坦であるが、踏み締められた硬い面は認められなかった。床面を精査したところ、柱穴様のピットが合計12基検出された。各ピットの床面からの深さは、10cmをこえるやや深いもの(P₁、P₂、P₃、P₁₀)と10cmに満たないものまたは数cmのものがある。P₂とP₃については、褐色系の土がしみ状に地山に入り込んだものであり、柱穴の可能性は低い。したがって、この2基のピットを除く10基が本遺構に伴う柱穴と考えられるが、主柱穴は前述の10cmをこえるものと推測される。

【地床炉】 竪穴住居跡中央部から少し北に寄ったところに橙色の焼土範囲を検出した。地床炉は、掘り込みを持たないものであり、焼土の周囲に熱を受け変化した地山部分が認められた。

【埋土の状況】 竪穴住居跡の東から南にかけて地山ブロックからなる暗褐色土が堆積し、その後やや大粒の炭化物と地山粒を含む黒褐色土が堆積している。あとから堆積している黒褐色土中から時期の異なる遺物が一緒に出土していることから、人為的な堆積の可能性が高い。

【出土遺物】 本遺構からは縄文前期及び中期の土器が伴出しており、その垂直分布をみると遺構プラン確認面より上で多くが出土している。しかも前期と中期の遺物が、ほぼ同じレベルから出土しているという状況であった。32・33・42は同一個体であり、口縁部に縄の側面圧痕、体部に木目状燃糸文、口縁部と体部を画する隆帯上に半截竹管状工具による刺突が施されている。内面は、口縁に近い部分は横方向に、体部は縦方向にナデられている。34・35は同一個体であり、ゆるい波状を呈する口縁部に縄の側面圧痕、体部に斜行縄文を施文し、口縁部と体部を画する隆帯上と口唇部に半截竹管の押し引きを行っている。35は、体部の斜行縄文が隆帯上にはみ出している。外面に煤状炭化物が付着し、胎土に砂粒を多く含む。36も口縁部に縄の側面圧痕、体部に燃糸文が施文されるが、口縁部と体部を画する隆帯はみられない。37は、36の体部の破片である。38・39は、燃糸文が施された円筒深鉢の体部資料である。40は、円筒深鉢の体部資料であり、R Lの原体にRの原体を付加した縄を回転施文している。内外面に煤状炭化物が付着しており、胎土に砂粒を含む。43~47は、結節状浮線文が施文された土器であ



[S117]

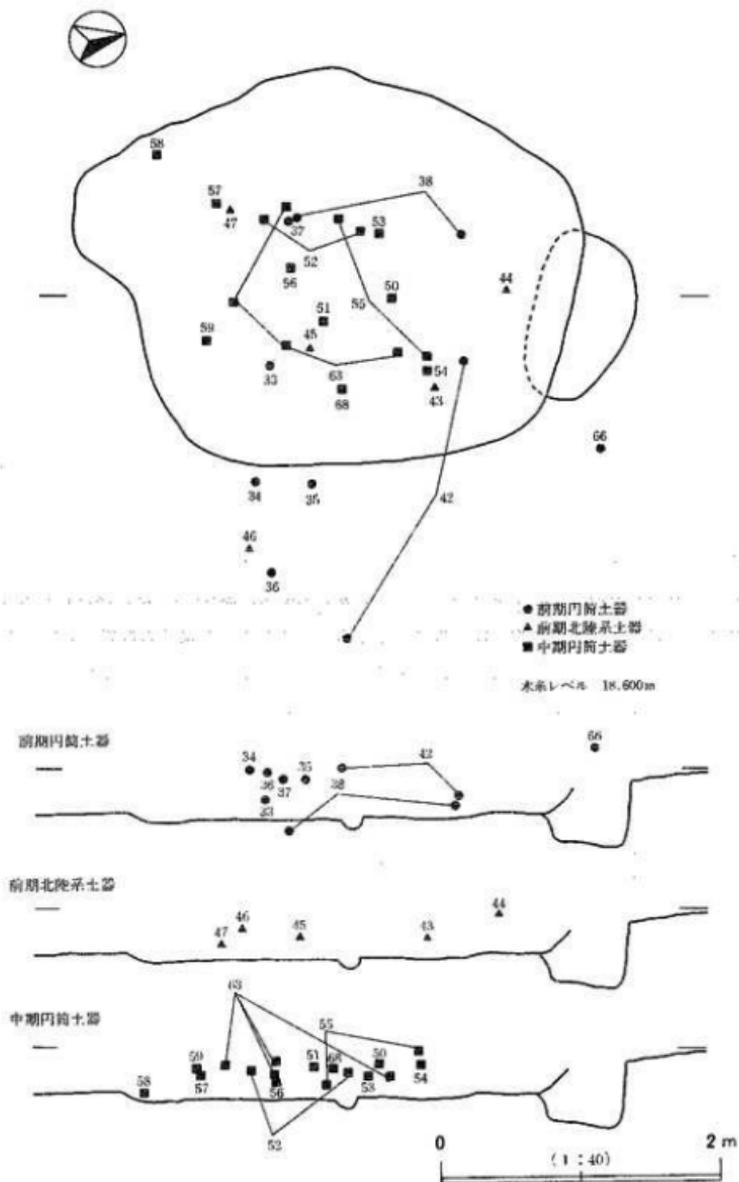
1. 黒褐色 (10YR5/2) シルト。炭化物、焼土粒を含む。黒くしまっている。
2. 黒褐色 (10YR5/2) シルト。焼土あり。黒くしまっている。
3. 暗褐色 (10YR3/4) シルト。焼土がブロックを含む。黒くしまっている。
4. 強土色 (2.5YR6/0) 強く焼けしまっている硬土。
5. 暗褐色 (10YR3/4) 焼土が使用により変質した層。
6. 暗褐色 (7.5YR3/4) 焼土が使用により変質した層。
7. 暗褐色 (10YR3/2) 粘土一色。しまり強。
8. 暗褐色 (10YR3/4) 粘土一色。しまり強。

[SK28]

9. 黒褐色 (10YR2/2) シルト。1層と色調は同じであるが、炭化物のほとんど含まれていない。
10. 褐色 (10YR4/4) シルト。焼土がブロックを含む。しまりあり。
11. 暗褐色 (10YR3/4) シルト。粘土。しまりなし。

第84図 S117竪穴住居跡・SK28土坑実測図

る。48は、地文に1段の縄を結束した原体を押圧した深鉢形土器の口縁部である。口唇部にも縄文が回転施文されている。49は、口縁に平行に隆帯が巡り、口縁と隆帯の間に縄の側面圧痕が3条認められる。また、隆帯直下には沈線が隆帯に沿って施されている。胎土に砂粒を多く含む。50は、折り返し口縁上や地文上に粘土紐が貼り付けられ、粘土紐の上にも縄の圧痕が認



第85図 S117竪穴住居跡遺物出土状況図

められる。内面に煤状炭化物が付着している。51は、隆帯に沿って1段の縄の側面圧痕が施された口縁部に近い部分の資料である。52・53・63は同一個体であり、口縁が大きな波状をなす深鉢形土器である。口縁部は、粘土紐貼り付けによる低平な隆帯上に縄の側面圧痕、隆帯間には爪形の刺突文が施されている。口唇部はヘラ状工具で面取りされている。体部には、斜行縄文が施されている。内面は非常に平滑に仕上げられており、胎土に砂粒の混入が少ない。54～59は、隆帯と縄の側面圧痕文、刺突文が施された深鉢形土器の口縁部または口縁に近い部分の資料である。55と59は同一個体である。60～62は体部の資料であり、61は羽状縄文が施文されている。64は、底部の資料であり、底部からやや開きぎみに立ち上がり、体部はふくらみ加減に推移するものと推測される。胎土は、砂粒の混入が見られず緻密である。65・66は口縁部の資料であり、外面に煤状炭化物が付着している。65は67と同一個体であり、67は斜行縄文の地文に断続した沈線が施されている。68は、地文に縦方向の沈線が認められる。72・74・76は切片石器であり、石質はいずれも頁岩と思われる。72は、二等辺三角形を呈し、基部に半月状の抉りを入れた石鏃である。アスファルトが両面に付着しており、着柄の状況を推測することができる。長さ2.9cm、最大幅1.9cm、重さ2.1gである。74は、先端部、基部とも折損した石槍である。現存長5.7cm、重さ24.1cmである。76は、鈎形の切片の主要剥離面側に細かい調整を行い刃部を作り出したスクレーパーである。長さ5.4cm、幅6cm、重さ19.2gである。

〔時期〕 前述の遺物の垂直分布と併せて水平分布をみると、遺構外の東側にも広がりが認められ、出土遺物のほとんどが本住居跡に直接伴うものと判断することはできない。このことと埋土の状況を考慮すれば、住居が使用されなくなって間もなく遺物が廃棄されたものと推測される。このように考えてくると、本住居跡が営まれたのは、前期末から中期前葉にかけての時期かそれ以前ということになる。

②土 坑

SK28土坑（第84図、図版35・36）

〔位置・確認状況〕 MB41グリッドでS117を精査中に黒褐色のプランを検出した。

〔形態・規模〕 東西方向に長い小判形で、断面形は逆台形に近い。北東側の壁は、底面からオーバーハングして開口部に達する。また、埋土中に壁の崩落土を含むことから、本遺構が袋状の土坑であった可能性がある。規模は、長さ120cm、幅約70cm、確認面（地山漸移層）からの深さ33～46cmである。

〔埋土の状況〕 暗褐色土と黒褐色土が流入する途中で北側の壁が崩落している。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

(2) 時期不明

① 土 坑

S K 10土坑 (第86図、図版37)

〔位置・確認状況〕 下位面の調査区の最も西に位置する。MF 40グリッドの東側地山上面でプランを検出した。本遺構が位置するあたりは、過去に削平を受けた痕跡がみられ、表土直下に地山が認められる。

〔形態・規模〕 東西に長い円形であり、断面形は逆台形である。規模は、東西方向83cm、南北方向65cm、確認面からの深さ5～15cmである。底面は平坦であり、西側の壁は木の根による攪乱を受けている。

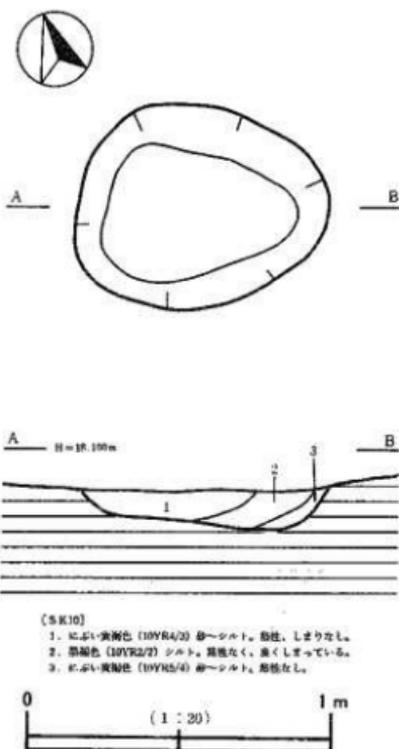
〔埋土の状況〕 埋土堆積の当初に壁が崩落し、その後に地山粒を含む土が流入している。

〔出土遺物〕 遺物は、出土しなかった。

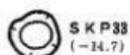
② 柱穴様ピット (第87・89図)

下位面の調査区の南東隅に位置し、L G 38グリッド杭を中心とする4つのグリッドの地山漸移層中で合計4基を検出した。径10数cm、確認面からの深さ10数cmから20cmである。これらの柱穴様ピットにより建物を構成する状況ではなかった。

S K P 32埋土中から土器片2点が出土している。70は、地文上に結節状浮線文が施されている。器表面がやや脆くなっており、2次の火熱を受けたものと推測される。71は、底部近くの資料であり、羽状縄文が施文されている。胎土に砂粒を混入する。



第86図 S K 10土坑実測図



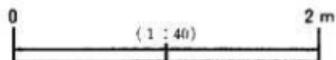
SKP34
(-20.7)



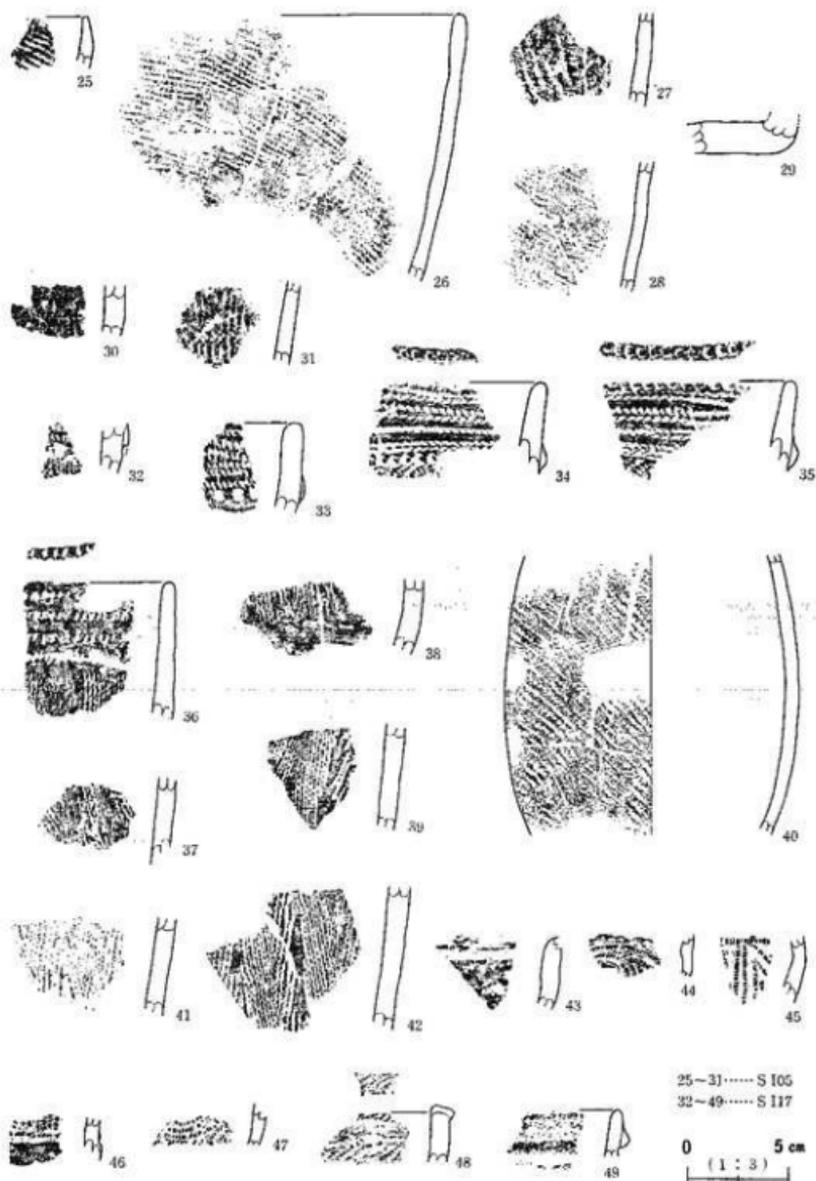
SKP35
(-13.9)



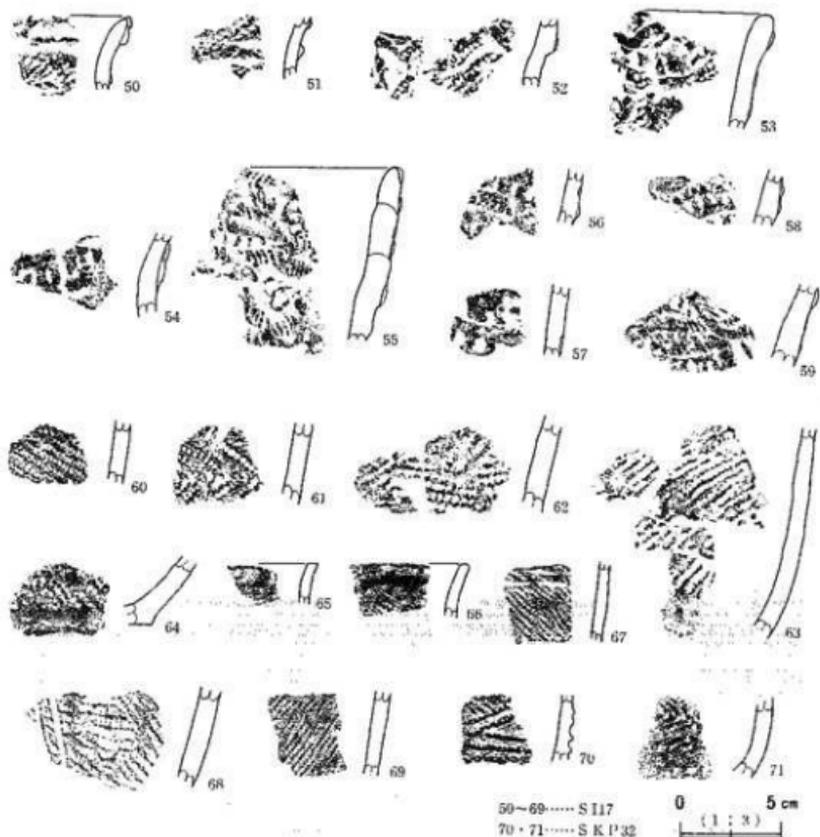
- [SKP32~35]
- SKP32: 黒褐色 (10YR3/2) シルト。地山に含まれる礫を含む。腐敗、しまりなし。
- SKP33: 黒褐色 (10YR3/2) シルト。地山プロットを含む。腐敗、しまりなし。
- SKP34: 黒褐色 (10YR2/2) シルト。炭化物、地山に含まれる礫を含む。腐敗あり、しまりなし。
- SKP35: 黒褐色 (10YR2/2) シルト。炭化物、地山に含まれる礫を含む。腐敗、しまりなし。



第87図 柱穴実測図



第88圖 下位面遺構内出土遺物(1)



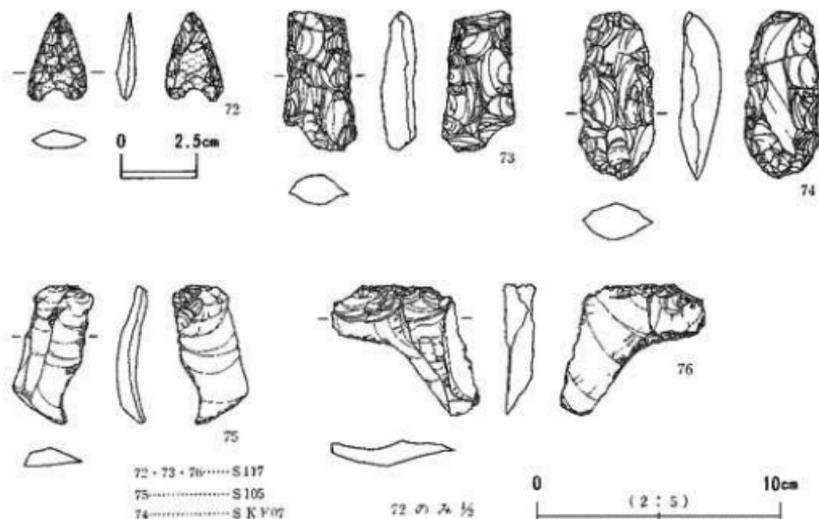
第89図 下位面遺溝内出土遺物(2)

第3節 遺構外出土遺物

萱刈沢Ⅱ遺跡の遺構外から出土した遺物は、縄文土器、土製品、石器、土師器、銅銭である。ここでは、土器・土製品、石器、その他に分けて説明を加えたい。なお、文章中の括弧の数字は、遺物に付した通し番号である。

1. 土器・土製品

①土器：土器は破片で706点出土し、その内訳は縄文土器677点、土師器29点である。縄文土器については、全体を復元できたものはなかった。ここでは、以下のように土器を分類した。



第90図 遺構内出土石器

第I群土器 …… 縄文早期の土器

第II群土器 …… 縄文前期の土器

第III群土器 …… 縄文中期の土器

第IV群土器 …… 縄文後期の土器

第V群土器 …… 縄文時代の土器のうち、地文のみのもの、無文のものを一括した。

第VI群土器 …… 平安時代の土器

第I群土器 (第91図、図版38)

縄文時代早期末葉の土器である。内外面に条痕文または縄文を施文する。縄文原体は、無節、単節、複節、0段多条がある。ほとんどの胎土に少量の繊維を含むが、繊維を含まないものが1点認められる。

1類 内外面に縄文を施文する土器である(77~80)。77・78は内外とも0段多条、79・80は外面に無節、内面に0段多条の原体が用いられている。器厚は9mm前後。78は内面に煤状炭化物が付着している。

2類 内面に条痕文を施文する土器である(81~84)。外面には単節、複節、0段多条の原体が回転施文されている。器厚は1cm前後である。81は、胎土に繊維と細砂を含みやや脆い。内面に煤状炭化物が付着している。84は、胎土に繊維を含まず、本群の中では比較的器厚が薄

く堅致なつくりである。内外面に煤状炭化物が付着している。

3類 外面にのみ縄文が施文されている土器である(85~92)。原体は、85・87が単節、86・88・89・91が無節、90・92が0段多条である。色調は赤褐色~橙色を呈し、87・90・92の内面には煤状炭化物が付着している。

第II群土器(第91・92図、図版39)

前期後葉のもので、主に文様要素から次のように分類した。

1類 口縁部に縄文原体の側面圧痕、体部に撫糸文、羽状縄文を施す土器で、胎土に繊維を含むものそうでないものがある(93~106)。94~97は、口縁部と体部とを画する隆帯が認められる。95と105は同一個体であり、胎土に砂粒を含み、外面に煤状炭化物が付着している。99・100・103・104は、絡条体を回転施文した体部の資料であり、104の内面には主に縦方向の研磨痕が認められる。

2類 結節状浮線文を施す土器である(107~117)。内面の調整はあまり丁寧でなく、胎土に砂粒をやや多く含む。107~113は、口縁部または口縁に近い部分の破片である。波状を呈し、内面にも口縁に並行し結節状浮線文を施すもの(107・108)、波頂部の粘土をV字状に抉り取った後、結節状浮線文をそれに合わせて施すもの(109)がある。112は、単節斜縄文(RL)の地文に結節状浮線文を施し、体部から口縁部にかけてやや強く内傾したのち外反して口縁に至る。117は同一個体である。

3類 ソーメン状の粘土紐を貼り付ける土器である(118~126)。胎土に砂粒を含む。2類に比べて内面の調整は丁寧である。118は、結節状浮線文と小波状の粘土紐の貼り付けが施され、2類と3類の中間的な様相が認められる。粘土紐を貼り付けただけのもの(120・121・124)と粘土紐に沿って竹管状工具で沈線を引きように平滑に調整を加えるもの(119・122・123・125・126)がある。125は、粘土紐のほか豆粒状の粘土の貼り付けが行われている。123と126は同一個体であり、126は板状の粘土を筒状にした把手である。三角形を基調とした文様が粘土紐で施され、3カ所ある三角形のマドのうち外側の1カ所を除く2カ所は貫孔されている。

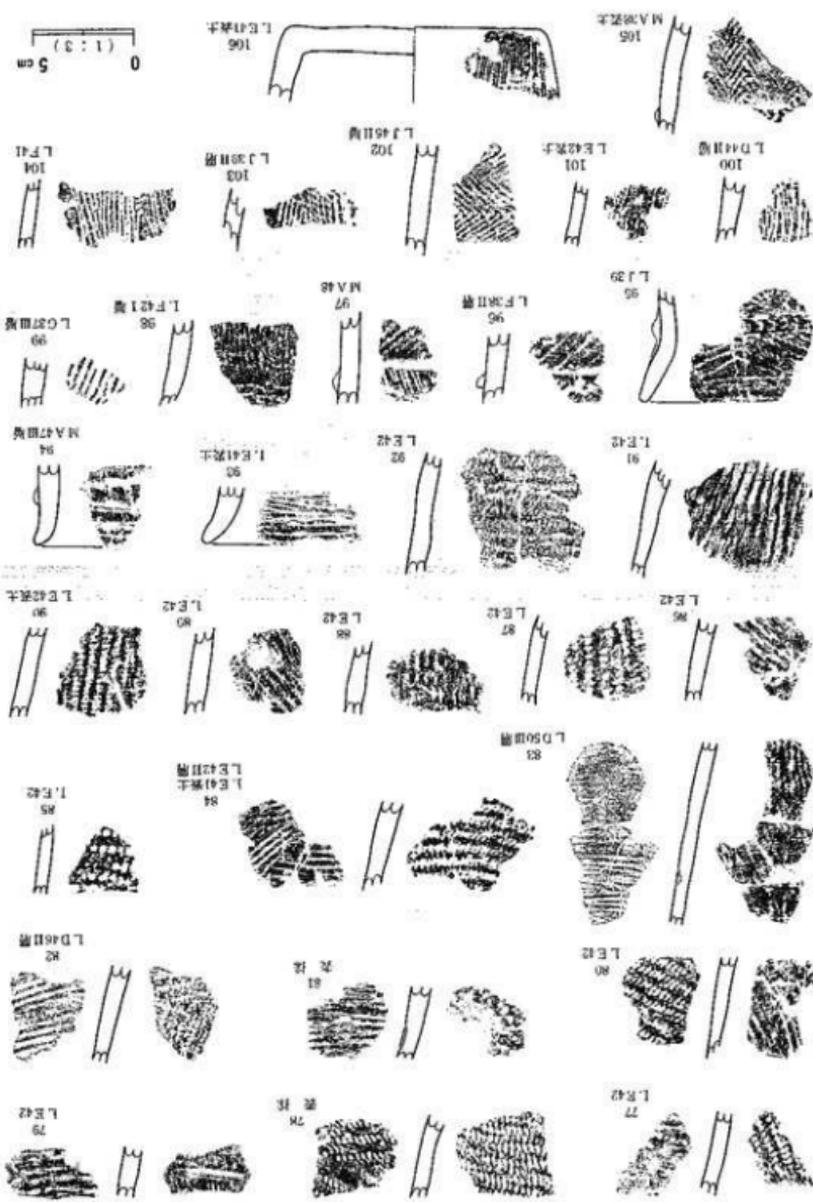
第III群土器(第92・93図)

中期前葉から中葉にかけてのもので、胎土に繊維を含まない。

1類 口縁部文様帯に縄文原体の側面圧痕と隆帯が施される土器である(127~131)。口縁は波状を呈するものが多い。127は、口縁が大きく外反する土器で、口縁部文様帯を画する隆帯と口縁の波頂部から垂下させた隆帯上には縄の圧痕が施されている。129は、口縁に沿って細い隆帯を波状に巡らせ、その上に縄の圧痕が施されている。130・131は、爪形の縄の圧痕が施文されている。

2類 刺突文と隆帯により文様が施される土器である(132~134)。縄文の施文は、隆帯上

第91圖 遺構外出土遺物 (1)



第92圖 遺構外出土遺物 (2)



に限られる。刺突文の施文には、半截竹管状工具の内側を上にして、器面に対して斜めの方向から行っているものと推測される。

3類 沈線文が施された土器である(135~143)。135~137は同一個体であり、口縁部が波状を呈する大型の深鉢形土器である。口縁に沿って横位の渦巻き文、その下の無文部を挟み地文上に横位又は弧状の沈線が施される。胎土に砂粒を含み、焼成は普通である。138も深鉢形土器であり、体部がやや張る器形と推測される。139~143は、地文上に沈線が施文されるものである。141の地文にははっきりしないが、無節の可能性がある。143は底部付近の破片であり、内面に煤状炭化物が付着している。

4類 竹管により半隆起線文が施された土器である(144)。深鉢形の体部の破片と思われ、内面の調整はあまり丁寧でない。胎土は砂粒を含まず緻密であるが、焼成は普通である。

5類 半截竹管状の工具による沈線文が施された土器である(145)。鉢形の体部破片であり、器面全体にやや深い沈線が密に施され、残された部分が隆帯状に浮き彫りされた効果を出している土器と推測される。胎土に細砂を含み、焼成は良好である。

第IV群土器(第93図)

後期初頭から前葉にかけての土器で、胎土が緻密なもの、砂粒を含み粗いものがある。

1類 口縁から垂下する細い隆帯を有し、隆帯で区画された部分に斜縄文が横位に施文されている(146)。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通である。

2類 地文上に沈線が施文される土器である(147・148)。147は、口唇部に刻みが施され、外面に煤状炭化物が付着している。

3類 地文のみ又は無文の土器である(149~153)。149は、つまみ出したような把手が付けられた浅鉢形の土器である。口縁部は、内側に折り返されている。150は、口唇部に粘土紐を貼り付けと縄の痕が施されている。152と153は同一個体で、燃糸文が施文された深鉢形土器である。口縁部は、折り返されている。

第V群土器(第93・94図)

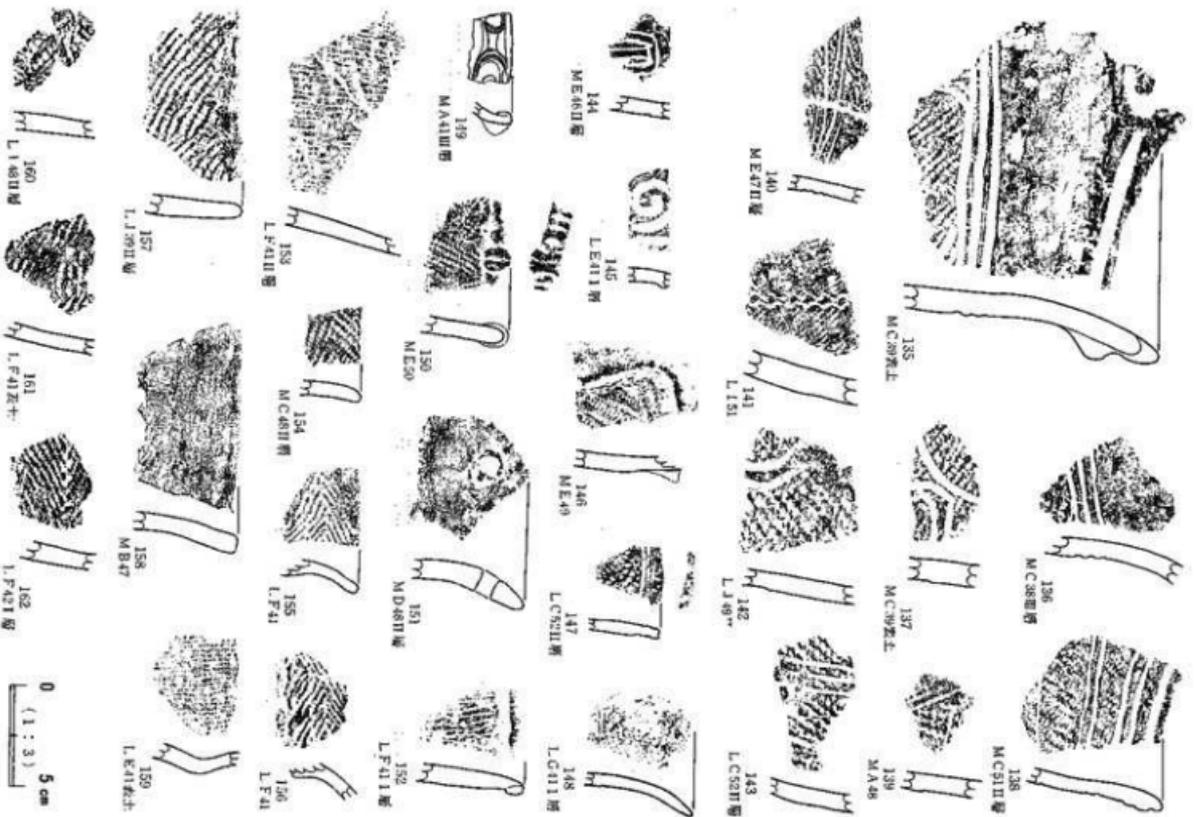
時期の不明な縄文土器で、地文のみ又は無文のものである。

1類 口縁部の破片である(154~158)。154~156は、羽状縄文が施文されている。155と156は同一個体であり、縄の末端に環の付いた羽状縄文が施されている。胎土に砂粒をほとんど含まないが、赤色粒子と黒色粒子を含む。

2類 体部の破片である(159~171)。施文されている文様は、燃糸文、無節斜縄文、単節斜縄文、羽状縄文などである。

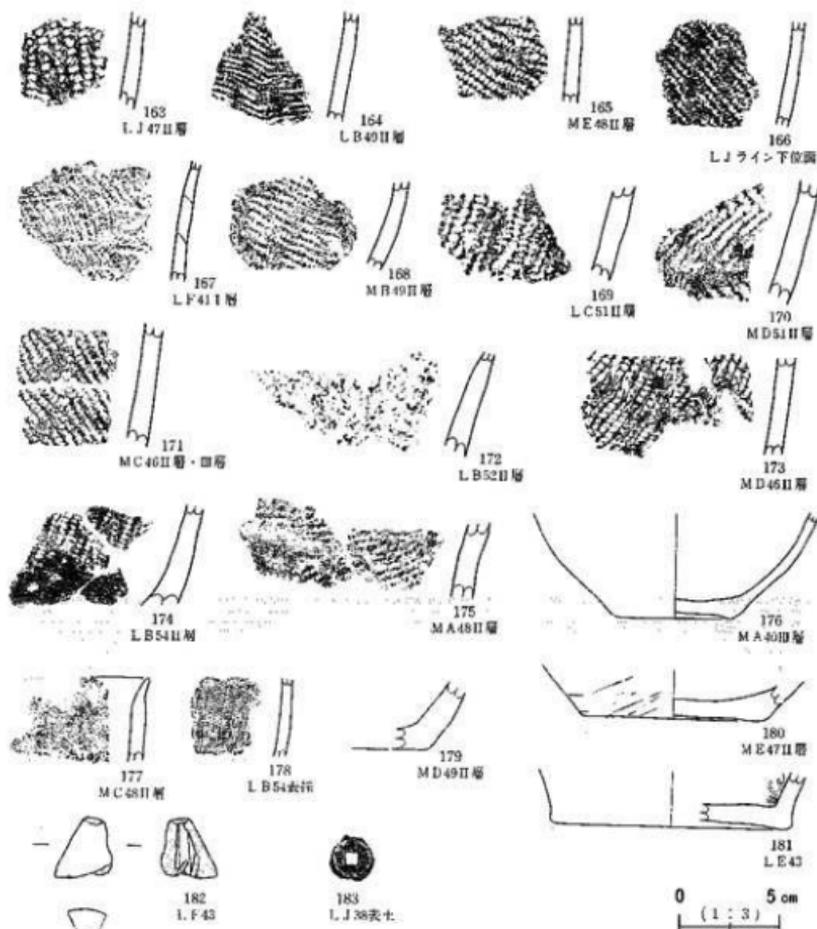
3類 底部付近の破片である(172~175)。

第VI群土器(第94図)



第93圖 遺跡外出土遺物 (3)

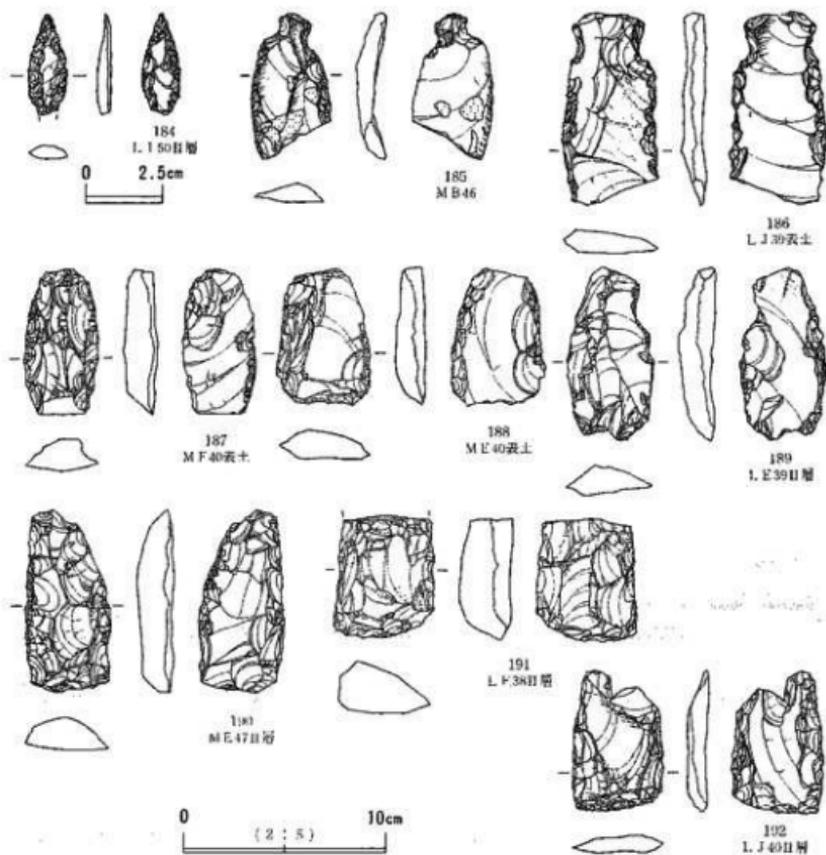
0
(1 : 3)
5 cm



第94図 遺構外出土遺物(4)

平安時代の上器である(176~181)。176は、土師器坏である。あげ底ぎみの底部から外反しながら立ち上がった後、内湾して口縁部に至る。成形にロクロを使用せず、内外面ともナデ調整されているが、あまり丁寧でない。胎土に砂粒を少量含み、焼成は普通である。底径5.7cm、現有高5.1cmである。177・178は、土師器甕の口縁部と胴部の破片である。178は、色調が橙色を呈し、外面に縦位のハケ目調整が施されている。179~181は、土師器甕の底部であり、外面に煤状炭化物が付着している。

②土製品：土錘1点の出土である(182)。胎土に細砂を含み、焼成は良好である。



第95図 遺構外出土遺物(5)

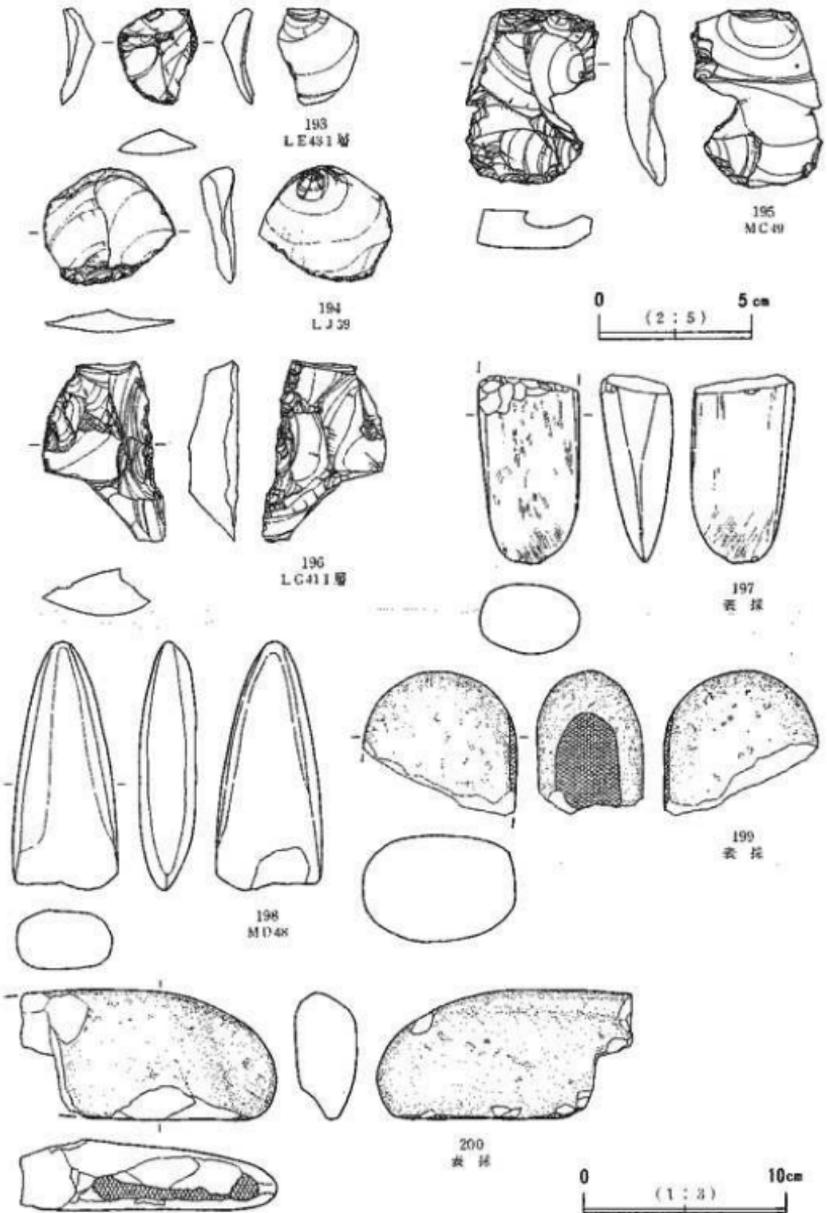
2. 石器(第95~97図)

①剥片石器：石鏃(184)、石匙(185・186)、石筥(187~190)、スクレーパー(191~196)の各種石器が出土した。184は、有茎式であるが、基部が折損している。185は、主要剥離面の背面に調整を施し刃部としており、先端部は折損している。石筥は、第1次剥離面を残すもの(187・188)と全面に調整を加えるもの(189・190)がある。

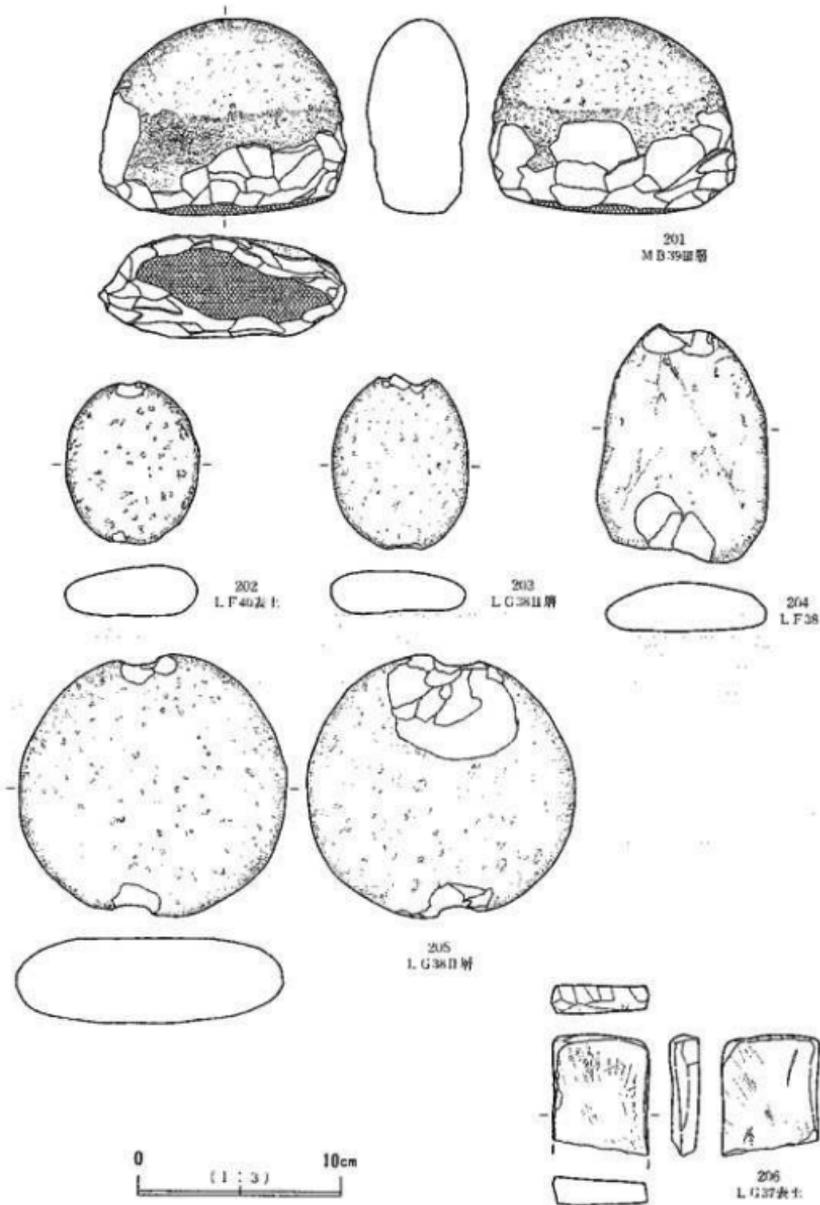
②礫石器：石斧(197・198)、磨石(199・201)、半円状扁平打製石器(200)、石鏟(202~205)、砥石(206)の各種石器が出土した。201は、北海道式石冠の可能性も考えられる。

3. その他

寛永通宝1点が出土している(第94図183)。



第96図 遺構外出土遺物(6)



第97図 遺構外出土遺物（7）

第2表 蓋刈沢II遺跡出土石器計測表

[遺構内出土]

番号	遺構名	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
72	S I 17	石 鎌	2.9	1.9	0.6	2.1	頁 岩
73	S I 17	石 槍	5.7	2.8	1.4	24.1	"
74	S K F 07	石 篋	6.9	3.1	1.6	34.4	"
75	S I 05	スクレーパー	5.7	3.2	0.8	13.3	"
76	S I 17	"	5.4	6.0	1.2	19.3	"

[遺構外出土]

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
184	L I 50	石 鎌	3.3	1.3	0.4	1.6	頁 岩
185	M B 46	石 匙	6.1	3.2	0.9	14.9	"
186	L J 39	"	7.9	3.9	0.9	33.6	"
187	M F 40	石 篋	6.0	3.0	1.4	25.2	"
188	M E 40	"	5.1	3.8	1.2	31.1	片 岩
189	L E 39	"	5.6	6.2	1.3	30.6	頁 岩
190	M E 47	"	7.5	3.5	1.5	41.3	"
191	L F 38	"	5.1	4.0	2.6	54.7	"
192	L J 40	"	5.8	3.6	0.8	19.6	"
193	L E 43	スクレーパー	3.9	3.3	0.9	9.3	玉 髓
194	L J 39	"	4.8	5.3	1.3	24.8	頁 岩
195	M C 49	"	7.2	5.0	1.6	53.0	"
196	L G 41	"	7.4	5.0	1.9	58.2	"
197	表採	磨製石斧	9.3	4.9	3.4	230.7	凝灰岩
198	M D 48	"	12.2	5.1	2.8	246.4	流紋岩
199	表採	磨 石	7.0	7.6	5.2	352.6	花崗岩
200	表採	半円状扁平打製石器	6.3	12.6	3.0	367.4	玄武岩
201	M B 39	磨 石	9.6	12.2	5.0	825.9	花崗岩
202	L F 40	石 錘	8.1	6.4	2.5	163.1	安山岩
203	L G 38	"	8.7	6.6	2.1	166.7	"
204	L F 38	"	11.7	7.9	2.4	378.6	花崗岩
205	L G 38	"	12.3	13.1	4.2	962.1	安山岩
206	L G 37	砥 石	5.7	4.6	1.4	59.2	凝灰岩

第3章 まとめ

縄文時代の遺構と遺物について

①遺構の立地と変遷について

今回の調査では、竪穴住居跡3軒、フラスコ状土坑5基、土坑6基が検出された。竪穴住居跡は、上位面に1軒、下位面に2軒であるが、この3軒は同一時期に営まれたのではなく、それぞれ時期を異にしている。また、フラスコ状土坑は南向き斜面の上方に4基、下方に1基ある。これを表にすると、次のようになる。

遺構名	営まれた時期		立地
	前期	中期	
SI 17	...	■	下位面
SI 25		■	上位面
SI 05		■	下位面
SKF		...	斜面

註) 営まれた時間幅は、最大にみた場合のもので、かならずしもその全期間にわたって遺構が営まれたことを表すものでない。

フラスコ状土坑からは、中期中葉から後葉にかけての遺物が出土している。その出土状況は、フラスコ状土坑が使われなくなり、自然堆積と壁の崩落を繰り返して完全に埋没する少し前に斜面上方から流入したものと推測される。したがって、その時期は、SI 05・25と同時期か少し前の時期が考えられる。また、フラスコ状土坑がまどまって位置する北側の上位面には、フラスコ状土坑を使用した人々の集落の存在が予想される。

SI 17からは前期末～中期前葉にかけての遺物が出土し、それは住居跡が埋没する過程で廃棄されたことが推測された。遺物を廃棄した人々は、SI 17で生活を営んだ人々またはSI 17の周辺に住んでいた人々の2つの可能性が考えられる。

本遺跡と同じような地形に営まれた遺跡の類例に大館市上ノ山I遺跡がある。上ノ山I遺跡は、前期から中期にかけての集落であり、上位面と下位面に主に竪穴住居跡が営まれ、斜面部は捨て場に利用されている。斜面部に多量の生活廃棄物が捨てられるとともに、土砂の流出をも引き起こしており、下位面に生活を営む人々に何らかの規制が働いていた可能性が指摘されている。上ノ山I遺跡と本遺跡を比較してみると、斜面部の利用の仕方に大きな違いがある。このことは、捨て場が他の場所に形成されたことを示唆するとともに、前期末～中期前葉における下位面の居住環境が上ノ山I遺跡のような状況でなかったことを示している。このように

考えてみると、本遺跡の下位面における堅穴住居跡の立地は、「堅穴住居」の機能・用途にかかわるものと一応推測される。

②遺物について

a. 第Ⅰ群土器について 当該土器は、調査区東側斜面部、LE42グリッドを中心に出土している。その特徴は、内面に縄文または条痕文が施文されるもので、ほとんどが胎土に繊維を含む。平縁の口縁部破片が1点あり、体部は直線的あるいは内湾ぎみに立ち上がるものであるが、全体の器形は明らかでない。縄文は、0段多条の斜行縄文が多いが、無節・半節もある。

ところで、東日本における早期後葉から前期初頭の土器様相については、関東地方を中心として貝殻条痕文系土器→羽状縄文土器という変遷が知られている。貝殻条痕文系土器が作られていたころ、東北北部から北海道西南部では「縄文系尖底土器様式」の土器が作られていたとされる。この土器の特徴は、胎土に繊維を含み、口縁は平縁か波状をなす尖底深鉢形であり、器面全体に縄文が施され、内面にも条痕と縄文が施される。第Ⅰ群とした土器は、前述の特徴からこの「縄文系尖底土器様式」に含まれるものと考えられる。しかしながら、その型式名については、断片的な資料であることから特定することができなかった。

b. 北陸系の土器について 当該土器は、遺構内外から出土している。遺構内ではSⅠ17、遺構外では第Ⅱ群2類・同3類・第Ⅲ群5類が調査区東寄りの斜面から下位面に移るあたり、第Ⅲ群4類が調査区西側の斜面部から出土している。

SⅠ17出土土器および第Ⅱ群2類・3類土器は、福浦上層式または朝日下層式に比定されるものと考えられる。その胎土の特徴は、2～3mmの砂粒を多く含み、その砂粒が器表面に露出しているものも認められる。ただし、在地の土器との比較においては、目立った違いはみられなかった。

北陸系の土器を出土している県内の遺跡については、富樫氏の論文¹⁾がある。それによると、北陸系の土器が出土している遺跡は、県内の主要河川（米代川、雄物川、子吉川）の流域と男鹿半島、八郎潟周辺にみられること。ただし、雄物川流域の中期の代表的な遺跡からは未だ出土していないこと。出土している土器は、縄文前期末から中期前葉にかけてのものが多いこと等が指摘されている。本遺跡例もその例外ではない。

註1) 富樫泰時「秋田県における北陸系の土器について」『本荘市史研究4』1984（昭和59年）

（参考文献）

- 秋田県教育委員会『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ上ノ川Ⅰ遺跡・七ノ山Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第173集 1988（昭和63年）

遺跡Ⅱ遺跡

- 富樫泰時 「東日本の縄文土器」『世界陶磁全集 1 日本原産』小学館 1979 (昭和54年)
- 佐藤達夫 「3 青森県上北地方の縄紋土器」『東アジアの先史文化と日本』六興出版 1983 (昭和58年)
- 青森県教育委員会 「長七谷地貝塚」青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第57集 1980 (昭和55年)
- 能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 『石川県能登町 真脇遺跡農村基盤総合整備事業能登東地区真脇工区に係る発掘調査報告書』 1986 (昭和61年)
- 青森県教育委員会 『衣館(1)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第120集 1989 (平成元年)



1. 壺刈沢口遺跡調査前近景（南西から）



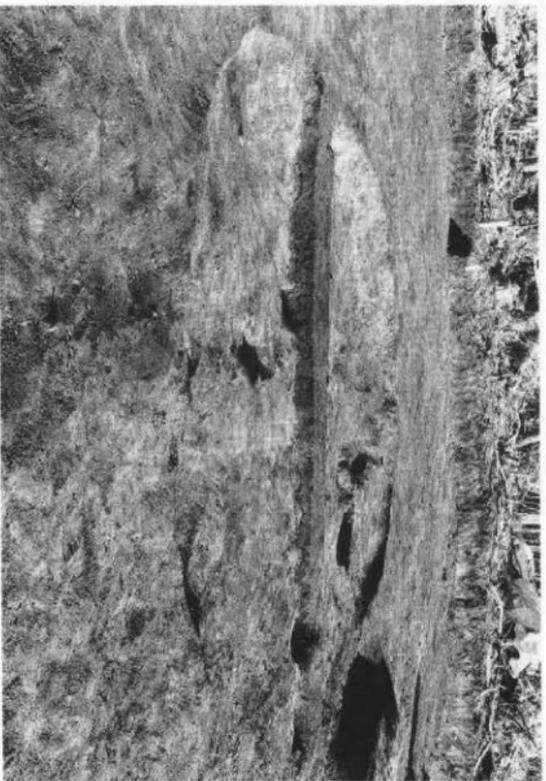
2. 上位面調査終了後近景（南から）



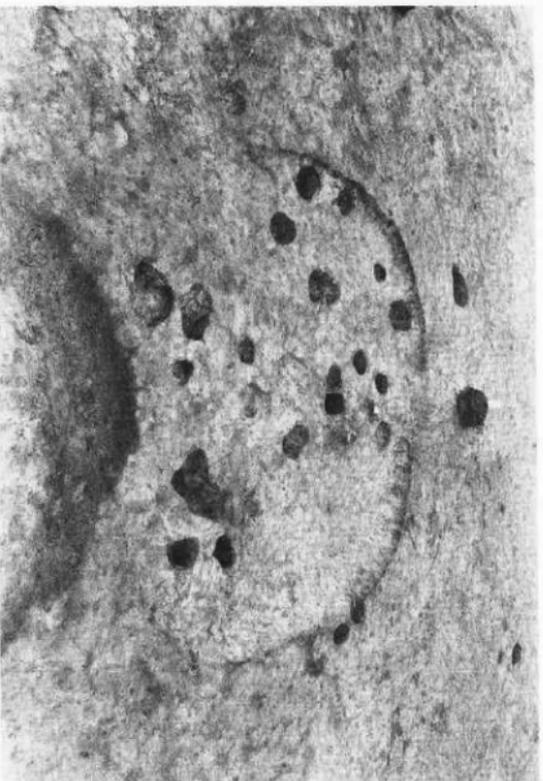
1. 斜面部調査状況（北東から）



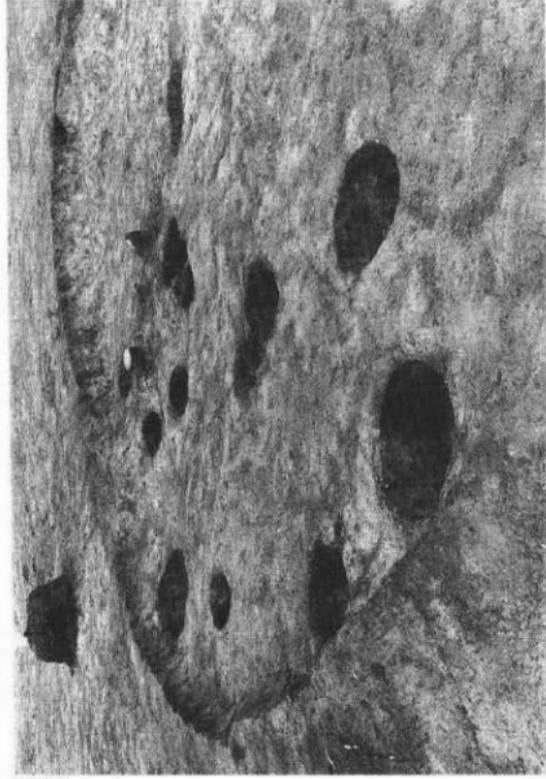
2. 下位面調査終了後近景（東から）



1. S125土层断面 (北西から)



2. S125完掘状況 (南から)



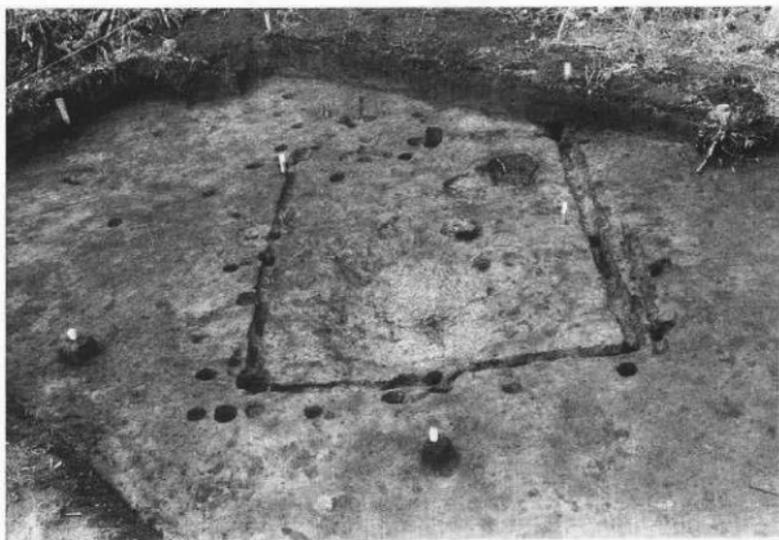
1. S125発掘状況 (西から)



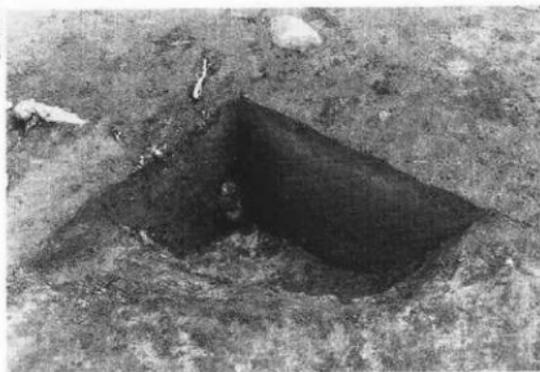
2. S103・04・19発掘状況 (西から)



1. S103・04・19土層断面（北から）



2. S103・04・19発掘状況（西から）



1. SI03・04・19内土坑
土層断面 (北西から)

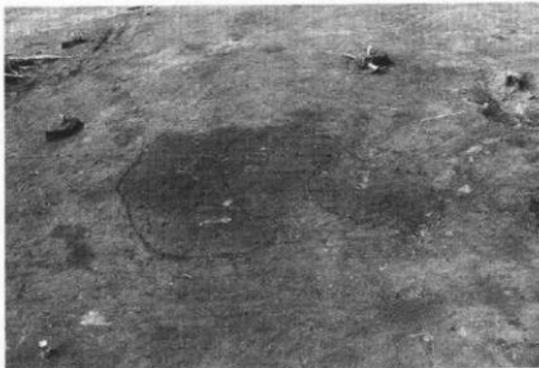


2. SI03・04・19内土坑
土層断面 (西から)

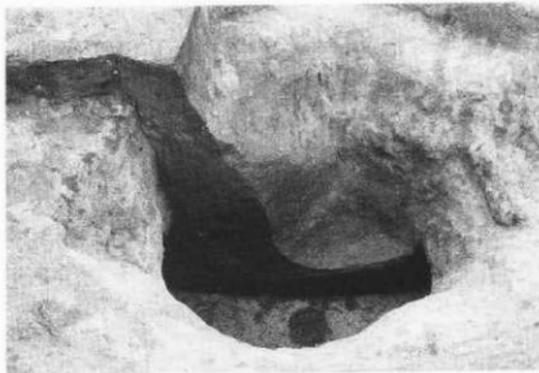


3. SI03・04・19内土坑
完掘状況 (西から)

1. SKF06検出状況
(東から)



2. SKF06土層断面
(西から)



3. SKF06調査状況
(南から)

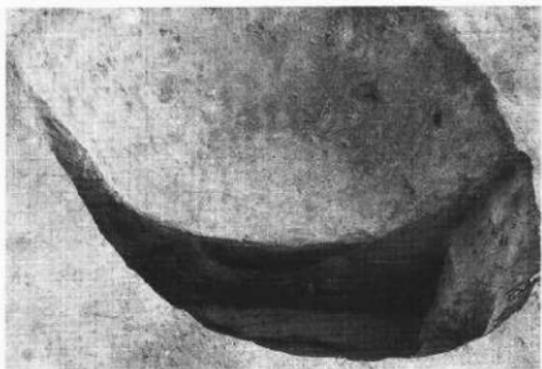




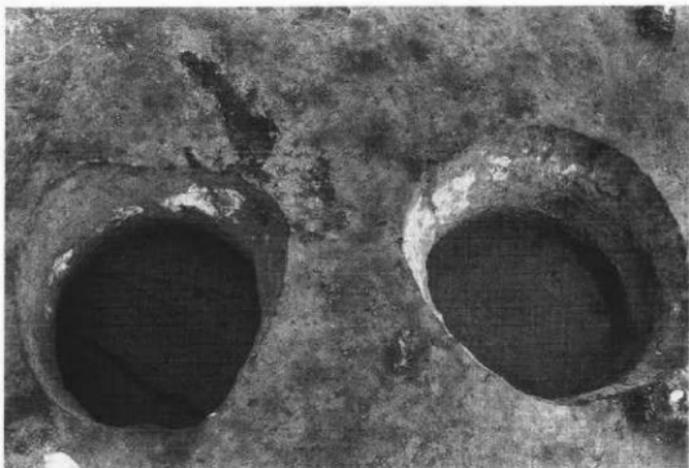
1. SKF06完掘状況
(西から)



2. SKF07遺物出土状況
(西から)



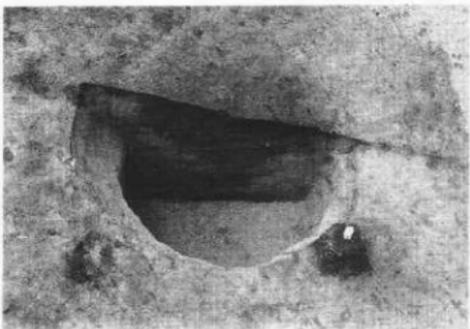
3. SKF09土層断面
(西から)



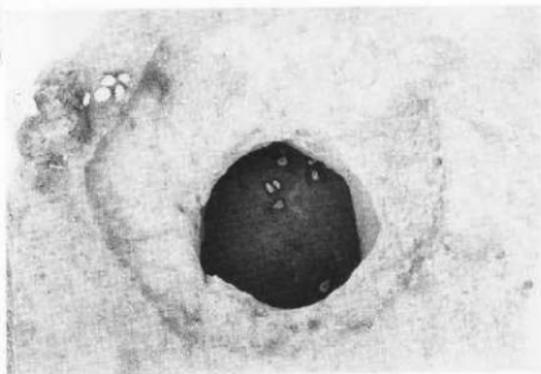
1. SKF07 (左)・SKF09 (右) 完掘状況 (西から)



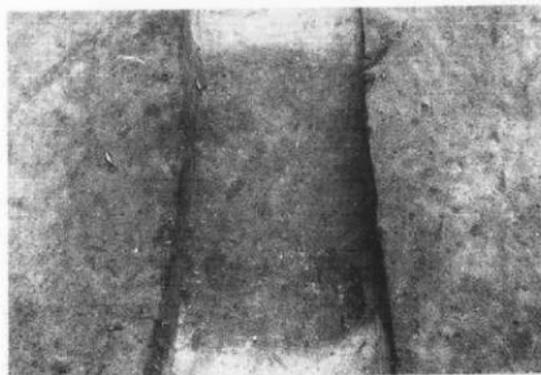
2. SKF08遺物出土状況
(北西から)



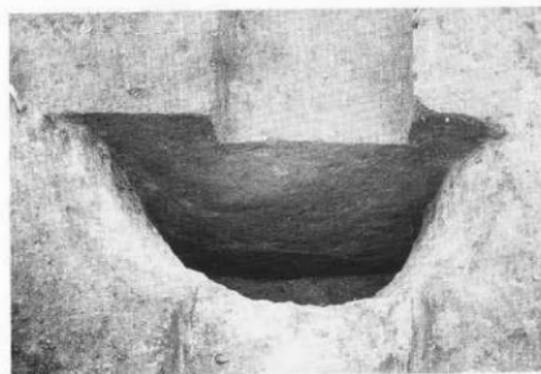
3. SKF08土層断面
(北西から)



1. SKF08完掘状況
(南から)



2. SKF21検出状況
(南から)



3. SKF21土層断面
(南から)

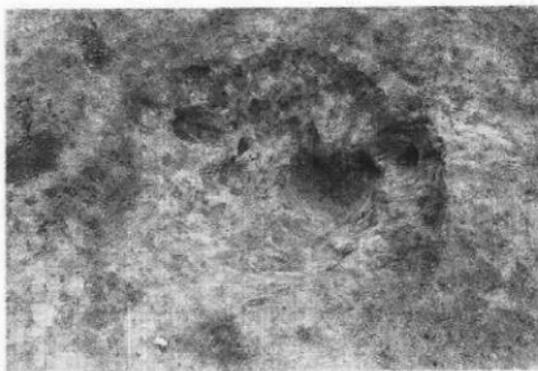
1. SK11完掘状況
(南から)



2. SK13完掘状況
(南西から)

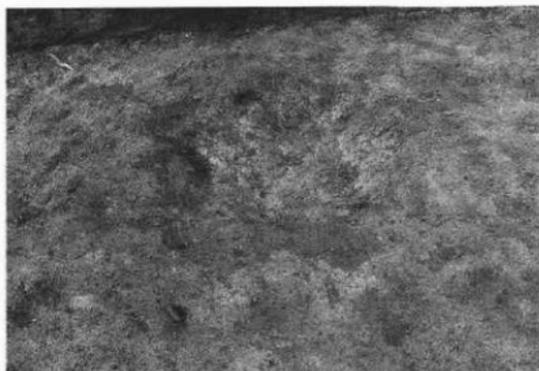


3. SK15完掘状況
(南から)

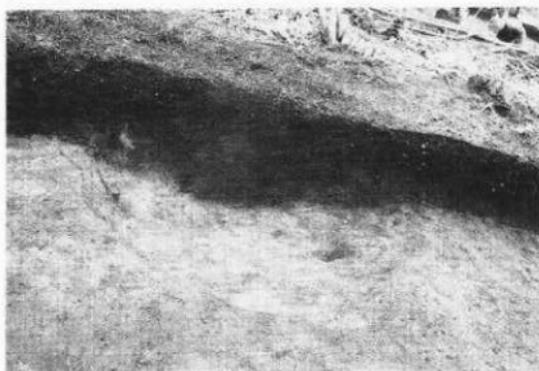




1. SK16土層断面
(東から)



2. SK16発掘状況
(東から)



3. SK24発掘状況
(西から)



1. SD01・02全景
及び土坑群（東から）



2. SD01土層断面
（西から）



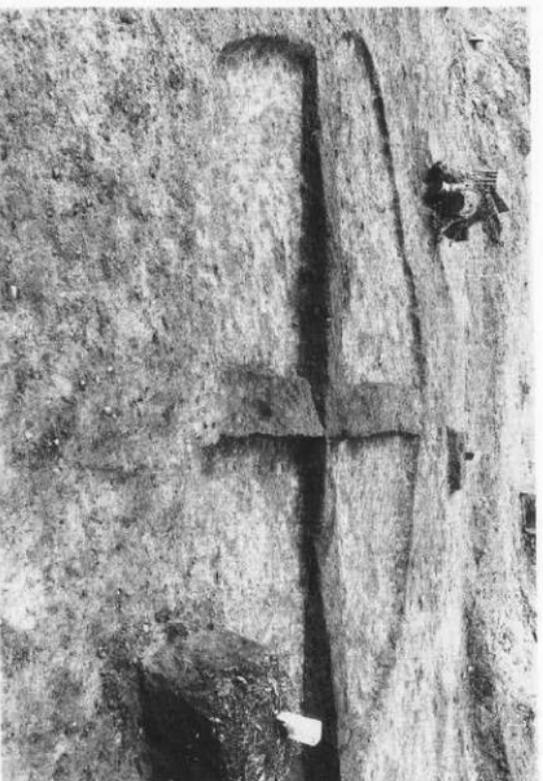
1. SI05発掘状況（西から）



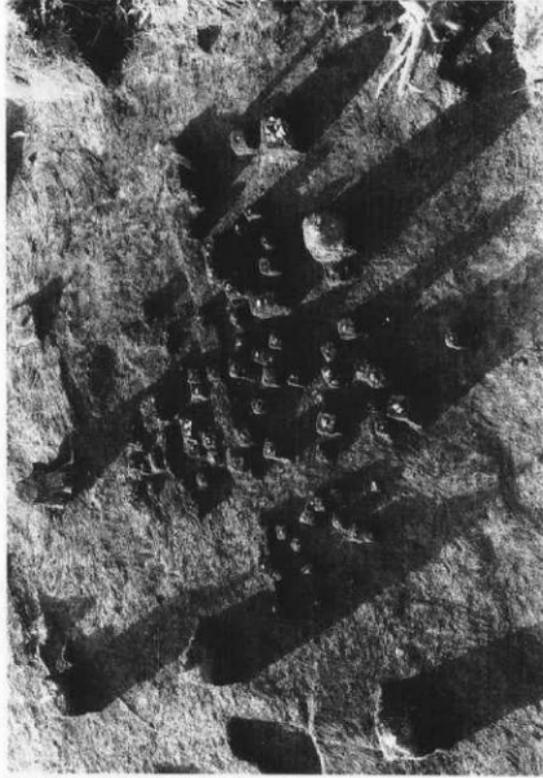
2. SI05地床炉検出状況（西から）



1. S117・SK28掘出状況 (東から)



2. S117土層断面 (東から)



1. SI17遺物出土状況（東から）



2. SI17・SK28発掘状況（東から）



1. SK10土層断面
(南から)



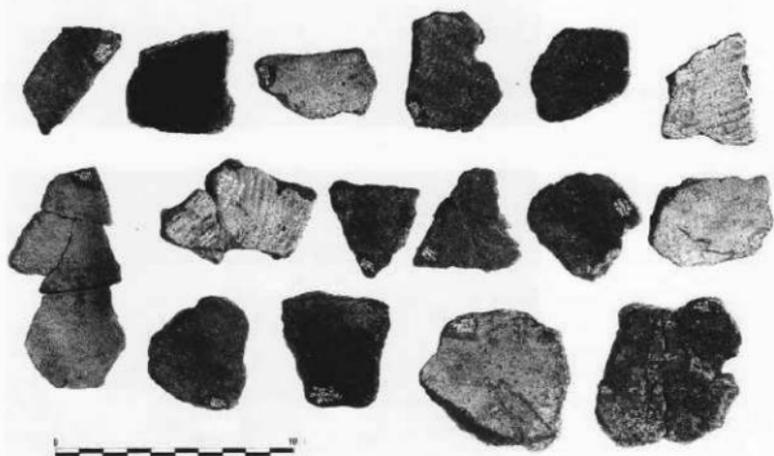
2. SK10土層状況
(北から)



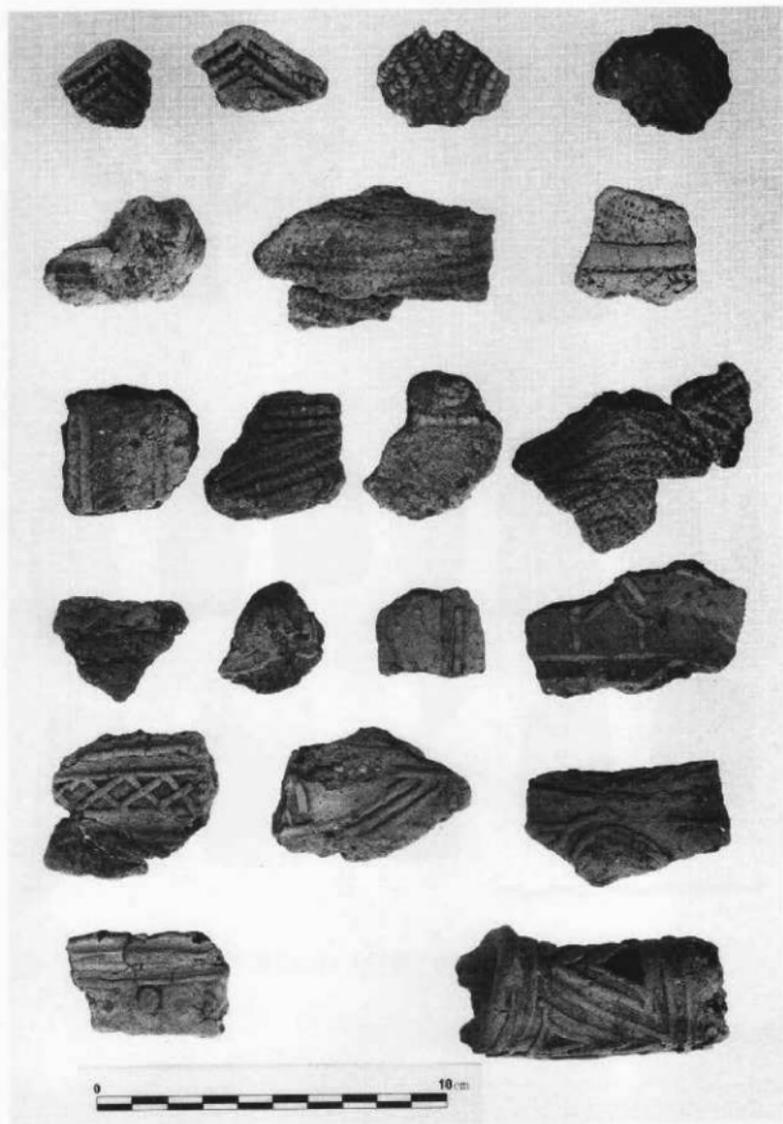
3. 調査風景



1. 董刈沢II遺跡第1群土器(表面)



2. 董刈沢II遺跡第1群土器(裏面)



萱刈沢Ⅱ遺跡第Ⅱ群土器（北陸系）



釜刈沢Ⅱ遺跡第Ⅲ群土器（上）・出土石器（下）

萱刈沢 II 遺跡の土壌に残存する脂肪の分析

株式会社ズコーシャ総合化学研究所 中野寛子、長田正宏
 帯広畜産大学畜産環境学科 中野益男、福島道広

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境条件の変化に対しては不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解していく。これまで生体成分を構成している有機物が完全な状態で遺存するのは、地下水の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、生体成分の一部、とくに脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年と云う長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。すべての動植物は体内に脂肪を持っており、これらを構成する脂肪酸およびステロールの組成は動植物の種によって異なる。この化学組成と考古学資料に遺存する脂肪の化学組成とを照合させることで「脂肪の持主」を特定しようとするのが残存脂肪分析である。この「残存脂肪分析法」を用いて、萱刈沢 II 遺跡の土壌の性格を解明しようとした。

1. 土壌試料

萱刈沢 II 遺跡遺構中の SKF08 土壌内外の埋上を各層別に採取した。SKF08 土壌の遺構内での配置および土壌内外での試料の採取位置を図 1-1、1-2 に示す。試料は土壌内の上部から底部に向かって I 層、III 層、V 層、X 層、XVII 層、XIX 層、XX 層、XXII 層から採取したものを各々、No.1, No.2, No.3, No.4, No.5, No.6, No.7, No.8 とし、土壌外の土壌底面直下 XXIII 層から採取したものを No.9 とした。

2. 残存脂肪の抽出

試料 837~999 g に 3 倍量のクロロホルム-メタノール（2:1）混液を加え、超音波浴槽中で処理し、得られた全抽出液に 1% 塩化バリウムを全抽出液量の 4 分の 1 容量分加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表 1 に示す。残存脂肪の抽出率は 0.001~0.0033%、平均 0.0018% であっ

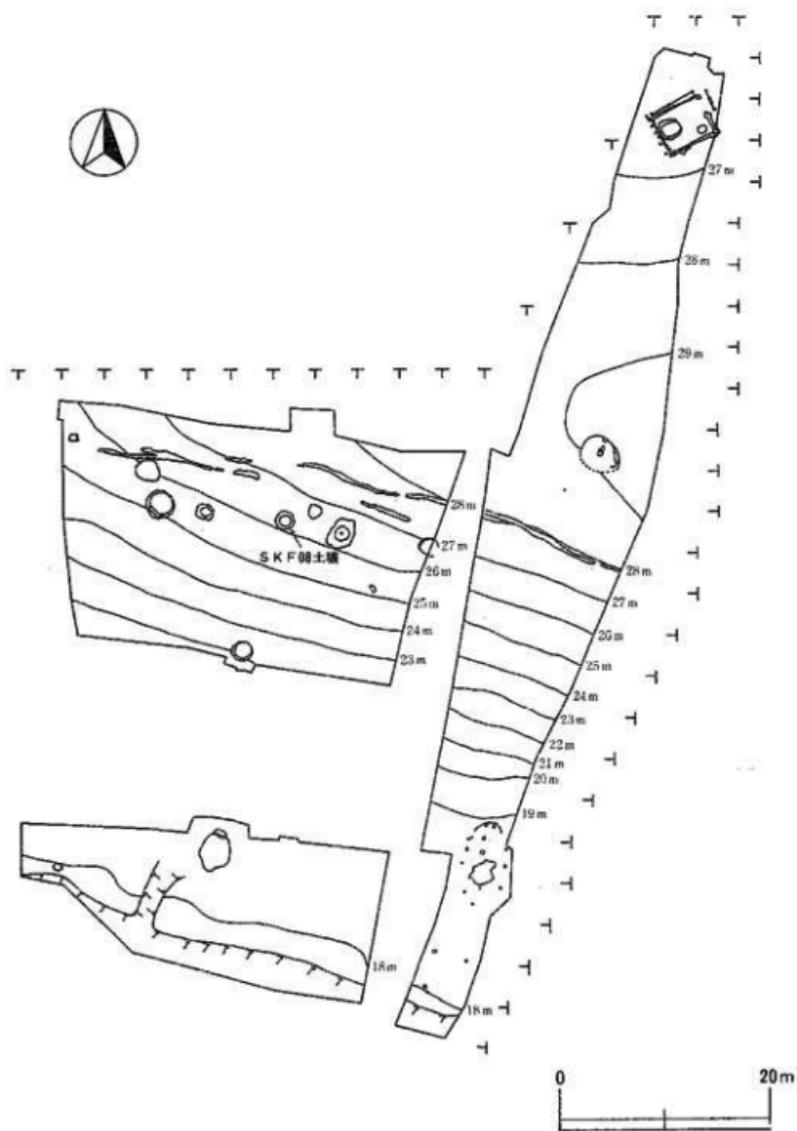
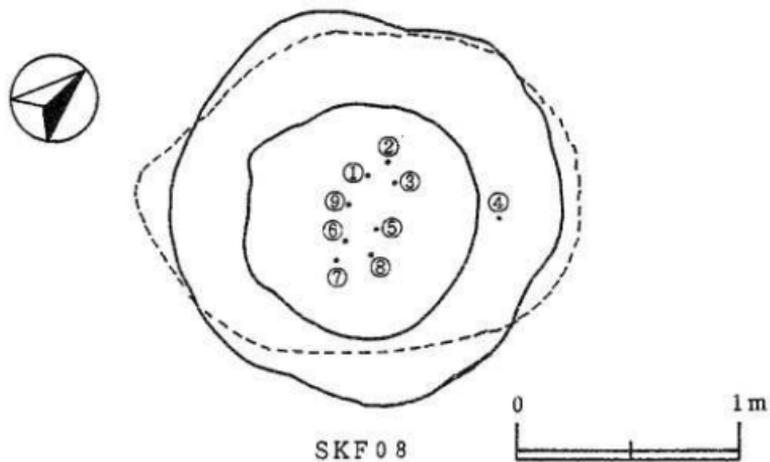


圖 1-1 壹刈沢 II 遺跡遺構配置圖



①～⑨：試料No.1～No.9

—：H=26.80m

図1-2 SKF08土壌内外の土壌試料採取地点

表1 土壌内外の土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	SKF08埋土 I 層	996.8	33.2	0.0003
2	SKF08埋土 III 層	996.5	208.	0.0021
3	SKF08埋土 V 層	991.7	17.5	0.0018
4	SKF08埋土 X 層	995.4	10.2	0.0010
5	SKF08埋土 X VII 層	997.1	10.3	0.0010
6	SKF08埋土 X IX 層	999.3	11.9	0.0012
7	SKF08埋土 X X 層	837.3	14.4	0.0017
8	SKF08埋土 X X II 層	998.3	19.6	0.0020
9	SKF08埋土 X X III 層	996.2	> 0.1	> 0.0001

表2 試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1	6.76	65.90	0.1026
2	6.04	58.81	0.1027
3	9.01	53.88	0.1672
4	6.79	57.68	0.1177
5	5.68	56.16	0.1011
6	4.37	68.41	0.0639
7	9.65	67.72	0.1425
8	4.03	60.45	0.0667
9	0.00	100.00	-

た。この値は北海道納内3遺跡の土壌内外の土壌試料の平均残存脂肪抽出率0.0032%とはほぼ同じで、福島県西方前遺跡の土壌内外の土壌試料の平均抽出率0.025%よりはかなり低く、秋田県手取清水遺跡や静岡県初音ヶ原B遺跡の土壌内外の土壌試料の平均抽出率0.0005%よりは少し高い値であった。また全国各地の遺跡土壌の平均抽出率0.02%と比較しても低い値であったが分析には十分量であった。

残存脂肪をヘキサソールエステル酢酸を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪種は遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリグリセリド、ステロール、炭水化物の順に検出された。

3. 残存脂肪の脂肪酸組成

試料の残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125°Cで2時間封管中でメタノール分解し、生成した脂肪酸メチルエステルを薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。

試料の残存脂肪の脂肪酸組成を図2に示す。残存脂肪から12種類の脂肪酸を検出した。このうち、パルミチン酸(C16:0)、パルミトレイン酸(C16:1)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ベヘン酸(C22:0)、リグノセリン酸(C24:0)など9種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析で同定した。試料No.1からNo.8の脂肪酸組成をみると、オレイン酸、パルミチン酸、パルミトレイン酸、リノール酸が主成分で、これらの脂肪酸が全体の約68~87%を占めていた。一般にオレイン酸を頂点にして山型を描く脂肪酸組成のパターンは植物腐植土に多くみられるものである。これらの脂肪酸の他に、高等植物の臓器、血液、神経組織に多く存在するベヘン酸、リグノセリン酸等の高級脂肪酸も約2~18%分布していた。土壌底面の試料No.8には、ベヘン酸7.8%、リグノセリン酸9.9%と高級脂肪酸の分布割合が高いが、後で述べるコレステロールは4%と低い。これは、植物の葉の表面、種子外殻を構成するワックス成分に由来すると考えられる。土壌底面直下の試料No.9は他の試料とは異なる脂肪酸パターンを示していた。主成分はパルミチン酸で、次にオレイン酸、パルミトレイン酸、ステアリン酸の順で多く分布していた。またベヘン酸やリグノセリン酸等の高級脂肪酸は全く分布していなかった。このことは、土壌外の土壌底面直下のXIII層から採取された試料No.9が他の土壌内試料とは性質を異にしていることを示唆している。従って、土壌底面は試料No.8の土層にあることが確認出来たことになる。

4. 残存脂肪のステロール組成

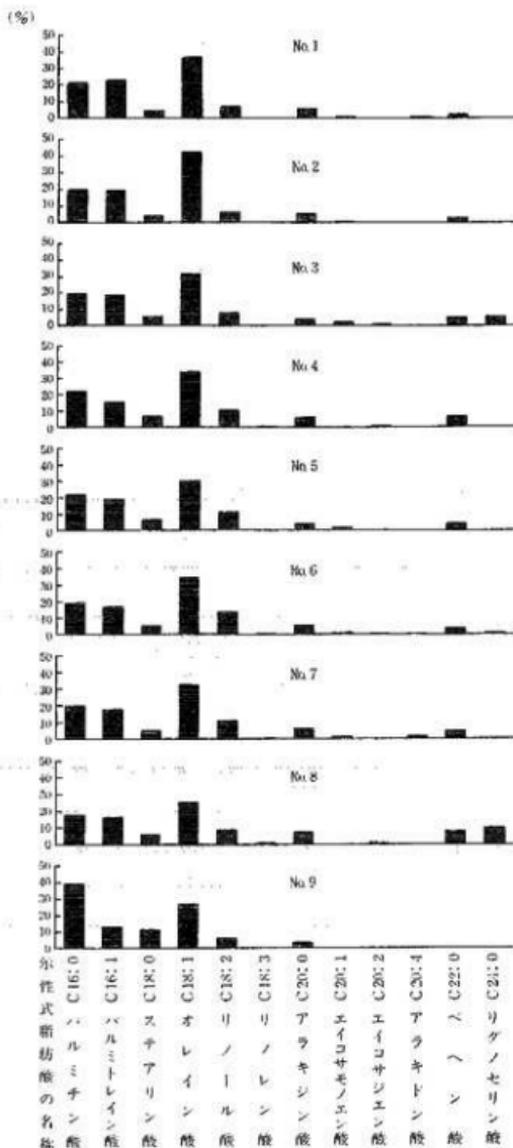


図2 土壌内外の土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成

試料に残存する脂肪からステロールをヘキサソ-エーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジソ-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。

試料中の残存脂肪のステロール組成を図3に示す。残存脂肪から1~15種類のステロールを検出した。このうち、コレステロール、エルゴステロール、カンベステロール、スチグマステロール、シトステロールなど7種類のステロールをガスクロマトグラフィー-質量分析で同定した。

試料No.1からNo.8のいずれの試料にも植物由来のシトステロールが約54~68%と高率で分布し、動物に特徴的に見られるコレステロールが約4~10%分布していた。先の脂肪酸分析で動物油脂の分布が見られないことから、このコレステロールは植物の葉の表面、木の実、種子の外殻を構成する微量のコレステロールに由来するものと推定される。土壌底面直下試料のNo.9ではシトステロールが100%を占めていた。これらのステロールのうち、コレステロールとシトステロールの分布比を表2に示した。いずれの試料もその分布比は0.1前後を示している。一般に動物遺体の存在を示す分布比の指標値は土壌で0.6以上である。従って、これらの数値はいずれの試料も植物由来のものであることを示唆している。この結果は、先の脂肪酸分析の成績ともよく一致している。

5.脂肪酸組成からの数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成を重回帰分析にかけ、相関行列距離を基にした群平均によるクラスター分析の結果を図4に示す。樹状構造図に見られるように、試料No.1からNo.7までは相関行列距離が0.1以下で同じA群内にあり、同じ性質の脂肪が残存していたことを示している。試料No.8はA群に近いB群を形成している。試料No.9はその距離が離れていて別の系統、C群に属しており、他の試料とは性質が異なることを示している。

6.脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために中級脂肪酸(炭素数16のバルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで)と高級脂肪酸(炭素数20のアラキジン酸以上)との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり、種特異性相関を求めた。この比例配分により、第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、胎盤、臓器等に由来する脂肪が分布し、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪が分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

試料の残存脂肪から求めた相関図を図5に示す。試料No.1からNo.7はA群を、試料No.8はB群を形成し、いずれも第3象限内に分布していた。第3象限内での分布は植物腐植土であることを示唆している。試料No.9はC群を形成し、第2象限の原点から離れた第3象限に近い部分に位置していた。この位置には、A群およびB群とは多少性質の異なる植物遺体が分布していたことを示唆している。

7. 総括

萱刈沢II遺跡遺構中のSKF08土壌内外の埋土から残存脂肪を抽出し、残存脂肪中の脂肪酸およびステロールの分析を行った。その結果、試料No.1からNo.8の土壌内試料も、試料No.9の土壌底面直下の土壌外試料も植物腐植土であり、遺体、遺骨などを埋葬した土壌墓ではないと思われる。今回の分析は数ある土壌中、ただ1カ所の土壌から試料を採取したので、他の土壌との関連や、他の土壌の性格が不明で遺構全体を通しての土壌の性格判定は困難であった。しかし、SKF08土壌は埋葬以外の他の目的、例えば採集食品の貯蔵穴などのために掘った土壌とも推定でき、後に自然の植物腐植土で覆われて行ったものである可能性が高い。

参考文献

- (1) 中野益男：「残存脂肪分析の現状」、『歴史公論』、第10巻(6)、1984、pp124。
- (2) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「納内3遺跡の遺構群に残存する脂肪の分析」、『納内3遺跡』、北海道埋蔵文化財センター調査報告書、第60集、1988、pp141。
- (3) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「西方前遺跡の配石遺構に残存する脂肪の分析」、『未発表』
- (4) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「手取清水遺跡遺構に残存する脂肪の分析」『未発表』
- (5) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「初音カ原B遺跡の土壌に残存する脂肪の分析」、『未発表』
- (6) 中野益男、伊賀 啓、根岸 孝、安本教博、畑 宏明、矢吹健男、佐原 真、田中 琢：「古代遺跡に残存する脂肪の分析」、『脂質生化学研究』、第26巻、1984、pp40。
- (7) M.Nakano and W.Fischer: 「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021」、『Hoppe-Seylers Z.Physiol.Chem.』、358巻、1977、pp1439。

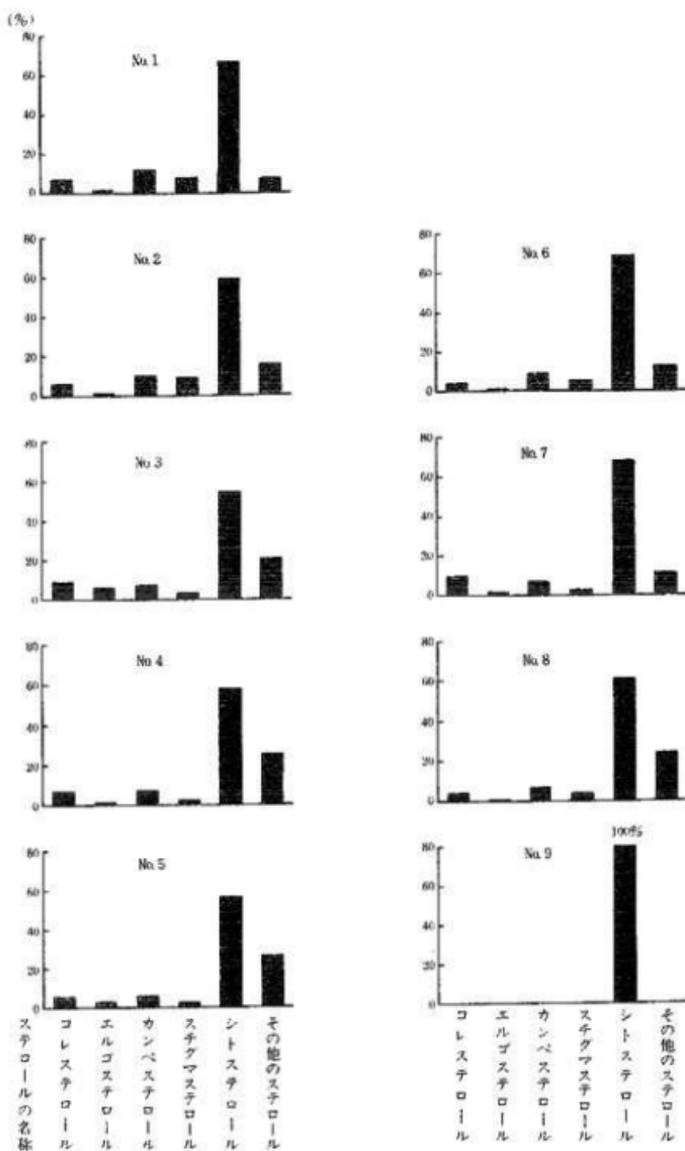


図3 土壌内外土壌試料に残存する脂肪のステロール組成

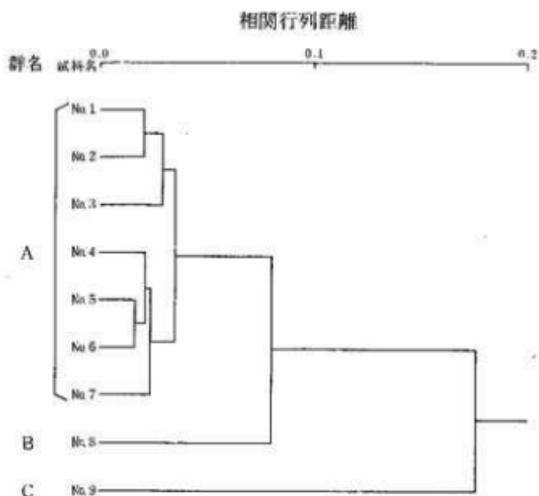


図4 土壌内外の土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

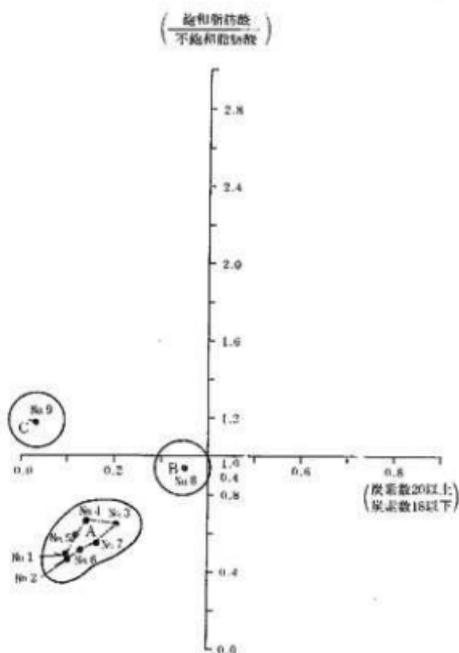


図5 土壌内外の土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関